356
302
356-3021
12005014103 96

文學士　雀部顯宜著

婦人の心理と婦德の基礎

東京　北文館發行

昭和九・一・四　帝國圖書館

356-302

序

本書は、私が嘗て奈良女子高等師範學校教授として奉職中、文部省の依囑により、同校に於て開催せられたる、夏期講習會に於て、「女性の心理一斑」と題し講述したるものゝ草稿を修正し、「女性の心理」と題して公刊したるものを、今回更らに改版增訂したるものにして、書中女性の心理を說くと共に、婦德の涵養に留意する所も少くないので、此際書名を「婦人の心理と婦德の基礎」と改題して出版したのである。

從來婦人の心理に關する著書、本邦に於ては其類甚だ少く、特に組織的に記述せられたるものは、下田次郎君の「女子敎育」位のもので、他に之ぞと云ふ著述もないようであるのに、特に目下婦人の思想問題の論議が喧囂せられつゝある折柄、本

書出版の必要も皆無とは云はれまじく、一般に婦人問題に興味を有せらるゝ方なり、特に女子教育に從事せらるゝ方々の多少たりとも參考になれば、私の目的も達せられ、幸福の至りと存ずる次第であります。

私は前著の序文にも述べて置た通り、婦人の心理を講述するに就ては、なるべく多くの著書を參考し、特に實驗的研究の結果を調査し、且つ婦人の身心各方面に亘りて研究する所あり、さうして獨斷的な偏見的推論を避けるように努めたつもりであるけれども、私の淺學寡聞なる、特に生物學、人類學、社會學等の知識に於て大に缺くる所あるので、或は事實を誤つたり、說明の正鵠を失するものも少なからぬことゝ思ふので、讀者各位は卷末に揭げた主なる參考書に就き直接に研究せられ、さうして本書の不充分な所を補ひ、誤れる所を正されなば、獨り私の幸とするばかりでなく、婦人研究の上に將又女子教育の上に大なる稗益を與へることであらうと思ひます。

尙ほ本書は、なるべく多く婦人の方にも閱讀の榮を得たく、依て高等女學校卒業程度で未だ普通心理學の充分なる知識を有たれない方にも參考になり、さうして一般に婦人方の見識を高め、自覺を促したいと思つたので、出來る限り平易な通俗的のものに編述することに致しました、其故若し心理學研究に志ある有識者に於て、本書の批判を辱うするようなことがあつたら、どうか其邊は充分に諒察せられんことを希望する次第である。そは兎に角今や女子教育は益々盛んになり、婦人問題も大に論議せらるゝ場合とて、本書の如き至て平易で不充分なものながら、幸にして女性研究の一助となり、世人の參考に供せらるゝようなことが出來たら、私の大なる光榮とする所であります。

昭和九年七月

著者識

目次

緒論

第一章　婦人心理の研究……一

心理學の分科……一。婦人心理の研究……二。婦人自身の研究……六。

第二章　男女の生物學的基礎……一二

生物の特質……一二。生殖作用の進化……一五。兩性分化の意義……一八。男女の道德的意義……二〇。

第三章　男女の有機的差異……二六

男女の根本的差異……二六。男女體質上の差異……二八。體質上の差異に關する問題……六三。
第一篇　知識篇……七〇
第四章　感覺……七〇
感覺の意義……七〇。味覺……七一。嗅覺……七三。皮膚覺……七五。聽覺……七八。視覺……七九。氣象に關する感覺……八三。擦ばい感覺……八五。
第五章　知覺作用……八九
知覺作用の意義……八九。知覺の性的比較……九〇。女性知覺力の生物學的基礎……九四。女性知覺の鋭敏なることの利益……九五。錯覺と幻覺の性的差異……九七。
第六章　記憶及び想像作用……一〇一
記憶及び想像作用の意義……一〇一。記憶作用の性的差異……一〇四。想像作用に於ける女子の特色……一一五。
第七章　思考作用……一二〇
思考作用の意義……一二〇。女性の思考作用……一二二。概念作用……一二八。判斷作用……一三〇。推理作用……一四三。
第二篇　感情篇……一六二
第八章　女性と感情……一六二

女性はより多く感情的なり……一六二。女性の感情的なることに就ての問題……一七三。感情の種類……一八〇。

第九章　情　緒……一八二

第一　羞　耻　心……一八二

羞耻心の説明……一八二。スペンサーの説……一八三。ゼームスの説……一八六。エリスの説……一八五。何故羞耻心は女性に強きや……一九五。文明の進歩と羞耻心……二〇〇。

第二　嫉　妬　心……二〇二

嫉妬心の説明……二〇二。女性の嫉妬心に富める理由……二〇八。嫉妬心の道徳的本分……二一八。

第三　愛情及び同情……二二〇

愛情及び同情の説明……二二〇。女性愛情の範圍……二二三。子女に對する母親の愛情……二二五。女性間に於ける友愛の情……二二八。女性愛情の特色……二二九。

第十章　情　操……二三五

第一　知識的情操……二三五

知識的情操の説明……二三五。知識的情操に於ける女性の特色……二四〇。女子と虚僞の言行……二四六。

第二　審美的情操……二五五

審美的情操の說明……二五五。女性の審美心……二五九。原始的文化に於ける貢獻……二六三。

第三　倫理的情操……二六七

倫理的情操の說明……二六七。女性の倫理的情操……二七一。道德律の發達に於ける男女兩性の關係……二七八。

第四　宗教的情操……二八三

宗教的情操の說明……二八三。宗教心の性的比較……二八五。女性宗教心の價値……二九六。

第三篇　意志篇……二九九

第十一章　意志の概說……二九九

意志の發達……二九九。行爲に思慮の伴ふ事情……三〇三。行爲の分析……三〇九。

第十二章　女性の意志……三一三

女性の意志は薄弱なり……三一三。女性意力の發現……三二八。女性意力の涵養……三三三。

第十三章　職業的才能に關する男女の差異……三三六

女事務員の才能……三三六。女事務員の俸給……三四〇。職業婦人に對する注意……三四一。

第十四章　女性と犯罪……三四五

女性犯罪者の數……三四五。女性犯罪の種類……三五二。犯罪

者の年齢……三五五。再犯の多少……三五七。女子の獨立的生活と犯罪との關係……三五九。女性犯罪の原因……三六二。

第十五章　女性の自殺……三六九

自殺者の數……三六九。自殺の原因……三七五。自殺の方法……三八五。

第四篇　人格篇……三九二

第十六章　女性の人格……三九二

人格の概說……三九二。女性の人格……三九四。婦人の人格修養……三九八。

第十七章　婦人の本分……四〇九

婦人本分の性質……四〇九。婦人の本分に關する諸說……四一〇。婦人の生理的本分……四一四。婦人の家族的本分……四一七。婦人の社會的本分……四三九。

結論……四四六

第十八章　男女優劣論……四四六

女性劣等說……四四六。男性中心說……四四七。女性は兒童型なり……四五二。女性は野蠻人に類似す……四六八。

婦人の心理と婦德の基礎

文學士　雀部顯宜著

緒論

第一章　婦人心理の研究

一　心理學の分科　心理學とは云ふ迄もなく、心とか精神とか、又は意識と稱せらるゝ特殊の現象に就て研究するものであるが、若し科學を自然科學と精神科學とに區分するなら、無論精神科學に屬すべきものである。所がその科學として研究せられ、組織的の知識となつたのは、比較的に新しいことである。若し獨逸のヘルバルトを以て、科學的心理學の元祖と云ふならば、彼の著「科學

としての心理學」の世に公にせられたのは、千八百二十四年のことであるから、今から雜と百年餘り前のことである。然るに其の後自然科學の發達につれて、心理學も長足の進歩を遂げ、特に獨逸にヴント、米國にゼームス等の碩學輩出し、各研究の結果を發表し、劃期的の大著述をも完成したので、爲に自然科學の發達と相桔抗するに足るの壯觀を呈するに至つたのである。それで最近に至り斯學の研究は、歐米各國に於て益々旺盛となり、隨て普通心理學の外に種々なる分科を生じ、兒童心理學、動物心理學、變態心理學、民族心理學、實驗心理學、生理的心理學等を始とし、更に又囚人の心理學、商賣の心理學等特殊なる精神作用の研究に志すものも起て來たやうな譯で、又盛なりと云ふべきだが、これと同時に、性の心理學、男女の比較心理學、特に婦人の心理を研究する人達も現はれ、それ〴〵別箇の心理學を樹立せんとするに至つた次第である。

二　婦人心理の研究　今雜と婦人の心理研究の由來を述べんに、そは隨分古くから學者の試みた所で、希臘の古代に於て、プレトーやアリストートルも、既にその著書中に、女性に就て說述して居る所もあり、降て中世になつては、當時の神學者間で問題になつたものであり、更に近世になつては、屢々文學者や哲學者は元より醫學者などの筆頭に上つたものであるが、特に哲學者の婦人論として、世人の注意を喚起したのは、恐らく獨逸のショッペンハウエルが、千八百五十一年に公にした「婦人論」と、英國のジョン・スチュアルト・ミルが、千八百六十九年に著はした「婦人の服從」とであらう。之等の著作は婦人論として有名なものになつたが、此の二人は獨英と國を異にしてゐるのみならず、ショ氏は徹頭徹尾女性を罵倒し讒謗至らざるなしと云ふ有樣であるが、ミルは之に反して何所までも婦人に敬意を表し、その味方となり熱心にその權利を主張し、特に參政權の賦與、男女平等の取扱につき、その必要を絶叫した程で、兩者の所說感想全然反對になつて居るのも面白い對照である。加ふるに、ショ氏は元來素行の修まらなかつた人で、曾て女優に心を寄せて拒絶せられたこともあり、又その母とも不和であつたと云はれて居るが、之に反してミルは嚴格なる學者であり、又その妻は彼の戀人であつたが、聰明の譽れ高かりし賢夫人であつて、夫婦間も至極圓滿であつたと云ふことであつたので、兩者の性質なり人格、特に婦人に對する異りたる經驗が、兩者の婦人觀にも影響したかとも想像されるのである。所が今日でも一般に婦人を尊敬する人達

の家庭には、どうも賢夫人が控へて居るようであり、之に反して一般に婦人を輕蔑する方々の妻君は、往々にしてヒステリーの骨頂であつたりするのも、能く見受けられることである。そは兎も角其の後女性に就て種々意見を發表した人も少くないが、多くは獨斷的の意見か、又は斷片的の感想であつたり、特に女權擴張論者の特別なる目的に基いたもので、どうも偏見に囚はれ公平を失する傾きもないではない。然るに英人ハベロック・エリスは、今から三十餘年前に「男と女」と題する著書を公にし、以て生物學、人類學、心理學、社會學等各方面に亙る確實なる知識を根據として、男女の特徴を明かにし、隨て女性の特質、心理を說いたが、更に進んで「性の心理學」と題する六卷に亙る大著述を完成し、以て這般の研究に新生面を開拓し、暗夜に一大光明を與へられた感もある次第で、永く斯學の權威として尊重せらるべきものである。これと前後して獨逸のウェントは「婦人の精神」と稱する書を著はした。これは僅に百三十頁ばかりの小冊子に過ぎないけれども、論旨堅實簡明を以て其の特色として居るようであり、又佛國のマリオンも「婦人の心理學」を公にしてゐるが、そが立論の態度如何にも公平であり、所說實に穩健、特に教育者の立場から婦德の涵養に留意

マリオン

し、女子教育の目的にも及んで居るので、至極適當なる參考書である。引き續き獨人ハイマンの著はした同名の書も出たが、之は種々新しい研究の結果をも參考して居る、組織整然たる能く纏つたものであるように見受けた。又米國シカゴ大學の、トーマス教授の著はした「性と社會」と云ふ書物は、純粹なる心理學書ではないが、女性の特質なり、社會の發達に於ける婦人の關係などを知るには最も便利な書物である。尙ほ一言したいことは、千九百八年の頃私は米國に留學し、クラーク大學で教を受けた恩師、當時の總長故スタンレー・ホール先生の講演である。その頃先生は心理學に關する多くの特殊な題目に就て講義せられ、其の中に性の心理に關するものもあり、早くから此の方面の研究にも著手せられ、他の大學に類例のない講義を試みて居られたが、完成に至らなかつたものか、其の後之を世に公にせられないで長逝されたのは、斯學發達のため吾々の寔に遺憾とする所であります。

斯樣な次第で、エリスを初めとし、近來性の心理なり、女性の心理に關する著書は續々と出版されて居るが、要するに、男女性を異にする所からして、體格なり體質も一樣でなく、又社會上の地位

ハイマン

關係も同じ譯でないから、女性の性情と云ふものは、自ら男性と異るものあり、爲に自然の任務卽ち天職も決して同一ではない、隨て教育上にも大に留意すべき點少くないので、吾々は種々の方面から女性に就て研究し、特にそが心理上の特質を闡明するの必要を感ずるものである。然るに從來の研究者は、多く男子であつたから、元より綿密な觀察と愼重な態度を以て從事されたことゝは思ふけれども、つまり男子から見た婦人觀と云ふに止り、女性自身の研究、內省に據つたものではなく、婦人自身の告白感想に基いたものでないから、自然論據の不確實な點もあつたり、事實の認定を誤つて居るようなこともあるではないかと云ふ疑念も挾まれるのである。其故此の點を補ふには、是非共女流心理學者自身の研究、婦人自身の婦人觀に據らねばならぬと思ふが、幸ひ近來婦人の手になる著述も數多く公にされて居るので、私は之等の書物に據り、婦人達の意見を窺ひ、之を參考することにした。依て今その主要なるものに就き、概略其趣旨を紹介して置かう。

三　婦人自身の研究　エルラ・ホイーラー・ウイルコックスと云ふ米國女流文學者の著述（一八九三年）で「男子、婦人及び情緒」と題するものがある。之は戀愛なり友情に關する男女の特質、兩性間の交際、女子の缺點、教育上の注意等に就き、斷片的に種々とその感想を述べ、要するに、婦人の爲に其の心得を說いたものである。又ラウラ・マルホルムと云ふ、文學者らしい獨逸婦人の著はした（英譯一八八九年）「婦人の心理」と云ふ書物がある。此書は心理とは云ふものゝ、全然組織的、科學的のものではなく、寧ろ婦人生活なり婦人問題に關する隨筆と云ふか、評論と云ふか、兎に角女性に關する種々なる意見の集錄であるが、形容の多い皮肉な言辭に富み、觀察の鋭利なのが特色であり、それで所謂女權論者には反對で、要するに、婦人の天職は母たることにあり、愛他的犧牲的の任務に當るべきものなることを力說して居る。更に心理學を專攻せられた、米國マウントホリョク大學の教授なる、ヘレン・ビー・タムソン女史は、嘗てシカゴ大學の心理實驗室で、男女の學生各二十五人に就て精密なる比較研究を遂げ之を「性の心的特質」と題して、千九百三年に出版せられて居る。之は純然たる實驗心理の研究であるから、研究者の男女によりて、その結果に影響する譯はない筈だが、女史は、男女による知能の差異、卽ち一般に信用されて居る、女性劣等說には反對であるらしいので、勤もすると殊更女性の爲に辯護を試み、男性に對しその何等遜色なきことを暗々

裡に表示せられてゐるような樣子も見え、態度が何となく公平でないようにも思はれるが、さりとて實驗共の物は精細綿密を極めたもので、何等間然する所もないようである。共故此種の研究としては、確かに唯一の典據とすべきもので、夙に獨逸語にも飜譯されて居る。

又英國婦人で、アネット・エム・ビー・ミーキンの著はした(一九〇七年)「過渡期に於ける婦人」と題する書物がある。此著者は英國人類學協會の會員と云ふことであるから、此方面の研究者であり、純然たる科學者であるように思はれるが、世界各國を旅行し、日本にも立寄られたようであり、それで各國に婦人の友人をもつて居たので、その人々各自の觀察をも知り、衆知を聚める便宜があり、それが大に參考になつたように序文に書いて居る。で各方面に亙つて婦人問題に論及し、特に「婦人の心理」と云ふ特別の章もあつて、その特質につき說いて居るが、ロンブローゾや、メービウスの女性劣等論には反對で、女子も教育に依り、決して男子に劣るものでないことを痛論し、その爲に男女共同教育の必要迄述べて居る。それから此人は舊敎徒でもあるのか、婦人に對する舊敎の態度を賞讃し、ルーテルなどを非難するような口吻を屢々漏らして居る。同じく英國婦人で、シー・ギヤスクオイン・ハートレーと云ふペンネームで、實はウオルター・エム・ギヤリチャン夫人と云ふのが、千九百十三年に「婦人に關する眞理」と云ふ、かなり大部な書物を著はして居る。此婦人は英國で女學校の敎頭を勤めて居たと云ふことであるから、之と云ふ專門の學識もない、一女敎師に過ぎなかつた人かも知れんが、夙に女性研究に志し、以來古今の文獻を涉獵し、諸家の學說に通曉し、這般の研究には造詣頗る深きものあり、それで此書の外に「原始社會に於ける婦人の地位」「婦權の時代」等の著述もあり、爲に英國の讀書界では、此方面の一大權威と認められて居るようである。所で此書物は、生物學上竝に歷史上から婦人の特質を論述し、心理專門のものではないが、特に男女の心理的差異を說いた部分もあるので、女性心理の研究には大に參考となるものである。所で著者は「人種の生產、人種體と人種心の守護者たるを以て」婦人の任務となし、此の點から婦人の解放自由を力說し、男女心身の性的差異を肯定するも、婦人の心情必ずしも劣等にあらざることを主張して居る。

今一つ揭げて置きたいのは、有名な伊多利の犯罪學者である、ロンブローゾの令孃である、ギナ・

ロンブローゾ孃の著はした(英譯一九二二年)「婦人の心」である。孃は醫學博士の學位を有し、嚴君在世中は共助手でもあり、共働者でもあつたが、今日では立派に其遺業を繼ぎ、特に犯罪的人類學を專門として居る、世界有數の女流科學者であるように見受けられるのである。それで此方面の著書は澤山あるようだが、孃は又婦人問題にも注意して居られるものと見え、夙に婦人參政權に關する著書もあり、續いて前述の書物を公にせられたのである。然るに此の書はその序文に斷はつてある通り、何も心理學や哲學の研究を根據とした、科學的系統的のものではなく、單に謙遜なる一科學者の試みた、自然的な併し誠實な觀察の結果を記述したに過ぎないのである。尙ほ著者は、此書によりて、婦人心理學の建設上更に一石を積み重さねようとするのでなく、只だ人をして能く女性を諒解せしむる爲に、女心の實際的解剖を示めすに止るものだと云ふて居る。斯くてロ孃は、婦人問題の解決は婦人の本性を知るにあり、而してそは男子の自己中心に對する、外物中心であるとなし、玆に兩者の間に全然區別せらるべき根本的差異を認め、爲に女子の本性は美術や科學の方面に存せず、その溫和なる情緒に依りて人を愛し、その高潔なる婦德に依りて人を化し、その犧牲的行爲に依りて人を助けるにありとなし、進んで婦人の知能を說き愛情を述べ、正義自由等の諸問題に及んで居る。斯樣にしてその所說頗る保守的傾向に流れて居るようであるけれども、又婦人の本質を論ずるあたりは、大に傾聽するに足るものがあるように思はれる。

斯の如く、婦人の性情に關しては、獨り男子間に異論のあるばかりでなく、女子自身の間にも相容れない反對の意見もあること故、吾々女性研究者は、虛心坦懷、自己の感情や偏見に囚はれず、冷靜なる態度を以て、公平なる觀察により、確實なる判斷を下すことに注意しなければならぬ。

第二章　男女の生物學的基礎

一　生物の特質　抑も生物とは生命を有する物の義であるが、生命のある所には必ずや生活現象の伴ふものである。而して生活現象とは、感覺、運動、榮養、代謝、生殖等の機能を云ふのであるが、其中でも新陳代謝、生長、生殖の三作用は、その主要なものであるから、之等を以て生物を無生物から區別する特質と認定してよろしい。それでは新陳代謝とは如何なる機能であるかと云ふに、一體生物はその生命を持續してゆくにつき、外部から榮養分を攝取し、さうして體內にて惹起す所の化學的なり物理的の作用の事である。之を便宜上二方面に分けて說明する、卽ち其一は同化作用で、外部から攝取する種々なる物質を自體の成分と同一のものに變化又は消化して、之を自體に吸收し、以て生活の原動力を作る所の、貯蓄的又は建設的「アナボリツク」の作用であり、他の一は異化作用で、卽ち吸收した所の榮養分を消費し、分解して老廢物を排泄する所の、消費的、又は破壞的「カタボリツク」の作用である。それで之等二個の作用は交代的と云ふか、連續的と云ふか相互に關聯して起るものであるから、兩者を合せて新陳代謝の機能と稱へるのである。

The Evolution of Sex

斯樣にして、生物は其生命を持續してゆくが、その間に成長と發達を營むものである。成長と云ふは、生物體の膨大することであり、發達と云ふは、そが組織の複雜になることであるが、通例兩者を一纏めにして成長と云ふて居る。そは兎も角這般の現象も亦無生物には見られないことであり、隨て生物の主要なる一特徵と見做すべきものである。然るに、ゲッデスが其著「性の進化」中に引用して居る、リンネウスの有名なる警句に、「獨り生物體のみが成長力を有する譯ではなく、礦物の結晶も亦或るものを中心として、順序正しく且つ複雜なる成長を遂げ、さうして自體の膨大を來す」と云ふのがあるが、併し礦物は單に外面に自體と同一なる物質を添加して膨大するに止り、何も生物のように體內に於て新陳代謝を行ふものでなく、又內部から自然に成長する譯でもないから、要するに、成長は生物に限られたる現象と云ふて差支ない。それで生物はそが生活の爲に攝取する榮養分の供給が何時も實際に必要とする程度を超過するようになつて居るので、その超過が成長の要件となつて居る、卽ち成長とは有機體に於ける資本の增加であつて、つまり支出より收入

の多い場合、換言すれば、貯蓄建設が消費破壞より優勢なる時に出來るものである。

然るに成長には限りがある。即ち一般に生物には一定の大さがあつて、その程度迄は成長するが、それ以上には延びないものである。依て生物は成長の代はりに、生殖を營むことゝなるのである。それなら生殖とは如何なる作用であるかと云ふに、何れの生物でも一定の成長時期に達すると、自己と同樣のものを造り出すこと、換言すれば、自分のためと云ふのでなくして、その種の保存繼續を營むようになるもので、之を生物の生殖作用と稱へるのである。其故生物は自分自身の一個體としての成長は、或る時期に至ると中止し、又何時迄も生存する譯にはゆかぬが、自分の成長を自分の體外に移轉又は延長して、別箇の存在物を造り、之に依りて自己の生命をば間接ではあるが、比較的永久に傳へんとするものである。之を以て生殖も亦一種の成長であり、榮養超過の結果に外ならぬけれども、その目的が種の保續發展にあるので、爲に個體の成長と相對立して、生物の特徴とするのである。所が生物には、這般の生成と生殖とが、律動的に起て居ることを見逃しては ならぬ。今多年生植物に就て見るに、一年の大部分は專ら成長を營んで居るが、或る季節になると花を開き果を結び、毎年同じことを繰り返して居る。又多くの動物も或る期間は全く無性的であるが、所謂交尾期になると、旺んに性的衝動を發現し、植物と同じように、生殖の周期的到來を現はして居る。之を以て、「榮養の時期と生殖の到來、換言すれば、飢餓と愛情とは、生活上に於ける潮の滿干で、睡眠と覺醒、休息と勞働、建設と破壞と同じように、生活現象の根本原理たる、「アナボリック」と「カタボリック」の相互的作用の、特殊なる一表現である」と、ゲッデスは述べて居る。

二　生殖作用の進化　前述の如く、生物は或る程度に迄成長すると生殖を營み、兩者對立して生活上の律動を呈して居るものであるが、そが生殖の方法は必ずしも一樣ではなく、否「アミーバ」の如き原生動物から、人類の如き高等動物に至る間には、種々なる段階を經過し、明かに進化の過程を示めして居るものである。で其最も簡單なるものは、主として原生動物に於て見らるゝ所のもので、未だ雌雄の性的差別のない、所謂無性生殖である。然るに無性生殖にも二通りあつて、分裂法と出芽法とに區分せられる。分裂法と云ふのは一箇の細胞體が、二箇の個體に分體又は分裂するものであるが、此場合に母體は消滅して殘留せず、又新生體は初から同大同形で何等の變化を見

ないものである。又出芽法と云ふは、一箇の生物體の表面に、小突起即ち芽を出し、それが緊縮作用（コンストリクション）に依りて、遂には母體から離れ、後全く獨立した存在となるものである。此場合に母體は決して消滅することなく依然として殘留し、又新生體は母體より著しく小さく、爲に母子の區別は判然として居るが、分離して後漸次成長し、或る時期に至て母體と同じように生殖を營み得るようになるものである。元より新生體は母體と何等變つた所はないけれども、分裂法より一歩進んだものとなつて居る。

然るに生物の進化につれ、前述の如き無性生殖から進んで、雌雄の區別あり、各別箇の有機體に特別なる生殖器官や生殖腺を備へ、さうして自體を組成して居る普通の細胞と異りたる特別な生殖細胞を生出し、兩者の結合所謂受精作用に依りて生殖を營む所の雌雄異體の生殖法を見るようになつて居る。之は元より所謂有性生殖の最も完全なもので、此種類中で規範的のものであるが、そのこゝ迄發達する間には、同じく有性生殖と云ふても、種々なる變態と云ふか、不完全なものも存在するのである。假令ば同一の生物體に雌雄兩性を具へて居る、所謂雌雄同體のものや、又雌體のみにて何等受精を要しないで生殖を營む、所謂處女生殖もあり、又同一動物の生活狀態に應じ、種々の生殖法を一定の順序を追ふて反覆する所謂世代の交番と云ふものもあるが、之等の生殖法につき、玆では一々詳說し難いから、それは專門の生物學書に讓ることにする。併し尙ほ一言したいことは、普通有性生殖の中に加へてあるが、嚴密に云ふと、有性無性兩者の間に介在し、有性生殖の端緒となつて居る接合法のことである。その簡單なものでは、多くの單細胞なる原生動物に於て見られる、同じ大さの二箇の細胞體が全然合一して、新に一箇體を生ずるもので、之を特に融合と稱へて居る。此場合元より雌雄などの區別は全然現はれてゐないけれども、微かに同種一形（ダイモーフイズム）の出現ともなつて居るので、之から出立して、比較的に榮養の豐富な、「アナボリズム」の優勢な場合には、其結果として、形の大きい、さうして餘り活動しない、女性的のものを生じ、その反對に榮養の寡少にして、「カタボリズム」の優勢なる所では、形の小さい且つ能く動き廻はる男性的のものを生じ、それ等が合體して新個體を造り、漸次進んで、兩者の間に全然區別さるべき、別箇の細胞體即ち卵子、精子を現出するに至るものであると、ゲッデスなどは說いて居る。それから普通に云ふ接

A Short History of Woman

合なるものは、二箇の細胞體が全然合一するのではなく、相互に接着して、核の交換を行ふ生殖法である。その簡單なものは、單に核の交換を行つて居るが、少し進歩したものでは、假令ば或る纖毛蟲類などでは、双方の核が二つに割れ、その一つは體内に殘留し、他の一つが他の細胞體に移入し、さうして互に融合し、以て新個體を造つて居る。此場合に殘留したものは、明かに女性的の性質を現はし、移入したものは、男性的の性質を現はして居るとも考へられるので、單純なる融合の場合より一層將來の分化を豫想せしむるものである。

三　兩性分化の意義　然らば何が故に何等雌雄の性的差別のない無性生殖からして、判然たる雌雄兩性に分化し、さうして完全なる受精作用を營むようになつたものであらうか、その意義、その理由如何にと尋ぬるに、下田博士は其著「性の原理」に於て、三箇條の利益を擧げて居られる。即ち種の若返り、變異性を生ずること、繁殖の制限であるが、英人ゼー・エル・デーヴイスは其著「婦人小史」中に「婦人史の生物學的背景」と題する章に於て、此問題に觸れ、さうして若返り、分業、變異性の增加と、三箇の理由を擧げて居るので、私は之等を參考して、說明しようと思ふ。

（第一）高等動物の發生　簡單なる器械手段を以て、品質優良なる物品を生產せんとするは、到底不可能のことたるや云ふを須たない。生物に於ても同じことで、分裂や芽生の如き簡單極る方法で、優秀なる生物の發生は企圖し難いことで、若し天然の意趣が漸次優秀高等なる有情物を發生せしめようとのことなら、その生殖法をも漸次改善せねばならぬことで、その爲自然に有性生殖に迄發展し來つたのである。併し同じく有性生殖を營むものでも、人類に於ては犬や猫のように簡單には行はれないし、今後と雖も現在の儘では滿足出來ないで、優種學上からも種々と研究を重ね、人爲的にも從々優秀なる種族を產出するようにしなければならぬ。そのためには下田君の云はるゝ通り、生殖法の進歩は、自然生物の繁殖を制限し、粗製濫造を避け、少數なりとも優秀なものを產出する趣旨のものたるや、明かなことである。

（第二）生物の若返り　有性生殖は優良種族の發生に必要なことであらうが、さし當り如何なる利益ありやと云ふに、それは生物の若返りである。一體原生動物の營んで居る分裂法の如きは、寔に簡單で少しも手數のかゝらぬものであり、多產主義に於ては誂へ向きの方法であるかも知れぬ

が、それでも無限に行はれるものではない。或る程度に達すると、疲勞と云ふか、老衰と云ふか、此上は到底分裂を繼續し難いことになり、そのまゝに放任する時は、結局生物體の絶滅を免れないことになるものである。然るに其際若し接合をやると、その爲に元氣を回復し、再び分裂を營み得ることゝなるので、有性生殖は生物自身若返りのためであり、隨て生殖永續の條件となるものである。佛國の生物學者モーパーの觀察實驗に據ると、或る滴蟲類で五ケ月間に二百十五代も無性生殖を續けたが、後遂に死滅した。然るに二個體を接合せしめたら、再び活力を回復し、生殖を繼續せしめることが出來たと云ふことである。尤も之に就き生物學者間に議論もあるようだが、兎も角生殖法の變化は生物の若返りを來すようである。

（第三）變異性を增す　凡そ生物の進化は變異性の增加を必要とするもので、若し變異性の缺乏を來すと、何時迄も同一の程度に止り、少しも進歩を示さない。所が無性生殖では絶えず同一のものから產出せられるので、變異性に乏しく隨て種族の進歩を見ることが六ケしい。之に反し有性生殖では違つたものゝ併合であるから、遺傳が多く變異性を增すので、種屬の進歩を確實ならしめる利益がある。之を植物に就て見るも、自花生殖を避けて異花生殖に傾いて居るのは、其爲であり、又動物でもなるべく有性生殖に賴らんとする傾向あり、特に人類では努めて近親結婚を避けんとして居るが、皆此理に基いたものである。

（第四）性の分業　如何なる生產事業に於ても、分業の有利なるは、何人も是認する所で、今更その必要を說く必要はない。それで生物に於ても、種々の方面に分業の行はれつゝあることが認められる。單細胞動物に就て云ふても、周圍の狀況卽ち營養の多寡で以て、或るものは營養物を蓄積する方に傾き、或るものは活潑に動き廻はる方に傾き、以て自然に分業を呈して居る。又多細胞動物に就て云ふなら、彼等を構成して居る幾多の細胞は、或は表面の外層となり或は內部の組織となり、以て互に異りたる任務に從ひ、更に高等動物になりては、一層細胞に區別を生じ、體內種々なる器管となつて、各分業的に働き、さうして彼等の生活を一層有效に又便利なものとして居る。それで生殖法に就て見るも、その進歩するにつれ雌雄の分業は段々と確立せられ、兩者の協力を必要とするようになつて居る。要するに、生殖を完全ならしめる上から云ふても、又生物の活動を發展せ

しむる上から云ふても、雌雄の分化は當然必要のことで、つまり性的分業を實現して居るものである。

四　男女の道德的意義　雌雄兩性分化の意義は、下等動物に於ても、單に生物學上からだけで、其全體を說明し盡されるものではない。何故かなれば、下等動物と雖も只だ生活し、成長し而して生殖を營むと云ふ、生理的のものたるに止まらず、彼等は多少なりとも、知り、感じ、欲望する所の心理的のものとなつて居るから、進んで心理學上から釋明する必要のあるものである。況んや人類に於てをやで、吾々人類の男女は、一面動物として生存して居るので、元より動物と共通の點も少くないが、他面には進んで心理的は勿論のこと、更に善惡を辨別し、理想を追求する道德的のものとなつて居るから、男女の性別に就ては、どうしても其道德的意義に論及するの必要を認めるものである。ケツデスも其著「性の進化」中に、特に「心理的、倫理的見解」と題する一章を揭げ、其中に「性や生殖に關する事項をば、單に生理學的にのみ取扱ふは甚だ不充分なことである。それは啻に人類生活に關するのみならず、他の高等動物に就ても同樣に、嘲笑を以て拒否せられることである」と云ふて居るが、實に其通りで至當の言である。それで人類に於ける性的差別、卽ち男女の道德的意義に就て、少しく卑見を述べることにする。

（第一）男女の性別は吸引（アトラクシヨン）の基礎　性別のある爲に性欲的衝動を惹起し、そのために男女互に相引き付けて居るのは、今更多言を要しない事實であり、それが最初は動物と同じように單に肉欲を滿足せしめんとするにあるも、後には之と共に純潔なる愛情を生じ、遂には親子兄弟の愛情は勿論、人類愛にも到達せんとして居るのである。或は斯る性別なくとも、同類相率き以て愛情を惹起すかも知れぬが、同時に競爭心も起るので、同類と云ふだけでは、到底强固な又永續的な愛情の起り得ようとは考へられない。或は又性別なくとも、利害を同じうする所からして、相倚り相助け以て自ら愛情を惹起するかも知れぬが、之は利害の關係を直接目的とし、愛情は間接であり、方便に過ぎない感もあるので、斯樣な愛情も永續するものとは考へられない。然るに性別の存する場合では、嫌でも應でも互に接近せねばならず、合着せねばならぬような、强烈なる衝動のために、愛情を起すので、否愛情のために衝動を起すので、その衝動なり愛情は何物も之を妨害することが出

來ない、抑壓することの出來ないものであるから、その吸引力なり愛情の强烈なるや、云ふ迄もないことである。尤も人類と雖も原始社會に於ては、或は雜婚とか、不倫の行爲もあつたらうけれども、道德思想の進歩と共に、夫婦關係も改善せられて、一夫一婦制の行はれるようになり、爲に性欲の淨化、純潔なる夫婦愛の現出を見ることゝなつて居る。今後は益々這般の愛情を擴張して、宏大なる人類愛の實現にも及ぼすべきである。

（第二）男女の性別は共同生活の基礎　單に相吸引し、相愛するのみが夫婦の特徴ではない。男女相合して夫婦となつた以上は、家族なり國民として、互に共通の目的を抱き、又共に人間としての崇高なる理想を仰ぎ、相賴り相助け、以て共同生活の實を擧げたいものであるが、之れ全く性別の結果である。云ふ迄もなく、國家的統一の基礎は、家族的團結にあり、而してそれは夫婦の結合にある譯であるから、吾々は夫婦として常にその團結を固うし、協力一致して家業にいそしみ、修養に努め、以て社會的生活の基礎を築き上げねばならぬことゝ思ふ。

（第三）男女の性別は社會的分業の基礎　以上の二項は主として夫婦關係に就て述べたものであるが、男女と云つても夫婦關係に限られたことではない。人類幾十億萬人中夫婦と云へば、只だ二人づゝの關係に止り、其者等から見たら、外のものは皆他人で、單に男女と云ふに過ぎないものである。而かも之等の男女は相寄て社會的生活を營んで居るのであるが、今後は女子も益々家族以外の社會に進出して男子と提携し、共同事業のために協力活躍せねばならぬ狀況にあるのである。然るに男女の性別により、單に生理的のみならず、心理的にも技能的にも顯著なる差異を示めすことになつて居るので、爲に男女は各そが得意の才能を發揮し、さうして異性の短所を補ふようにせねばならぬ。男女同等なりとて、强て同一の職務に從事する必要はない、それ〴〵其性能に適當したものを選擇するのが賢明な仕方である。又よし同一の任務に就いたとて、何も全然同じように、同じ調子で働く必要はない、否各其性質に應じ、その特色を發揮するようにした方が、却て有利である。之等の點に就ては、後に詳說するつもりであるが、要するに、男女の性別は社會的、公共的事業に於て有利なる分業を促進するものと考へられるものである。

第三章　男女の有機的差異

一　男女の根本的差異　前章に於ては、性の起原なり、男女の性的差別に關する生物學的基礎を說明して置いたので、進んで生理學や解剖學などから、雜と兩者の間に存する有機的差異に就て述べようと思ふ。今外觀上から男女を比較して見るも、其間に大なる差異のあることは、何人も容易く承認し得る所である。卽ち體格の大小、筋肉の硬軟、脂肪の多寡、腰部の大小、下肢の長短、毛髮の多少、鬚髯の有無、皮膚の粗密、進んでは生殖器の差異に依るも、容易に男女兩性を區別し得べく、決して兩者を混同し得べきではないが、併し之等外觀上の差異は學問上餘り大切なものでない。なぜかと云ふに、女であつても普に體格の大いばかりでなく、歐羅巴の婦人には往々上髭の著しく發生して居るものもあり、之に反して男でありながら、少しも上髭すらなく、又何となく優美で小柄な體格を具へて居るものもあり、要するに、男性的の女もあれば、女性的の男もあり得るので、單に外觀上だけでは區別のつかないことも稀有のことでない。そこで男女を區別するに最も重要なる差異は、生殖器にあるのであるが、併し之でも外部に露はれて居る所だけでは、解剖學上餘り大切な差別とならないので、どうしても兩者を判然區別するには、身體の內部に匿れて存在する所の生殖器官を基礎としなければならぬようになつて居る。其故生物學者は、男女の性的差別又は性的特質をば、一次的、二次的と云ふように、根本的基礎的のものから、餘り必要でない末葉のものへと、段々に區別して說明して居る。今試みに此種の區別を立てた、最も古い英國の醫學者なる、ジョン・ハンター（一七二八—一七九三）の分類を擧げるなら、次のようになつて居る。

（第一）根本的性的特質　卽ち男女生殖腺の差異で、男性には睪丸と副睪丸、女性には卵巢と副卵巢のあること。（第二）一次的性的特質　卽ち男女生殖腺の附屬物であつて、男性には精囊と輸精管、女性には子宮と輸卵管のあること。（第三）二次的性的特質　之は青年期に至て現はれるもので、若し生殖腺を除去すると發達しないもの、卽ち男性の鬚髯、女の毛髮、乳腺及び音聲の差別等である。（第四）三次的性的特質　之は筋力の强弱、隨て起る精神力に大小の差あること。此外に尙ほ、（第五）四次的性的特質として、男女社會上の地位、風習なり生活狀態の差異及び分業等を擧げ

て居る。斯樣にハ氏は五種類に分類して居るが、普通には、生殖腺なり、生殖器の如き根本的のものを、一次的性的特質とし、其外は一切二次的性的特質の中に含めて居る。併し分類の數は如何樣になつてゐても、要するに生殖器官に於ける差異は、男女兩性を區別する根本的、基礎的の特質であると一般に承認せられて居るものである。で此の如き特質の存する所からして、男女は外觀上にも、又體質上にも著しき差異を現はすようになり、若し此特質を人爲的に除去するか、又は老年に及んで、それが自然に消失するようなことになると、男女の差別はさ迄認められないようになるものである。そこで外觀上の差異は、何人も能く熟知して居る所であるから之を略し、直に體質上では如何なる差異の存するものであるかを明かにしたいと思ふ。

二　男女體質上の差異　ゲッデスなど生物學者の說く所に據ると、男性の體質は、より多く「カタボリック」であり、女性の體質は、より多く「アナボリック」である。「カタボリック」を消費的、活動的、破壞的と譯すなら、「アナボリック」は其反對に貯蓄的、靜止的、建設的と稱すべきものである。而して這般の差別は、生活現象の根本的作用なる新陳代謝の機能に於て見られる異化作用と、同化作用の差別に比すべく、又之を生物の種類に就て云ふと、動物と植物の生活狀態に比較さるべきものである。卽ち動物は主として勢力を消費し、植物は主として之を貯蓄する傾向を有して居る。植物は外部から滋養分を吸收し、同化作用で以て之を自己の組織に變化して居るが、その間に於て元より多少勢力を消費する所あるも、收得する所遙に多大であり、さうして之を貯蓄してゆくので、ずん〳〵成長し、爲に小さな苗木でも、十年なり二十年も經過すると、實に驚く程大きなものとなり、更に百年二百年と多くの年數を經れば經る程益々成長して先づ際限なきものである。然るに動物は之に反して、每日如何程食物を攝取するも、一定の大さに達すると、それ以上はさ迄成長しないが、其代はり手足と云ふ運動の器官を具へて居るので、自由自在に活動することが出來、植物のように一定の不變的位置に固着することはない。斯く動物は盛んに活動する所からして、元より榮養分は收得するのであるけれども、隨て得れば隨て使ふと云ふ風で、その消費する所が收得する所よりも割合に多大なる爲、植物のように無限に成長すると云ふ譯にはゆかない。それで動物は比較上、より多く消費的活動的であるが、植物は之に反し、より多く貯蓄的、靜止的であると

稱へらるゝ次第である。之と同じように男の生活は動物的で、「カタボリック」、女の生活は植物的で「アナボリック」と區別せられるのである。然るに這般の區別は決して生物學者の空想ではなく、確實なる根據のあるものであるが、玆には主として、トーマスの著「性と社會」中の所說に基づき、概略その然る所以のものを說明しよう。

（第一）に男女の生殖細胞に就て見るに、女性の生殖細胞、卽ち卵子は、直徑一「ミリメートル」の約七分一かに當る程であるが、それでも男性の生殖細胞たる精子の三千倍もあるので、比較的に大きくして、且つ不動性のものである。之に反して精子は非常に微小なものであり、且つ能く活動して靜止する所なしと云ふ有樣である。そこで一方は貯蓄されたる營養物を代表し、一方は勢力の消費を表示して居るように思はれるが、之は自然に男女體質差異の根元となるものである。

（第二）男女を形體上から比較して見るに、男の胸部は廣いが、腹部は其割合に小さく、下肢は著しく發達して居るので、運動に適し飛び廻はるに都合よく出來て居る。之に反して女の胸廓は狹いが、下腹から腰股の部分が能く發達し、加ふるに脚部が短いし、且つ全體脂肪に富み肥滿して居るので、靜座して事を執るには適するが、運動したり奔走するには都合あしく出來て居る。斯く男性は活動に適する體格を有つて居るので、益す消費的の生活を送るようになり、女性は之に反し靜止的の體格を有つて居るので、自然貯蓄的の傾向を示めすことになつて居る。然るに男性の活動的生活は、その身體をして種々變化に富めるものとなして居るが、之に反して、女性の靜止的生活は、その身體に於て、變異性に乏しいものとならしめた。美術家の云ふ所に據ると、男性よりも女性の模範型は製作し易いとのことであるが、つまり女性は活動性に乏しい所からして、自然變異性を缺ぐことになつて居るのである。要するに活動性と變異性とは、離すべからざる關係を有つて居るもので、自然男女の特質を表示することになつて居るのである。

斯く男性が女性よりも、變異性に富んで居ると云ふことは、種々の點に於て證明せられることである。ワグナーは、女性の腦髓を以て、一樣に胎兒的の狀態にあると云ひ、又フシュケは、女性を以て常に成長しつゝある小兒の如しと云ひ、さうして其腦髓は身體何れの部分よりも、幼兒の型から遠かること少しと云ふて居る。又ワイスバッハは、男性の頭蓋骨に於ける變化の範圍は、女性のよ

りも一層大きいと云ふて居る。尙ほ多くの人類學者に依りて、長頭顱（ドリコセアリツク）を有つて居る人種の女子は、同種族の男子よりも一層短頭顱（ブラキセフアリツク）であり、又短頭顱人種に屬する女子は、比較的により多く長頭顱であると言はれて居るが、之はどう云ふ譯のものであるかと尋ぬるに、トビナールの說に據ると、是れ女性は人類の中庸型、標準型に近かんとする傾向を有つて居ることを證據立つるものだとのことである。尤も腦髓に就ての比較的研究は尙ほ幼稚であるし、且つ學者に依りて其說く所必ずしも一致しないものがあるからして、確實なる證明にはならないかも知れぬが、要するに之等の事實を眞とすれば、女性は活動性に乏しいからして、變異性を缺ぎ、隨て保守的傾向を有つて居るものであることを示めすものである。

尙ほ男女筋肉の强弱、運動の遲速等を比較して見るも、女性が如何に活動性に乏しいかを知るに足ることである。曾て米國でエール大學の男學生二千三百人と、オベリン大學の女學生千六百人とに就て、筋力の比較をしたことがあるが、其調査に據ると次のようになつて居る。

性部分	背筋	脚筋	右腕筋
男	一五三、〇	一八六、〇	五六、〇
女	五四、〇	七六、五	二一、四

之れは元より男女の平均筋力を比較したもので、「キログラム」で表はしたのである。然るに男の平均體重は、米人にて男は六三・一「キログラム」で、女は五二「キログラム」であつて、大分差異があるから、此の差異を勘定に入れて比較するも、尙ほ男の筋力は女の約二倍もあることを認めることが出來る。又曾てエール大學と、バザール女子大學とで、同じ年に開催した運動會の競技に就て、雙方の記錄を比較したものがあるが、次のやうになつて居る。

學生／競技種類	百ヤード競走	幅飛	高飛	二百二十ヤード競走
バザール女學生	一五、四分一秒	一一、五フキート インチ	四、〇フキート	三六、四分一秒

エール男學生	一〇、五分二	二三、〇	五、九	二二、五分三

知力に於て、男女の學生間に大差なき事實は米國などでは各地の大學で容易く見受けられることであり、又それを大に主張する人も少くないが、筋力の强健なことゝ、運動の迅速且つ巧妙な點に於て女學生の到底男學生に及ばないと云ふことは、凡ての人の承認して居る所で、之は體格上致方ないことである。それで米國ハーバート大學の總長であつた、エリオット博士が曾て諸種の猛烈な遊戯、奮鬪的な競技は婦人に適しない、却てその健康に害ありとの意見を發表せられたのに對し、「男女同等論」の著者なる、デンスモアーは反對の意見を述べ、これは恰度往時男女共學が危險視されたのと同じことで、女でも慣れて來れば何等心配はないから、女學生も男學生と同じように、戸外運動など旺んに奬勵すべきだと主張して居るが、戸外運動の必要如何、及びそが危險の有無論は別として、その技能の巧妙や運動の迅速に於て、女子はその體格一變せざる限り、到底男子に匹敵し得べくもないことは、デ氏と雖も否定出來まい。

尙ほ病理學上から調べて見ると、更に此點に就て別箇の證明を與へられることである。即ち天才や、白痴や、低能兒の男性間に多く存在することは、一般に承認せられて居る事實であるが、千八百九十四年に、英國のワーナーは、約五萬人の兒童に就て調査した結果、其中八千九百四十一人は、何れかの點に於て缺陷のあることを確めたが、其中男兒は五千餘人即ち十九「パーセント」に當り、女兒は三千餘人で即ち十六「パーセント」に當つて居ることを發見した。又蘇國のミツチエルと云ふ人の調査に據ると、千三百四十五人の白痴や低能兒中、男女の數は次のようになつて居る。

種類＼性	男	女	男	女
白痴	四三〇	二八四	一〇〇	六六、〇
低能	三二一	三一〇	一〇〇	九六、五

何れも男性の方多數であるが、特に低能よりも白痴に於て、男性の方に一層多數なるは、つまり男性は女性よりも、一層變態に富んで居ることを示めすものである。又千八百八十年に、普國に於

て精神病者の數を調査したことがあるが、其時、生れ付の白痴患者は、男で九千八百九人、女で七千八百二十七人あり、明かに男性の方に多數であつた。又コッホの調査した發狂者の統計に據ると、白痴患者中には常に男性が多數を占め、發狂者中では女性が多數を占めて居るが、併し白痴が男性に多い程、發狂者が女性に多くないので、若し兩者を合せて計算すると、やはり男性の方が其數に於て多數なることを認めることが出來るのである。一體精神病は多く外的條件に依りて起り、大腦發達の不完全又は傷害に基くことは、比較的に少ないと言はれて居るが、マイルは、バイエルン國の統計に據りて、精神病は十六歳以前に起ること稀に、又二十歳以前に起ることも多くないと言ふことを說いて居るので、つまり生れながらの患者は、男性に多いと言ふことになるのである。それは兎に角同じく精神病に罹つたとした時に、回復する場合を調べて見るに、女性の方が男性より遙に多く、又死亡率は男性患者に多いと云ふことは、一般に病理學者の一致する所である。特にキャンベルは男性の方が女性よりも、神經系統の大なる障碍疾病に罹り易いと細かに證明して居ることもあり、又モーヅレーも全身痳痺症は女に稀れだと云ふて居るので、どうしても男性は女性より、一層變異性に富んで居ることを承認せねばならぬようになつて居る。

尙ほ米人ギャンブルは其著「科學及び歷史に於ける性」の中に、種々なる變態の例を擧げて居るが、その最も珍らしい例は、ヘッケルの調査した皮膚の變態に關するものである。それは千七百十七年に生れ、ロンドンに住居してゐた、エドワルド・ラムベルトのことで、彼の全身は、一「インチ」以上の長さで、二「インチ」以上の厚さもある、角のような物質から出來てゐる、澤山な刺のような形の突起を以て蔽はれてゐた。それで彼は豪猪男（ヤマアラシ）と呼ばれてゐたが、之はラムベルト家の遺傳病であつて、代々男兒に傳はり、女兒には現はれない特別な變態である。又視覺の缺陷も男に多くゼフリース博士が、ボストンの學校で調査した、一萬四千四百六十九人の男の大人と子供の中で、色盲は二十五人に一人の割合であつたが、一萬三千四百五十八人の女の大人と子供の中で、色盲は極く僅少で、千七百人に一人の割合であつた。色盲は子孫に遺傳するものであるが、ウイルソン博士の調査した或る家族では、七代の間男性にのみ現はれたとのことである。それからエリスも盲人や聾は男に多いと云ふて居る。

更に又種々なる解剖上の變態に就て見るに、これ亦男性に多いと云ふことである。マンレーと云ふ人が、兎唇者を三十三人手術したが、其中女性は僅か六人に過ぎなかつたことを報告して居る。又指數の五本以上なる變態も男性に多いと云ふことであるが、ウキルダーの報告に據ると、百五十二人の中で、男性は八十六人で、女性は三十九人、殘り二十七人の性は不明であつた。又ブリュースは、多數の乳嘴を有つて居る場合も、男性に多いと云ふて居るが、此外筋肉の變態、畸形、聾啞者、彎脚、內臟器官轉位等も亦男性に多いさうである。又千八百八十四年より、千八百八十八年迄五年間に、英國で生れながらの缺陷、例令ば二裂脊髓、無孔肛門、上顎裂開、兎唇等に原因せる死亡者の數に就て調査した所の統計もあるが、之に據ると當時全英國に生存せる人民の百萬人中、男では四九・六人、女では四四・二人になつて居る。要するに之等は皆男性に於て、より多く變異性を有つて居ることを證據立つるものであり、そは又活動の盛んなことを表示するものである。

斯樣に男の變異性に富んで居る事實は澤山あるが、之と同時に女にも男にない特別な變異性の現はれて居ることもあるので、ゲッデスは、カール・ピアソンの說を擧げて居る。それは男女身體の種々異りたる十七ケ所につき調査して見たのに、十一ケ所女の方がより多く變化し、六ケ所だけ男の方がより多く變化して居ると云ふので、從來男の方がより多く變異性に富んで居ると云ふのは粗雜な觀察の結果であるとし、之に反對したものである。それで、ハートレーも其著「婦人に就ての眞理」中に、此說を引用して婦人に變異性の多いことを主張して居るが、併し單に之だけの事實では、どうも從來の學說を打破する譯にはゆかぬと、私は思ひます。

（第三）生理上から言ふても、種々の方面から證明することが出來る。

（一）女は一般に脂肪を餘計に貯蓄する傾向を有つて居るもので、特に青年期の頃に著しくなり、爲に女性美を增進せしめるものであることは明かな事實であるが、之れ卽ち女性の、より多く「アナボリック」なることを表示するものである。ビショッフは豫て健康體のもので、不慮の事變で以て死亡した、三十三歲の男と、二十二歲の女及び十六歲なる男兒に就て、筋肉と脂肪の關係を研究し、其割合を數字で表はして居るが、次のようになつて居る。

比較物＼性	男	女	男兒
筋肉	四一、一八	三五、八	四四、二
脂肪	一八、二	二八、二	一三、九

(二)血液に就ても、同じことが證明せられる。一體下等なる生物から高等なる生物に進むに隨つて、血液又は液汁の性質に變化を來すものであるが、其血液又は液汁の成分如何は、卽ち其體內に行はれつゝある代謝機能の强度を示めす者である。今植物を動物に比べて見るに、植物の液汁は實に稀薄で、恰も水の如きものである。之は卽ち植物の活動性に乏しく、且つ著しく貯蓄性を有するに適合する譯である。然るに動物の血液は比較的に濃厚なものであるが、これはその活動的生活に適當するのである。そこで人類に就て見るも、血液が多量であり又赤血球に富んで居るものは、活動に適し勢力の發出に都合がよいのであるが、今男女を比較して見るに、血球は赤白共に男性に多い。之は凡ての化學者の一致して居る所であるが、假りにカデーの計算に據ると、血液の一立方「ミリメートル」毎に血球の數は、女子に於て平均四千九百萬箇あり、又男子に於て五千二百萬箇あると云ふことであり、又ヴエルケルに據ると、血球數は男の五に對する、女の四・七となつて居る。尙ほ赤血球の數に就て、フキールオールトや、ウエルケル等の計算に據ると、血液の一立方「ミリメートル」中に、女は四百五十萬箇で、男は五百萬箇あると云ふことである。ラカーヌーは、血球千個の中で、赤血球の數、頑丈な男に於て百三十六箇、女に於て百二十六箇、又虛弱な男に於て百十六箇、又女に於て百十七箇程存在するものだと云ふて居る。

尙ほ血液の比重に就て比較して見よう。ジョーンスは、種々と違つた年齡の男女千五百人以上の人に就て檢査したが、十六歲と六十八歲の間では、男子の方女子より、血液の比重が高くなつて居る。尤も年齡に依て變化を來すもので、十六歲と四十五歲の間では、男の比重一・〇五八で、女の比重は一・〇五四五であるが、四十五歲になると、男の比重は急に減少し、女の比重は急に高まるようになつて居る。それで五十五歲の頃では、男女比重の差殆どなくなつて、六十八歲に及ぶものであるが、こゝに至ると、女の比重は男の比重より高くなると云ふことである。然るに比重の高低は、「へ

モグロビン」の量に依るものであるから、比重の高い程活動性に富めることを示めすものである。又ジョーンスは上流社會の人に比重高く、下流の人に低いことを發見した。英國で勞働に從事する男兒の比重は、平均一・〇五二八で、小學生徒の比重は、平均一・〇五六で、ケンブリッチ大學々生の比重は、平均一・〇五九であつた。是に由りて之を觀るも、營養と血液の比重、及び活動性との關係を知るに足ることである。

（三）又排泄物に就て見るに、男は代謝機能に於て、より多くの物質を消費するので、排泄物は女より多量である。今尿に就て檢査して見るに、男は女より多量の尿を排泄して居る。即ち男は毎日一千乃至二千「グラム」で、女は一千乃至一千四百「グラム」の尿を排泄して居る。又尿量は老年になる程減少するものであるが、代謝機能に於て消費する勞力の減少に比例すると云ふことである。尙ほ青年期の男女に就て檢査した所に依ると、男の尿中に一層多量な有機物なり、無機物を含有して居ると言ふことである。

（四）又肺量は如何にと云ふに、女は少量の酸素を消費し、且つ少量の炭酸瓦斯を呼出して居る。其故女は男より空氣の缺乏に對し、一層容易に耐へることが出來、仲々窒息などしないので、長く煙の中に耐へられるし、又空氣の稀薄なる高山に生活することも出來ると云ふことである。さう云ふ譯であるから「クロ、ホルム」の爲に起る死亡數は、男の方遙に多くて、女の二倍乃至四倍に當ると云ふことである。

（五）更に又種々なる故障に對する抵抗力に就て、男女を比較して見るに、女性はより多く抵抗力を有つて居る。之れ女性は平日消費する所少く、貯蓄する所多きが故に、能く故障に耐へ容易く損害を補充し得るからである。一體婦人は子供と同じように、男子よりも餘計に睡眠を要するものであるけれども、マックファーレンの言ふ所によれば、婦人は男子よりも、睡眠不足に能く耐へ得るものであるとのことである。之れ畢竟女子は餘分に營養分を貯蓄して居るからである。又女は男よりも變化を好まぬことの甚だしいものであるけれども、變化に適合することは容易であると云ふのも、つまる所此貯蓄性に基くものである。要するに男は女よりも、身體上一層特殊的のものとなつて居るので、普通狀態の故障には銳く感じ、同時に女のように、平日餘分の營養分を貯蓄して

ゐないから、之に對する抵抗力も少いのである。

總べて下等動物は、一部身體の機關を失ふも平氣で、容易く回復することが出來、或は二つに切斷しても、別々に生活し得る便利な性質を有つて居るものであるが、此力は上等動物に進むにつれ段々と減少し、人類に至つては全くなくなつて居る。併し下等人種や、下層の人民や、婦人なり、子供は尙ほ負傷や、手術に對する抵抗力を餘計に有つて居る。バーテルスは、外科的手術に對する抵抗力忍耐力に就て、次のように云つて居る。曰く「文明人種程抵抗力は少く、同一の種族中にあつても、文化の度低い程抵抗力多く、高い程少い」と。然るに女が男より一層大なる非負傷性を有つて居ることは、一般に外科醫の認むる所である。次に揭ぐる統計表は明かに其の事實たることを證明するものである。

ローリーの統計

手術＼性	男	死亡數	女	死亡數
病理的手術	一一〇	二九	四一	七
負傷的手術	一〇六	五九	一四	四
總數	二一六	八八	五五	一一
百人中	一〇〇	四〇、七四	一〇〇	二〇、〇

此表によれば、男の死亡數は百人中二〇・七四丈け多數を占めて居る。

マルゲンヌの統計

手術＼性	男	死亡數	女	死亡數
病理的大手術	二八〇	一三八	九八	四四
同　小手術	一〇六	九	四〇	二

負傷的大手術	一六五	一〇七	一七	一〇
同　小手術	七三	一三	一〇	〇
總　數	六二四	二六七	一六五	五六
百人中	一〇〇	三七、九八	一〇〇	三四、一八

此表によれば、男の死亡數は百人中三・八丈け多數を占めてゐる。

ヘンウキツクの統計

手術＼性	男	死亡數	女	死亡數
手術數	三〇四	八六	六四	一六
百人中	一〇〇	二七、八六	一〇〇	二五、〇〇

此表によれば、男の死亡數は百人中二・八六だけ多數を占めて居る。

今之等三氏の統計表を合せて、手術總數に於ける、男女死亡者の數を計算せば次のようである。

手術＼性	男	死亡數	女	死亡數
手術數	一一四四	四四一	二八四	八三
百人中	一〇〇	三八、五六	一〇〇	二九、二九

此表によれば、男の死亡數は百人中九・二七だけ多數になつて居る。

尙ほ苦痛や、不幸に對する忍耐力も、女性の方が强いようである。之は身體の苦腦から起る自殺者の數に就て、男女間の比較をして見れば能く分かることである。フオン、オエツチンゲンは、肉體的苦痛の爲に自殺した二萬人に就て、百分比例を取て見たが、男では一一・四あり、女では一一・三であつたことを報告して居る。又ロンブローゾは、缺乏なり貧窮から起る自殺者につき、百分比例を取て居るが、之を表に示せば次のようである。

地方＼性	男	女
獨逸國（一八五二—六一）	三七、七五	一八、四六
ザクセン國（一八七五—七八）	六、六四	一、五二
ベルギー國	四、六五	四、〇二
伊太利國（一八六六—七七）	七、〇〇	四、六〇
諸威國（一八六六—七〇）	一〇、三〇	四、五〇
ヴキン市（一八五一—五九）	六、六四	三、一〇

何れの地方に於て見るも、男の自殺者多數なるを知るべし。

又女性は男性よりも、一般に疾病に對して大なる抵抗力を有つて居ることも、明かなる事實である。次に掲ぐる表は、千八百八十八年に、英國政府から報告せられたものであるが、主として幼年者の侵され易い疾病に就て、英國の人口百萬人中の死亡數を示めしたものである。

病名	年	男	女
天然痘	一八五四—八七	一八三	一四八
麻疹	一八四八—八七	四二六	四〇八
猩紅熱	一八五九—八五	七六三	七三八
ヂプテリヤ	一八五九—八七	一五七	（一七六）
喉頭炎	一八四八—八七	二二一	一九二
百日咳	一八四八—八七	四五一	（五五四）
赤痢	一八四八—八七	九三二	八三五
腸チブス	一八六九—八七	二八八	二七七
總計		三四二一	三三二八

何れの疾病に於ても、男性の死亡數多數を占むるも、單に「ヂプテリヤ」と百日咳とは例外で、女

性の方に多數の死亡者を有つて居る。之はどう云ふ譯かと云ふに、一體女子の喉頭は比較的に狹小なると、小女は餘計に接吻する習慣を有つて居るので、此の種の疾病に侵され易く、又傳染し易いからである。斯くて女兒は男兒よりも、一層多く「チブテリヤ」などに罹るのであるが、若し罹病數と死亡數の割合を計つて見たならば、女兒の死亡數必ずしも多數を占めてゐないことを認め得べきことゝ思ふ。要するに女子は多くの病氣に感染し易いものではあるが、罹病した所で危險が少い。之れ蓋し平日餘分の營養分を貯蓄して居るからである。尤も女性にあつて、死亡律の最も多い時期は出産期であるが、此の時期に於ては、血液の比重も下り、「營養分の貯蓄も少くなつて居るとのことである。

（六）男女の出産數なり、長命の比較を試みるも亦面白い研究である。一體出産の時男女の數的關係は、どんなになつて居るものであるかと言ふに、經濟事情なり、社會の風習が未だ固定してゐない地方では、男女の出産律は不定であるが、之に反して文明國では、稍固定して居るようである。千八百六十五年から、八十三年に至る間の調査になる、歐羅巴各國及び各地三十二ヶ所の統計に據ると、女兒百人の出産に對する、男兒の出産は百五人になつて居る。然るに若し胎死兒卽ち死んで生れた子供を加へて計算すると、女兒一〇〇の出産に對する、男兒の出産は一〇六・六になつて居る。所が男兒の死亡數は、女兒の場合より超過するので、幼時五歲の頃には、男女兒共、其數を同ふし、進んで壯年期に至ると、歐羅巴の人口では、平均男子の一〇〇に對して、女子は一〇二・一と云ふことになつて居る。要するに男性の死亡するものが多いので、後には女性の方多數を占むることになるのである。フオン、オエチンゲンは、歐洲各國の統計に基き、男女の死亡律に就き、次のような調査を公にして居る。卽ち幼兒第一年の終はりの頃では、女兒の死亡一〇〇に對し、男兒一二四・七一の死亡あり、卽ち男兒の死亡は二五「パーセント」超過して居る。而して二歲と五歲の間では、女兒の死亡一〇〇に對し、男兒では一〇二・九一の死亡あり、卽ち男兒の死亡は、三「パーセント」の超過である。然るに死んで生れる嬰兒の數は、男性に於て非常に多數であるが、ワツペーウスの調査によると、女性の死生兒一〇〇に對して、男性では一四〇・九になつて居る。又ケツレーの統計では、女性の一〇〇に對する、男性の一三三・五であり、又千八百六十五年より八十三年に至る

間、歐羅巴各國に於ける統計によると、女兒の一〇〇に對して、男兒は一三〇・二となつて居る。そこで何れの調査によるも、歐羅巴では、女兒よりも多くの男兒が生れるが、更により多く男兒は死んで生れ、又生れて後も、男兒はより多く死ぬることになつて居る。其故に若し懷胎したり、出生する所の男兒をして、悉く皆生存せしむることが出來たならば、男兒は非常に多數となる譯であるが、前述の通り死んで生れたり、生れて後も亦餘計に死亡するので、大に其數を減少するようになつて居るものである。然るに死生兒の斯くも男兒に多い譯は如何にと尋ぬるに、之は出產時に於て、男兒は比較的に其身體特に頭が大いのと、母體の尻骨盤の狹小なるとに基くのであるとのことである。併し之れだけの理由では、生後一年間なり、五年間なり、進んで壯年期に至る迄に、尙ほ男子の方がより多く死亡するの事實を說明することが出來ない。之に就て吾々は他に適當なる說明を求めんければならぬ。「婦人（ダスワイブ）」の著者。プロッスは次のように云ふて居る。曰く「出產の前後に當り、男兒の女兒よりも餘計に死亡することに就ては、男兒は女兒よりも一層烈しい運動をすることと、其身體が大いと云ふ理由の外には、ハウスホーフェルの說いた、結局論的理由より、一層信用し得らるべき說明はない。而してハ氏は曰く、天然は男子の一層完全ならんことを希望するが故に、その發育の經路に於て、一層多くの故障を置いたので、更に他に理由を見出さねばならぬ。然るに吾は純粹なる科學的の說明であるとは云へないので、更に他に理由を見出さねばならぬ。然るに吾々若し消費的と貯蓄的と云ふ男女體質上の差異を念頭に置て考へたならば、容易に說明の出來ることであると思ふ。卽ち女性には胎兒の時から、既に其の特質は具はつてゐて、餘分の營養分が體內に貯蓄せられて居るとすれば、胎內から體外に生れ出でようとする、如何にも變化の甚だしい、危險極まる時に際し、能く嬰兒の生命を維持し、之をして其周圍に適合調節せしむる餘裕を與へることになるから、自然死亡數も少ないことになるのである。一體嬰兒は出產の時、母體から離れて直に食物の取り難いものであるから、營養分の貯蓄してあると云ふことは、最も必要なことであるが、女兒は此點に於て、男兒より遙かに都合よき狀態にあるものである。千八百六十二年に、伯林で開かれた、婦人科醫學會で報告せられた、ウキンケルの調査によると、ウ氏は新生兒百人について、其體重を計つたのであるが、新生兒は生れて後何れも體重を減じた。で第一日の平均減少量

は一〇八「グラム」で、第二日は稍々少量だけ減少した。さうして第五日に至りて、減少量は二二〇「グラム」に及んで居る。斯くも新生兒の體重は減少するものであるから、女兒が餘分の營養分を貯蓄して居ると云ふことは、其の生存上寔に都合のよいことである。

更に男は何故に壯年期に至る迄、女よりも餘計に死亡するものであるかと云ふに、やはり消費的なる體質によると共に、男は社會に出でゝ活動し、爲に危險を犯す場合が多いからである。斯く考ふればいよ〳〵壯年期に達した時に、男の死亡律は更に增しこそすれ、減少するとは解し難いとの疑念も起り得ることゝ思ふが、之には別に理由がある。即ち男に於て、二十才の頃から四十才の頃に至る、所謂壯年期の間に、比較的其死亡律を減少せしめてゐるには、二つの大なる理由がある。第一、男性にありては、其の嬰兒期なり、幼時期に於て、多數の死亡者を出して居るので、後に殘つて壯年期に達して居るものは、種々なる難關を經過して來た生存上の勝利者であるから、自然其死亡律を減少せしむる譯である。又第二に、此時期に於て女性は出產と云ふ危險を犯さねばならず、實際其爲に死亡するものも少くないので、死亡律は增加し、隨て男性に於ては、その反對に比較上死亡律を減ずるようになつて居る次第である。

尙ほ男女何れか餘計に長命するやと云ふに、長命者は女性間に多數である。婦人は男子に比べて見ると、年を取る程生き殘るものを增し、生命の持續力を餘計に現はすものである。オルンスタインは、千八百七十八年より八十三年迄の希臘政府でやつた調査に基き、次のような表を作つて居る。之に據ると、八十五才から百十才に至る五年間に、女性は漸次多數の生存者を有するものであることを示めして居る。

年齡＼性	男	女
八五——九〇	一二九六	一三四七
九〇——九五	七〇〇	八二〇
九五—一〇〇	三〇五	三七〇
一〇〇—一〇五	一一六	一六八

一〇五—一一〇	五二		
一一〇—	二〇	六九	三四

此中百才のものは、男女合して四百五十九人あつたが、男は百八十八人で、女は二百七十一人であつた。又バイエルン國で、千八百七十四年に、五十一才から五十五才迄の、生存者の總數を調査して見たが、女の年齢は合計で、七百萬才以上であつたが、男の年齢總計は、六百五十萬以下であつた。又ツルカンは、千八百六十六年から八十五年迄二十年間に、佛國全體に於て、百才のものゝ死亡數を調査したが、毎年平均七十三人の死亡者中、二十七人は男で、四十六人は女であり、二十年間中只だの一年だけ、男の死亡者の多數であつたことを發見した。

そこで之等の統計に據て考へて見ると、女性の死に對する抵抗力は、生涯の兩極端卽ち幼年期と老年期に於て、その著しいことが明かである。それで之は何故であるかと云ふに、女性は之等の時期に於て、その特質たる貯蓄性が充分に保持せられ、何等他の原因の爲に妨碍せらるゝ所がないからである。要するに貯蓄性が完全に保持せらるゝ時は、何時でも死亡數は少いことゝなるのである。然るに女性の中年期に於ては、月經、出產、授乳等の事情の現はれ來るものであるが、之等の事情はつまり、女性の特質が貯蓄的である所からして起るものであるけれども、同時に又その貯蓄性を妨害するものであるから、自然死亡者の增加を來す次第となるのである。

（第四）更に又人口學上よりも證明することが出來る。ヂューシングや、ウエステル マルクの研究により、營養物の豐富なることと女性、又その缺乏せること〻男性とは、密接なる關係を有つて居るものであることが明かになつた。フリエールは、羊毛を切取するに、食物に富んだ豐饒な地方では、重に雌から毛を取り、食物に缺乏せる瘦せた地方では、多く雄から毛を取ると云ふことを說いて居るが、人間に就て見るも、同じことで同一の地方でも、高地で食物に乏しい所では、低地で食物に富んで居る所よりも、男子の生れることが一層多いと云ふことである。プロッスの調査によれば、ザクセン國に於て、千八百四十七年から四十九年の間には、麥の產出が少なかつたが、其の當時男兒の出產數は增加して居る。又一般に都會よりも、田舍により多くの男兒は生れると云ふ

が、ヂューシングの研究によれば、普國に於て男兒の最も多く生れる所は、最も邊卑な田舍で、村落これに次ぎ、都市は更に其次ぎで、伯林では最も少く生れるとのことである。又戰爭なり、饑饉のあつた時、又は新に移住した當時は、平常より餘計に男兒が生れて居る。尙ほ一般に歐羅巴の統計によると、食物の乏しい時、又は價の高くなつた時には、結婚の數は減少し、又其爲に自然出產數も減少するが、併し男兒の生れる割合は增加して居る。之に反して豐年で食物の價も安く、人民の生活が饒かになると、結婚なり出產の數は增加するが、同時に女兒の出產數が多くなつて居る。之等の事實は、つまり營養豐富と女性、營養貧弱と男性との間に密接なる關係の存することを證據立つるものである。

又一般に寒い時に懷胎するより、暑い時に懷胎して生れる子供が多數を占めて居るが、併し寒い時に懷胎する方に比較的多數の男兒が生れると云ふことである。之は直接に胎內に於ける營養分の多少に基くとは云はれないが、寒期は胎兒の發育に適しないから、自然姙娠することも少く、又姙娠した場合に男兒が多數に生れることになるのである。時候と發育との關係に就て、瑞典では、アクセル、カイ敎授が、學校兒童に就て調査したことがあるが、之に據ると、每年十一月の末、十二月の初から三月の終はり、四月の中旬迄は兒童の成長著しくはないが、七月八月から、十一月十二月迄は能く發育し、身體の重量は寒期に於ける約三倍にも及ぶと云ふことである。學校兒童すら然りとすれば、胎兒の發育が寒暑の爲に、影響を受けることは當然のことゝ思はれる。隨て寒季に懷胎したものは、多く男兒となつて出生するものである。又一般に女兒は男兒に比較して早熟であると云ふことも、明かな事實であるが、之れ全く女性の特質たる營養分の多量なるに基くものである。又比較的に營養不良なる女兒と雖も、其幼い時に當りては、普通の男兒位には發育すると云ふのも、亦同一の理由に基くものである。

又一妻多夫の風習は、殆ど全く貧弱なる地方に行はれるものであるが、斯樣な地方に在りては、婦人の少數なことも亦事實であるから、つまり一妻多夫の風習は婦人の少數なることに基き、婦人の少數なるは食物の缺乏に歸せしむることを確め得るものである。

尙ほ食物と男女との關係に就ては、生物學者が種々實驗して居る所である。ヤングは蝌斗に就

て、食物の如何によりて、雄なり雌なり勝手に生育せしめ得ることを證明した。最初先づ蝌斗を自然の儘にうち棄て何等特別なる食物を供給しなかつたが、それで生育した所を檢査して見たのに、雌が少々多かつたことを發見した。然るに更に蝌斗を三部に別ち、三樣の食物で別々に養育して見た。即ち第一部類には牛肉を以て育てたが、此組では五十四「パーセント」より、七十八「パーセント」の雌を得た。又第二部類には魚類を以て養つて見たが、此組では六十一から、八十一「パーセント」の雌を得た。更に又第三部類には蛙の肉を以て育てたが、此組では五十六から、九十二「パーセント」の雌を得た。元より單に食物ばかりが、生物の雌雄を決する原因となるものではなく、其外に生物體の成分特に精子の染色體、光線、溫熱、水、電氣等も亦大なる關係を有つてゐるようであるからして、化學者や生理學者などの特別なる研究を要するものがあること丶思ふけれども、兎に角食物の狀態如何は雌雄を決定するに至る種々なる事情中の一つであると見做さるべきものである。之に就てヤングの實驗的研究は、有力なる證明となるものである。そこで榮養分の多量なると、女性の出生、又榮養分の寡少なると、男性の出生とは、其間に因果の關係あることを確め得る次第である。元より確實な統計を取つたのではないが、貧家に男兒多く、富家に女兒の多いのは、能く見受けらるゝことであり、之れ亦自然に榮養と性の關係を示めすものである。

又斯う云ふ事實もある。即ち一般に牧畜家は家畜の健康を保持する目的で以て、折々他種族のものと雜接せしめるさうである。之れはどういふ譯であるかと云ふに、異りたる血液の混合は代謝機能を活潑ならしめ、恰も榮養豐富の場合と同一の結果を來すからである。そこで異種交尾の結果は榮養豐富に當り、同種交尾の結果は榮養不良に比すべきものである。然るに前にも述べた通り、佛國のモーパーと云ふ人は、之を實驗的に證明した。で其の報告によると、或る種の滴蟲類では、數代無性的に產出せしむることが出來るが、若し何時迄も之を續けて居ると、遂には老衰狀態を呈し死滅を免れないものである。然るに若し他の緣故なきものと雜種して、接合を營ましむると云ふと、再び元氣を回復して更に又無性生殖をなし得るものであると云ふことである。若し之等の事實を以て眞とするならば、人類に於ても、異族結婚では榮養豐富の場合と同じく、多くの女兒を生じ、之に反して血族結婚では、榮養不良の場合と同じく多くの男兒を生ぜねばならぬ譯だ

が、事實は正しくさう云ふ風になつて居る。フォン、オエチンゲンは、私通の場合では非常に多くの女兒を生ずと云ひ、又ヂューシングは、親族相姦の場合では、男兒を多く產するものであると云ふて居るが、猶太人は屢々從兄弟の間で結婚するので、男兒を出產することが非常に多いさうである。ゼーコッブの統計によると、歐羅巴各國に住居して居る猶太人の間では、女兒一〇〇に對し、男兒一一四・五人の割合で出產して居る。然るに猶太人以外の國民では、女兒一〇〇に對し、男兒一〇五・二五人の割合になつて居る所を以て見ると、如何に猶太人間では多數の男兒が生れつゝあるかと云ふことを知るに足るのである。尙ほウエステルマルクの云ふ所によるも、雜種人や、異族結婚を多く營む人民間では、女兒の出產數は著しく多いとのことである。

斯樣にして、之を生殖細胞に就て見るも、又形體學上より、生理學上より、人口學上などより見るも、男性の體質は消費的であり、活動的であり、隨て變異性に富んで居ることが明かであり、之に反して女性の體質は、貯蓄的であり、靜止的であり、隨て保守的のもので、變異性に乏しいものであることが充分に證明せられる次第である。

三　體質上の差異に關する問題

男女は自然に其體質上「カタボリツク」と「アナボリツク」の差異を有することは、前述の通りであるが、玆に問題となることは、此の如き差別を以て、本來的、先天的又は決定的のものと見るか、或は又之に反して偶然的、後天的又は未定的のものとするかにあるのである。詳はしく云ふなら吾々人間の出產に際し、受精の場合、既に男女何れかに決定し居り、隨て消費的又は貯蓄的と云ふ差別は判然確定されて居るものか、或は又之に反し最初は何れとも決定し居らず、男女何れにでも發展し得るものが偶然の事情にて、その一方に決定せられ、それから自然に體質上の差異を有つことになつたものであるか、どうかと云ふのである。之は生物界に於ける性の起原なり、個人出產の際に於ける性の決定に關する生物學上の學說に依て左右せられるものであるが、私は生物學には門外漢であるけれども、生物學者の意見を窺ひ、二三の理由により、這般の差異は本來的のものでなく、偶然的のものであるように信じて居る。では如何なる理由に基くかと云ふに、元來生物界に於ける性の起原は偶然の事情に存することで、卽ち無性的なる細胞體の中で、周圍の狀況が營養豐富な場合には女性に傾き、その貧弱な場合には男性となり、何

も最初から男女兩性に別れる特別なる素質などはなきようであり、又個人出產の場合に於ても、母體の營養狀態如何に依りて、男女の性別を來すようであるから、最初から男女何れかに豫定せられたものではないようであるからである。元より男女の生殖細胞は互に其性質を異にして居るものであるけれども、一たび相結合して受胎するや、直に男女と判然たる性的差別を現はすものではなく、その當時は單に男女何れにでも發育し得る可能性を有つて居るだけである。然るにそれが受胎後數ケ月間に於ける、營養その他の事情にて或は男兒とも或は女兒ともなつて、初めて判然性別を見る次第である。其故受胎の際物質其物には何等の差別なく全然同一であり、隨て男女と區別して生まるゝも、本來同一なる素質を有するもので、何等の差異なきように思はれるのである。然るに生物學者間に於ける最近の學說で、個人の性決定は、精子の中に含まるゝ染色體の事情に依り、爲に性の決定は受精以前に既に豫定されて居るとするのもあるが、併し精子に於ける染色體の事情如何は何に基くかを明かにしてゐないし、それが又何か偶然の原因に基くやも知れないから、私はやはり偶然說を支持し、要するに、男女は本來同一の素質のもので、根本的には異る所なきものであると信ずるのである。併しながら一旦男女の性別を實現することになると、各異りたる生殖腺を有し、異りたる生理作用を營み、決して同一視すべきものでないので、自ら異りたる體質を有つことになり、隨て異りたる性情を有するものとなつたのである。

更に又問題となることは、前述の如き男女體質上の差別は絕對的のものであるか、將又單に比較的・相對的のものに止るのではないかと云ふことである。世間には男女と云へば全然其性質を異にした別種のものゝように考へる人もないではない。なる程解剖學上から男女の生殖器、卽ち一次的性的特質に就て見るならば、其間に判然たる區別の認められないではないが、併し發生學上から男女生殖器の發育する狀態を見たり、又は發育後に於ても兩者の間に存する共通の點に注目したり、特に變態ではあるが男女兩性（ヘルマフロデット）を具ふるものに就て見るならば、這般の區別も亦絕對的のものではなく、全く相對的のものであることが分かるのである。既に一次的性的特質に其然るを見ば、二次的特質と稱へらるゝもの、又は消費的なり貯蓄的と稱する男女體質上の差別も、元より比較上の事であり相對的のものであることを容易に了解し得る事であると思ふ。それで之を實際に徵す

るに、解剖上では立派に男たる人が、著しく女性的の特質なり體質を具へて居ることもあり、又其反對に解剖上では明かに女たるものが、著しく男性的の特質又は體質を現はして居ることもあるので、體質上男は何所迄も純粹に男、女も亦純粹に女と云ふ風に、絶對的の差別を有つて居るものではなく、何れの人も皆男女兩性の混淆であり、さうして男は比較的により多く「カタボリック」であり、女は比較的により多く「アナボリック」であると云ふに止るものである。ワイニンゲルが各人は男女兩性の種々に異りたる比例より成立して居るものであると云つたのは眞理であると思はれるのである。そこで要するに、人間は元來男女と云ふ全然別種のものであると思ふのが、抑も間違ひで、人間には一般に男性的・女性的と區別せらるゝ二種の性質があつて、之が種々なる割合に結合して以て個々の人を造つて居るに過ぎないものである。其故所謂男女を區別するにも單に生殖器の差別に據らないで、性的特質の多少に基いてした方が正當であらうと思ふのである。

尙ほ男女の性的特質は現在明かに現はれてはゐないが、潛在的に存在して居ることもある。假令ば禿頭であつた人の娘は房々した黑髮を具へてゐるのに、其娘の生んだ所の男兒は壯年期に至て後、祖父の遺傳に依て同じく禿頭になるような場合もあり。又は乳房の大きくて乳汁を多量に分泌した母親の子に男兒があり、其男兒の子として他日生れた所の女兒が成長して後、祖母の遺傳に依て以て乳汁を多量に分泌すると云ふような場合も、屢々吾人の目擊する所である。然るに斯樣な場合に於ては、男性的特質が女子に、又女性的特質が男子に潛在的に存在し、それが再現することとなるのである。それ故によし明かに出現してゐなくても、潛在してゐることは確實であり、又實際多少にても異性の特質を見受けらるゝこともあるので、吾々はどうしても何人に限らず各男女兩性の特質をば或る比例に於て具備して居るものと信ぜざるを得ないのである。さすれば男女の差別は益々相對的のもので、絶對的のものでないことを確言し得る譯である。

之を要するに、男女は性の進化上各分業を營むことになつたので、自ら男はより多く「カタボリック」で、女はより多く「アナボリック」と云ふような特質を具ふることになつたが、併し此の差別は本來的・先天的・絶對的のものにあらずして、全く偶然的・後天的・相對的のものであると云ふことに歸着するのである。然るに男女は斯く異りたる特質なり體質を具へて居るので、それが自然

に精神作用にも大なる影響を及ぼし、隨て男女は互に特殊の精神活動を呈することになり、爲に殊更女性心理研究の必要も起る次第である。尤も女性の精神活動は單にそが特質とか、體質の如何に依てのみ左右せらるゝものではなく、從來經過し來りたる何千年來の社會上の境遇なり、風習なり、教育なり、さては遺傳等にも據るの多きにあるは爭ふべからざる事實である。左れば女性心理を講ずるに就ても、女性史の一斑を說く必要を認めるけれども、紙數に限りあること故玆には之を略し、アウグスト、ベーベルが、其著「婦人の過去、現在及び未來」に於て、過去に於ける婦人の狀態と、其身心に及ぼせる影響とを說くこと簡明にして要領を得て居ると思ふので、單に其一節を譯出し讀者の參考に供することにした。ベ氏曰く「原始時代より引續き多くの年月の間婦人は奴隷的に束縛せられたる生活の爲に、體力にも又精神力にも差別を生じ、それが又一層酷しき束縛を受くる二次的原因となつたのであるが、元來此束縛せられたる生活の本源は要するに婦人の性的特質に存することである。抑も原始時代の婦人は、よしや體力に於ても又は精神力に於ても、男子と同等で毫も差異を見なかつたものであるとは云へ、姙娠なり出產、續て授乳の時期に於ては、どうしても男子の扶助、給養、保護を受けなければならぬ必要があつたので、自然男子に對して弱者となり劣等者たらざるを得なかつたものである。腕力の特に尊重せられ、生存競爭が最も蠻的に行はれし時代に於て、婦人の斯くも時々無力な狀態に陷ると云ふことは、男子の女子に加へし暴行の起原となつたものである」。

第一篇　知識篇

第四章　感覺

一　感覺の意義　感覺は吾々の外物を認識するに就て、その要素となる最も簡單なる意識現象であるが、その因て起る生理作用に關係して云ふなら、「通常感神經の末端に於ける刺戟に依りて惹起されたる興奮が、神經中樞に傳達せられたる時に起る、簡單なる意識現象である」と定義してよいのである。然るに人々皆その感性を異にし、自ら鋭鈍の差あるを以て、同一の刺戟必ずしも同一强度の感覺を生ずるものではなく、要するに、感受性の鋭い人には感覺も强く、又鈍い人には弱く感ぜられるようになつてゐるものである。そこで男女間には受感性の差なきか、隨て又感覺の强度に差異なきや否やと云ふことが問題になるのである。所が此の問題を解決するには、綿密なる實驗に據るより外に方法がない、想像や臆說で決定する譯にはいかぬ。依てなるべく多く專門學者の試みた實驗の調査を參考にするが、特に最も綿密な實驗的研究を遂げた、タムソン女史と、最も多くの資料に基いて調査した、エリスの結論とには、大なる信用を措き以て解決を圖りたいと思ふ。

二　味覺　千八百九十四年に、獨逸の種々なる階級の男女に就て調査した、デーンの實驗に據れば、女は男よりも、甘酸苦鹹の四味何れに於ても一層鋭敏である。然るに千八百八十年に、米國の學生に就て實驗した、ニコールスとベーレーの研究に據ると、鹹味のみは男の方鋭敏なるも、その他の三味に於ては女の方鋭敏である。又オットーレンギーは、千八百八十九年に、以國の囚人に就て實驗したが、その結果に據ると、甘苦鹹の三味に於て、女は男よりも稍鋭敏である。併しオ氏は之を以て男の喫煙に基くとし、若し男にして、此習慣なくば、本來味覺は女より鋭敏なるべしと云ふて居る。ロンブローゾも亦甘鹹苦の三味を用ゐて、千八百九十三年に、以國の囚人に就て調査したが、女は甘と鹹の二味では鋭敏であり、苦味では鈍いと云ふ結果を得た。又同じく以國のデマテーは、千九百一年に四才より十二才迄の子供に就て調査したが、苦味に於て男兒は女兒よりも一層

銳敏であり、鹹味に於ては差なく、甘味に於ては鈍いと云ふて居る。これ等の實驗に據れば、その研究の結果全然一致して居る譯ではないが、概して女の方の味覺に於て銳敏なることを示して居る。」

然るに既に紹介して置た、米人タムソン女史の精密なる實驗的研究に據ると、「女史は豫め「サッカリン」、化學用純鹽、硫酸、それから硫酸規尼涅の溶液で以て、甘鹹酸苦の四味を用意し、之に依りて(一)四味に於ける識域の高低、(二)四味の種々なる溶液に就て、判然同一視して誤りなきに至る識域の高低、(三)四味の種々なる溶液に對し、之を區別し得る識別力の强弱に就き、男女間の差異を檢べたのである。所で其結果として、(第一)に女は男よりも低き識域を有し特に苦味に於て最も低く、漸次酸鹹甘に及んで居る。(第二)女は酸苦二味に於て、男よりも一層明かに低き識域を有し、鹹味に於ては少しく低く、甘味に於ては殆ど同一である。之を要するに、二種の識域檢査の結果、女は男よりも味覺に於て特に銳敏なることを示めして居る。(第三)鹹味に於て、女は男より少しく優良なる識別力を有するも、他の三味に於ては、男が銳敏なる識別力を有することを證明した。然るに男は女よりも、味覺に於ては比較的に鈍いにも拘らず、何故識別力に於ては優つて居るかと云ふに、何も不思議なことはない、さもあるべきことである。なぜかと云ふに、低い識別を有する人程、强い刺戟に對して、その識別力は粗雜となるものである。詳はしく云ふと、强味を有する溶液は、低い識域を有する人、即ち受感性の銳い人に於て、受感性の高い識域を有する人、即ち受感性の鈍い人より、一層强く感ぜらるゝものであるから、前者の識別力をして薄弱ならしめるのである。尙ほエリスの結論では、女の方味覺に於ては、著しく銳敏であることになつて居る。

三　嗅覺　實驗の方法多少の差はあるが、オットーレンギーや、ベーレー等の實驗に據れば、男は女より銳敏なる嗅覺を有し、特にベ氏の云ふ所によれば、男は女より約二倍も銳敏であるとのことである。然るにこれ等の實驗は稍精細を缺ぐ嫌ひもあり、疑はしい點もあるが、之に反して千八百九十九年に、佛國のツールーズとワシワドの試みた實驗では、樟腦の稀薄なる溶液で以て、能く注意して識域を檢査したが、女の方男よりも一層銳敏なることを發見した。又デ、マテーの子供に試みた實驗も亦女兒の方銳敏なりとの結果を得た。尙ほ以國ガルビニーの實驗に於ても、同樣の

結果を示めして居る。斯樣に正反對なる二樣の證明があるので、その何れを以て正當となすべきか、聊判斷に苦しむ譯であるが、タムソン女史の精密なる實驗に據れば、如何なる結果を得てゐるかと尋ぬるに、女史は識域と識別力との關係を見る爲に、特に菫の香水と丁香油と二種の溶液を用ゐたが、それによりて兩種とも識域に於て、女は少しく低い、卽ち女は男より嗅覺に於ても、少しく鋭敏なる受感性をもつて居ることを確めた。然るに識別力に於ては、どうであるかと云ふに、丁香油では女が少しく優り、菫の香水では男女間に差異なきことを發見した。蓋し丁香油の香りは菫の香水より强度が弱いから、鋭敏なる受感性を有する女の方が、識別力に於て優れて居るのである。依て此の實驗に據れば、嗅覺に於ても、女の方多少鋭敏であると斷定してよからうと思ふ。併しエリスは男の方遙に鋭敏なりと斷言して居る。尤もこれは婦人が常に强い香水を使ひなれてゐるからだとも云ふて居るが、元來女は鋭敏な嗅覺をもつてゐるが、香水の亂用で鈍感になつて居るのかも知れん。尙ほエリスは非常に鋭敏な嗅覺をもつて居るのは、男より女特に「ヒステリー」性の婦人に多いと云ふて居る。

四　皮膚覺　皮膚に依て起る感覺には、壓覺、溫覺、痛覺を區別し得るから、これ等の感覺に就て比較して見る必要がある。

(1)壓覺に就て、ロンブローゾの實驗に據れば、女は男より鈍い受感性をもつて居ることになつて居るが、テーンやオツトーレンギーの實驗では、その反對に女は男より鋭い受感性をもつて居るようである。デ、マテーは子供に就て研究したが、之と同一の結果を得た。依てタムソン女史の實驗は如何にと尋ぬるに、女史は特に右手前腕の內側を選びその中部に於て、精細なる裝置の下に、輕い「コルク」を接觸せしめ、其の爲に起る壓覺の識域を檢査したが、其の結果は、女の方男より稍低い識域をもつことになつてゐる。さうすると、以上諸氏の實驗中ロ氏のみ反對の結果を得て居るので、女は壓覺に於て男よりも鋭い受感性をもつて居ると斷定してよからうと思ふ。尙ほタ氏は手掌に於て種々なる壓の識別力に就て比較して見たが、之は男女間に著しい差異のないことを發見した。更に又米國のジヤスツロー教授は、兩脚器から出來て居る檢觸器で以て、食指の尖端を壓し、さうして所謂部位覺の鋭鈍を檢査したことがあるが、此の實驗によると、女の方著しく鋭敏

である。これと同一の實驗をタ氏も、右手前腕の內側に於て縱橫に試みた。所がその結果として、女は男より橫線に於て少しく、縱線に於て著しく銳敏なる受感性を有することを發見した。之はジャ氏の得た結果の正しいことを裏書するものである。然るに、エリスは觸覺に於ける男女の差異は、今の所判然たる結論を下し難いと云ふて居る。

(2)溫覺に關し、デーンの實驗によれば、女は男より一層銳い受感性を有することになつて居るが、米人マクドナルドが千八百九十七年に、ワシントン市の小學兒童に就て調査した所に據ると、男兒は女兒よりも稍銳い受感性をもつてゐることになつて居る。然るにタ氏は、生理的零度卽ち華氏三十度と、寒冷の爲に痛覺を起す程なる五度と、又溫暖を感ずる度合の四十五度と三樣の水を用意し、以て嚴密なる檢査を試みたが、生理的零度では男女間に全く差別なく、寒暖兩端に於ては女の方少しく銳い受感性を有することを發見した。要するに之等の實驗によれば、女の方稍銳き受感性を有する如く見えるが著しい差異はないようである。

(3)痛覺に就ての實驗は少くないが、ロンブローゾ、オツトーレンギー、デ、マテーなどは電氣刺戟を以て痛覺を被驗者に與へたが、三人共一樣に、女は男より感覺の鈍いことを發見した。然るにデーンは同じく電氣刺戟を用ゐたが、女が男より感覺の銳敏なることを認めた。更に米國のウイスラー、マグドナルド、カーマン、スイフトなどは、壓によりて被驗者に痛覺を與へたのであるが、何れも女の方が識域の低いこと、卽ち受感性の銳敏なことを證明した。然るにタムソン女史は、彈仕掛の加壓器で左右の顳顬の所を壓迫し、低い壓力より漸次高い壓力を加へ、さうして何れの壓度より痛みを覺えるかを檢査したのであるが、或る被驗者は單純なる壓覺より突然痛覺を感じ、又或るものは殆ど最初から不快を覺え、それが漸々增進するように感じたので、果して何れの壓度より痛覺となつたかを決定するに大なる困難を感じたものもあつた。併し數回反復して實驗した後、左右の顳顬共に女が低い識域をもつてゐること、卽ち痛覺の銳敏なることを確めた。して見ると、電氣刺戟の場合を除き他の實驗では、悉皆女の受感性の銳敏なることを證明して居るから、さう云ふ風に承認して差支えなからうと思はれるのである。尤も人によると、女に苦痛や傷害に對する忍耐性が强いから、それで以て女の痛覺は鈍いように斷定するものもあるが、私は痛覺の銳鈍と忍耐

性の多少とは、區別して考へねばならぬと思ひます。所がエリスは現在に於ては何とも斷言的の結論を下し難いと云ふて居る。

五　聽覺　之に就て、米國のコロンビア大學で、千九百一年に度々實驗したことがあるが、音の高低を識別する力は女の方男よりも優れて居ると云ふ結論を得た。又ロンブローゾは至て簡單なる方法で、卽ち時計の音を聽取し得る距離を測定して、さうして聽力の强弱を檢定したが、被驗者の數も少く、又左右の兩耳に於て差異もあつたので、精密な研究は出來なかつたが、結局ロ氏は男の聽力女よりも銳敏なることを發表した。又同じく以國のコロニーも同樣の結果を得た。又米人レイクは千九百年に、小學兒童四百四十人の耳を檢査したが、變態耳を有すること、男兒の方遙に多數であることを發見した。尙ほ色々耳の生理に就て研究した後、音の高低を識別する力は、變態耳を有することの多い男の方が鈍いことを推測して居る。然るにタムソン女史は、音の高低に關し三樣の實驗を試み、さうして次のような結果を得た。(1)音の上極では、男女間に差別なく、(2)音の下極では、男稍優り女よりもいくらか低い音を聽取し得る力をもつてゐる、(3)音の識別力では、女の方優れて居る。」之によつて見ると、聽覺では女が全然男より銳敏とは云はれないようである。尙ほエリスは、健全なる人々の聽力に關する性的差異を決定するに足る多くの資料を持たぬとて、何とも斷言して居らぬが、最後にピアノの調律師は普通男であるのは注意すべきことだ、併し之を以て聽覺に於ては女が男と競爭出來ないからとも考へられないと附言して居る。女に調律師のないのは、聽覺の如何と云ふより、女に器械的知識の乏しいことを證明するものと、私は考へます。

六　視覺　被驗者に活字や數字を讀ましめて、視力の强弱を檢査した實驗で、英人ビアソンは、男は右眼に於て優れ、女は左眼に於て銳いことを確めたが、コロンビア大學では男女間に差異なき結果を得た。更に色覺の銳鈍に就ては、色々の實驗がある。米人ニコールスは、千八百八十五年に、赤、綠、青、黃四色の繪具を、別々に色々の度合に白粉に混ぜ、さうして殆ど區別し難い程度の白色から、明かに各色の認めらるべき迄の種々なる順列を用意し、さうして之を一々壜の中に入れ、斯くてそれ等の壜を無秩序に混ぜ置き、その上で被驗者をして、各の色を其の濃淡に隨つて區別せしめた。所が男は青色を除き他の三色では、淡い色を能く識別することが出來た。尤も單に一色だ

けで、濃淡に應じ之を順次に配列するのでは、女の方男に優る所があつた。斯く一色だけで濃淡を區別するに於て、女の優れてゐることは、他の實驗に於ても同樣に證明されて居る。ロンブローゾは、毛絲で實驗したが、女は男より三倍も鋭い感覺を有してゐると報告して居る。又米國のエール大學で、ギルバートが、千八百九十四年に、小學兒童に就て調査したことがあるが、その結果も同じく、女兒は男兒に優ることを示めして居る。尤も米人ラツキーが、多くの兒童や大人に就て檢査した報告によると、男女間に差異なきことになつて居る。更に色盲患者の多少に就て調査した人も澤山あるが、何れも男の方に多數なることを證明して居るので、之は殆ど決定的の事實と認められて居る。所でタムソン女史の實驗では、どのような結果を得て居るかと云ふに、女史は巧妙精細なる器械裝置を以て、(第一)に光覺の識域を檢査したが、男の網膜は明かに一層大なる感光性をもつて居ることを發見した。(第二)に光覺に對する識別力を檢査したが、男は女よりも精細なる識別力を有することを確めた。(第三)には視力の鋭鈍を檢査したが、何か一物を見付ける力に於て、男は稍女に優るが、色を認識する力に於ては、女の方明かに鋭敏であつた。(第四)色の識別力に就て檢査した結果では、女の方著しく鋭敏なる力をもつて居る。尤も男の中には、大分色盲者のあることが分つた。(第五)種々なる大さを有する方形を二個づゝ被驗者に示めし、さうして其の何れがより大なるやを告げしめ、以て視覺的面積の識別力を檢査したが、之は男女により大差なく、稍男の方優てゐた。女史の實驗は、元より實驗心理學の教室でなされたもので、餘りに專門的であるから、其の方法を細かに說明することの出來ないのは甚だ遺憾であるが、大體上述の如き結論に達したので、私は種々なる實驗を參照して、大略次のように斷言出來ようかと思ひます。即ち光覺に於ては男の視力優り、色覺では女の視力鋭敏である。尙ほエリスの下した結論は次のようである。眼疾に於て女は輕微なる障害に罹り易く、之に反して男は重大なる缺陷を生じ易いものであるが、健康なる場合に就て考ふるに、視力の强さ鋭さでは、何等著しい性的差異を見ないと。

以上、味覺、嗅覺、皮膚覺、聽覺、視覺と、順次に所謂五官に就て男女間の比較研究を試みたが、更に之を概觀するに、感覺の識域は女の方低く、即ち受感性鋭敏であるが、感覺の識別力は男の方優つて居るようである。又受感性と識別力とを合はせて考へるなら、大體女の方が優れて居るよう

である。然るにエリスは其の著「男及び女」の中に、次のようなことを云ふて居る。即ち從來女の感覺が鋭いやうに思はれて居るのは、つまり世人が受感性「センシビリチー」と、感動性「イリタビリチー」、又は「アフエクタービリチー」とを混同するから起つたことである。一體受感性と云ふは、刺戟を感受する鋭さ又は強さのことであり、之に對し感動性と云ふのは、刺戟に應じて、容易く心身の反動を惹起することを意味するものであるから、勿論混同してはならぬ。然るに女は一般に感動性に富んでゐるから、微弱な刺戟に對しても、直に顔を顰めたり、手足を動したり、或は又大聲を發するなど容易く諸種の反動を惹起するものである。それであるから、受感性が強いように誤解されるのであるが、之に反して男は感動性は少いが、刺戟に對して靜に之を感受し、能く之を識別する力をもつてゐるから、實は男の方が受感性に富んで居るのであると云ふ風に說いて居る。女の感動性に富んで居ることは顯著なる事實であるから、元より異論はなく、隨て又男女の受感性を比較する際、大なる注意を拂はねばならないことは云ふ迄もないことであるけれども、女はその感動性が強く、隨てその識別力に於て劣て居るからとて、直に受感性が鈍いとは斷言し難いと私は思ふのであります。之はタムソン女史の實驗に於ても、明に證明されて居るが、特に私は感動性の著しい一原因は、受感性の鋭敏なるにあり、換言すれば、受感性が強いから、感動性も著しく起るのであると云ひ得ると思ふものである。一體感動するのは感受するからで、少しも感受せぬものに就て感動する譯がないと私は思ふので、要するに、女は感動性にも富むが、その感神經が鋭敏であり、精緻（デリケート）であるから、微弱なる刺戟に對しても、能く受感し得る受感性をもつて居るものであると信じて差支えないのである。併し鋭い受感性をもつて居ると云ふことが、直に鋭敏なる識別力なり、精細なる知覺力をもつて居ると云ふことにならないのは、元より云ふ迄もないことである。

所謂五官の外に、尙ほ身體內部の刺戟より起る諸種の感覺、即ち有機感覺、筋覺、腱覺等色々のものもあるが、之等の感覺に就ては、未だ特に比較的研究を試みたものもないので、玆には之を略すことにした。然るに普通の心理學には說いてないが、特に女性の特徵とも思はれるものがあるので、序にそれを擧げて置かうと思ふ。それは氣象に關する感覺と、搔ばいと云ふ感覺である。

七　氣象に關する感覺　之は天候の變化に際して、或は頭が重くなつたり、何となく身體が壓迫

されるような氣分がしたり或は何所となく不愉快な心持がしたり、或は漠然たる痛みを感じたり、特に「リューマチ」患者に於て然るが、其の外腸胃の消化不良を來すとか、又は氣分が荒くなるとか、種々なる現象の惹起されることを云ふのである。而して之等の現象は通例天候變化の一日又は二日も前から起るので、その爲に晴雨、寒暖、暴風等を豫知することの出來るものである。で此の種の感覺は、羊、豚、家鴨其の他多くの魚類に於ても具へて居るとのことであるが、ボーニスの云ふ所によれば、婦人や子供には能く見受けられることであり、特に神經質の婦人に多いと云ふことである。然るに此感覺は、單に天候の變化につれて起るばかりでなく、時候の變化につれても起ると云ふことである。即ち一年中の或る時期普通に春から夏にかけて起る時候の變化は、餘程身心に影響するものと見え、發狂者なり、自殺者さへも特に多いのは事實であるが、それが一種の感覺となつて起るのである。之を要するに、未だ精確なる統計もないことであるから、確乎たる判定は下し難いけれども、このような感覺の女に强いことは、爭ふべからざる事實のようである。又以て女性の神經過敏なるを知るに足るものである。

八　擽ばい感覺　之は皮膚から起るものであるが、或は痒いと云ふ感覺の微弱なものと見做す人もあり、或は一種特別のものであるから、之を五官に對し第六官と稱へる人もある。併し兎に角觸覺に屬する特殊の變態と見做すべきものである。然るに此感覺は子供や婦人特に妙齡の女子、發情期に及んで居る女性に於て著しく發生するものである。所が誰れでも能く熟知して居る通り、此の感覺は自分自身で、いくら擽つても一向感じないで、全く他物特に他人が接觸する時に初めて起るものであるから、餘程心理的の要素が含つて居ると云はれるものである。それはどう云ふ譯であるかと云ふに、一體此の擽ばいと云ふ感覺は、下等動物の中で、觸角や觸手に依て感じてゐたものゝ遺物であつて、今日吾々人間にはそのような特別なる器官はないけれども、曾て下等動物が斯樣な特別なる器官に依て外物に接し、さうしてその毀害を免れるように、自體を保護した、その經驗が吾々人間にも遺傳せられ、爲に外物の接觸した場合に、此擽ばいと云ふ感覺を惹起し、以て外物の近づいたことや、攻擊の向つて來たことに氣付かしめ、之に依りて自然に吾々の身體を保護するように出來て居るもので、生物學上から云ふても、大なる意義を有するものである。それ

が何故子供に鋭いかと云ふに、子供の精神生活には、觸覺が主要なものになつて居るからであり、又何故それが女性特に發情期に於ける妙齡の女子に著しいかと云ふに、女性の感神經が鋭敏であるからでもあらうが、特に大切な理由は、自然が特に女子をして此感覺を起さしめ、以て處女の節操を守らしめ、男の暴行より免れしめんとする、深い趣旨の存する如く見えることである。それで女は特に腋下とか、乳房とか、下腹とか、又は股間等、直接間接に性慾に關係ある部分に於て、外物の接觸する場合に、此の擽ぱい感覺を惹起し、以て本能的に之等の部分を陰蔽し、防禦せんと努むるものである。其故此感覺に基く動作をば、生理的羞恥心とも稱へて居る。斯樣に此感覺は節操なり、性慾に關係があるのであるから、既婚の婦人とか老衰せるものにありては、段々と鈍くなり爲に他人が觸れても、さまで擽ぱゆくないことになつて居る。其故アイスランドでは青年男女の純潔なるや否やを試みる爲に、殊更擽つて見る風習があり、若し擽ぱゆくなかつたならば、純潔なものでないとせられるさうである。隨分危險なテストであるが、又一理なきにしもあらずである。そは兎も角として、此感覺には笑を伴ふもので、爲に一種の快感を惹起するようになつて居るが、之は此感覺本來の趣旨から云ふと矛盾して居るように思はれるのである。なぜと云ふに、若し此感覺は外敵を防ぐとか、節操を守るとか云ふような、重要な任務をもつて居るものであるなら、之と共に不快と云ふか、嚴肅な情の起るのが當然で笑ふなど〻云ふ不謹愼な快感の伴ふべき筈のものでないように思はれるからである。而かも快感の伴ふのは如何なる譯であるかと云ふに、之は全く生物進化の過程に於て、觸覺作用に變化を來したからである。即ち吾々人間では他の感覺が發達して來たので、觸覺に依て外敵の襲來を認知する必要がなくなり、又元來節操を守る豫防となつた位、性慾と密接な關係のあつた感覺のこと〻て、今日では寧ろ性慾を誘發する刺戟ともなるようになり、隨て快感を覺え笑の禁ずる能はざるに至たものである。其故妙齡の女子にありては、よしや性慾を意識せずとも、好んで擽られんことを求め、之に依りて快情を滿足せしめんとするものである。斯樣な有樣になると擽ぐるとか、擽られるとか云ふことは、一種の遊戯となり、發情期の女子には一種の悅樂となるものである。尙ほ一つ說明して置きたいと思ふことは、何故擽ぱい時に笑を生ずるやと云ふことである。笑は元より快情の表現であるが、一般に滑稽の情に伴ふもの

である。然るに擽ばいと云ふ場合では、滑稽の情では說明にならぬから、他の方面卽ち性慾に關係して說明すべきであらう。それでグロースの云ふて居る所に據ると、「多くの人は何か性慾に關する暗示を得ると、直に笑を起すものであるが、それは何故であるかと云ふに、吾々は斯樣な暗示を得た時に、直に之を實行し、眞に之を滿足せしめようとするに至るかも知れない危險があるので、一時心を他の方面に向け、此危險から免れしめんとする爲に笑ふものである。つまり笑に依りて眞の滿足を代表せしめ、之によりて一時を胡麻かすのである」とのことである。吾々は能く笑にまぎらすと云ふことをするものであるが、之は要するに或る目的を達する能はずして、殘念に思ふが致方もないので、笑を呈し以て不滿を醫し、其場をつくろうもので、擽ばい場合も其の一種と見るべきであり、そんな時常に性慾を意識して居る譯ではないが、年頃になると自然に無意識に性慾も起つて居るので、爲に盛んに笑を發し、以て意識的なり無意識的に存在する性慾の滿足を代表せしむる次第ではあるまいか。

第五章　知覺作用

一　知覺作用の意義　假令ば机上に横はつてゐるのは書物であり、空を飛んでゐるのは鳥であると認めるやうに、何に限らず外物を認識するのを知覺作用と云ふのである。然るに外物を認識するには、どうしても眼なり耳なり或る感官を使用しなければならぬから、知覺は通例「感官に依りて、外物を認識する作用である」、と定義して居るのである。之を今少し詳はしく說明すると、知覺作用の働く場合には、種々なる感官に依りて生ずる感覺をば、何れの方面から來たものかと、其の因て來る刺戟の部位を認定し、さうして其處へ之等の感覺を投げ出し、一纏めにするものである。換言すれば、單に外來の刺戟に依りて、心中に起た種々なる感覺をば客觀視して何等かの外物と云ふ觀念とするものである。其故知覺は「感覺を材料にして、部位の認定と外界投出とに依て、外物の觀念を形造る作用である」と定義してもよいのである。そこで感覺は單に知識の材料となるに過ぎないもので、未だ知識とは稱へられないが、知覺作用に依りて、外物を認識し其觀念を形

造るに至つて、初て何等かの知識を得たことになるのである。恰も繪具は繪畫でないが、之を用ゐて何等かの物像を畫いた時に、初めて繪畫と云はれ得るようなものになるのと同じである。

斯くて知覺に就て問題となることは、其の遲速と確實である。換言すれば、事物を認識する働きが速いか遲いかと云ふことゝ、其の認識が正確か正確でないかと云ふことである。で若し知覺が迅速で而かも正確であれば、申分ないけれども、兎角迅速だと粗雜になり、正確にしようと思へば迅速には出來ないものである。依て今此點に就て男女を比較して見ようと思ふ。

二　知覺の性的比較　英人キャンベルが其の著「男女間に於ける神經作用の差異」中に引用して居る所に據ると、フーチンは曾て複雜なる知覺作用の速度に就て、特別なる注意を拂て研究して見たと云ふことである。それで此の人は或る淑女の觀察力の如何にも鋭敏なることを證明して居る。此の淑女は急速に驅けて居た馬車中の一婦人を見て、その婦人の帽子から靴迄、其の如何なるものであつたかを見極はめ、且つ服地の性質のみならず、「レース」は手製なるや器械製なるやをも鑑定し得たと云ふことである。又米人ギヤムブルが其の著「科學及び歴史に於ける性」の中にも面白い例を擧げて居る。それは米國で僞造紙幣の檢査に關する話であるが、米國各地の銀行ですら氣付かなかつた僞造紙幣が、一度大藏省へ回送せられ、そこで檢査掛である婦人の手にかゝると、單に觸覺で以て其の僞造たることを觀破否觸知するとのことである。紙幣は往々破れたり、ちぎれたりして居るが、若し一見して疑はしいと思ふと、檢査掛の婦人たちは直に眼を閉ぢ指の尖でなでゝ見るさうであるが、彼等は其鋭敏なる觸覺に依て、僅か半分間に其の僞造なることを確知するとのことである。之等の例は元より稀に見られることで、尋常普通のことではあるまいけれども、一般に女の知覺力觀察力は、迅速であり精細であり、到底男の及ぶ所でないと云ふことは、何人も能く承認して居ることである。「婦人の心」の著者なる、ロンブローゾ孃も、その書の中に次のようなことを云ふて居る。「男は五官をもつて居るが、女は百の感官をもつて居る。女は自分の身體の總ての毛孔を通ふして感じ、見、觀察するものである。女は通りがゝりの人についても、一目で以て其人の衣服なり、態度なり、さては心中の氣持を迄見拔くものである」。私は結婚披露などに招かれ、歸宅して花嫁さんの式服の色合ひなど家内から尋ねられ、何時でも答に窮するのですが、

之も極端な話であるか知れぬが、概して男はそんなもので、之に比較すると、女の觀察は精細なものである。然るに之を科學的に研究した人が少いので、確乎たる所說を掲げる譯にはゆかぬが、私の取調べた所で、漸くローマネスと、タムソン女史の實驗を得たので、玆には兩者の研究を紹介することにする。

ローマネスは、千八百八十七年の頃、雜誌「十九世紀」に出した「男女間の心的差異」と題する論文中に、そが實驗の結果を發表して居る。ロ氏は同一の文章をば、充分に敎育のある多くの人々に見せ、さうして出來るだけ早く之を讀ましめた。その文章は二十行程のものであつたが、十秒時の後に之を取り上げ、さうして直接に今讀んだ所の文章をば、今度は記憶から書き記さしめたのである。之は元より記憶力の良否を檢査することにもなるが、ロ氏は主として讀書の速度を實驗したのである。然るに此實驗に據ると、女は男に優り一層迅速に讀書し得るものであることを證明した。さうして女は單に迅速に讀書し得るのみならず、全體に亙つて細かい所迄注意の屆き得ることを發見した。假令ば一婦人の如きは、其夫なる男子よりも、四倍も速かに讀むことが出來たのみならず、細かに印刷した個所にも、能く注意してゐたことが分つた。併し迅速に讀書し得ることは、必ずしも知力の優秀なることを示めすものではなかつた。なぜと云ふに、其の時最も遲く讀んだ連中の或る者は、最も著名なる學者であつたからである。そは兎に角眼に依て文字を知覺することは、女の方迅速なることを明かにした。

又タムソン女史は、ジヤスツロー敎授の考案になる、手札分類器を用ゐ、以て手札を取扱ふ指尖の遲速を檢査して見たが、之は又知覺の巧拙を示めすものともなるので、玆に引用することにした。此實驗に用ゐた手札は、四種類あつて各其色を異にして居る。卽ち赤、靑、綠、黃色で、さうして各十枚づゝあるので、總數は四十枚もあつたのである。所で之等四十枚の手札は、最初雜然と混淆して置てあつたが、之をそれ〴〵色を異にした箱の中へ別々に入れ、以て整理する運動の遲速を檢査したのである。斯くて此の實驗の結果を見ると、女は男よりも著しく速かで、女の平均速度は男のより約二分早く、又何れの女よりも一層長い時間を要した男が數名もあつた。又女は手札の識別なり整理に於て、男よりも稍精密で過失の少いことを明かにした。タ氏は此の實驗の結果が、

骨牌遊びと密接の關係でも、ありはしまいかとの疑念を起したので、一々の被驗者について、平日骨牌遊びをしてゐるか、どうかを調査して見たが、此の實驗に於て、最も優れた成績を示めした者は、骨牌遊びに就て少しく經驗せるか、又は全く經驗のないものであることが分つたから、此の疑念は消失した。特に骨牌遊びは平日男に於て一層多く試みられるものであるから、若し影響ありとせば、男の方に利益となる筈であつたのである。其故此の實驗に於て、女の方が迅速精巧なりしは、要するに其の特性を表はしたもので、決して骨牌遊びなどの影響ではなかつたのである。

三　女性知覺力の生物學的基礎　なぜ女の知覺力は優秀なのであるかと云ふに、之は元より女の感神經が鋭敏で受感性の强いためであることは明かであるが、私は其の根元に遡りて見ると、之には確かに生物學的基礎があると信ずるものであります。一體下等動物では、雄が雌の甘心を求めんが爲に非常に努力するのは著しい事實であるが、雄は一般に雌でありさへすれば、その何れたるを問はず、何等取捨する所なきも、雌は之に反し雄に就て好き嫌ひがあり、多くの雄の中から特に自分の好みによりて、相手を選擇するものであることは、ダルヴィン以來一般に生物學者の認めて居る所である。それで雄は烈げしい性慾と、その爲に必要な爭鬪性と忍耐性とを、その特性として居るが、之に反し、雌は雄の性質を見別ける辨別力や趣味性を顯著ならしめて居る。現に米國ノースウエスタルン大學で生物學擔當のハーバー教授は、多くの動物實驗を試みた結果として、「雌は雄より知覺なり智慧の餘計に發達して居ること、即ち雄は多くののろい努力の末漸く理解することを、雌は迅速に容易く諒解し得ることを發見したが、之は吾々人類にも適用され得ることである」と迄公言して居る。さすれば女の知覺力鋭敏なるも偶然ではないと思はれる。

四　女性知覺の鋭敏なることの利害　前述の如く、女性は一般に受感性に富み、さうして知覺力、觀察力の迅速且つ精細なることは、最早疑ふべからざる事實であるが、之は女性にとりて利益のあることかどうかと云ふに、元より鋭敏であればあるだけ、精神力の優秀なことを證明する譯であるから、至極結構なことに相違ない、誰しも此くありたいものである。併し女性は一方に於て、反省力なり思考力に缺げて居ると云はれて居るので、單に受感性や知覺力の鋭敏なだけでは、餘り感心の出來ないことである。一體子供や野蠻人は受感性や知覺力に富んで居るものであるが、段

段と大人となり、文明人となるにつれて、反省力や思考力が發達して來るので、否さう云ふ風にならなければならないから、自然に受感性や知覺力は多少遲鈍になるの已むを得ないものがあるのである。尤も反省力や思考力の發達には、是非共受感性や知覺力の減退を伴ふと決つたものではない、ダルヴインやニュートンの如きは、知覺力にも富み思考力にも勝れてゐたと云はれてゐたのである。けれども一般から云ふと、反省力や思考力が發達して來ると、知覺力や觀察力は遲くなつたり、鈍くなるのを免れないようである。換言すれば前者の發達には、後者の能力を多少犧牲にせねばならぬのではないか。キヤムベルは眼鏡と思考力との關係に就て次のようなことを述べて居る。「吾々は一般に、眼鏡と知識又は學問を聯想するものであるが、要するに、視力が弱くなると、知覺の範圍が狹くなり、隨て思索する習慣を增すので、ために思考力に富むようになり、又近眼者などは多く座職を執つてゐるので、一層思索的の人となるのである」と、一理あることのように思はれるが、之と同時に學問なり研究に熱心なるため、視力を弱はめるのも事實であるから、此の兩者は互に因果關係をなすものと云ふべきである。それで吾々は知覺力の鋭敏なことを以て、知力の劣等なる表徵とすることは出來ないけれども、多くの場合未だ思索する習慣を養つてゐない、又は思考力の練磨に努めてゐないと云ふことは出來るかと思ふ。其故女性の知覺力に富んでゐるのは、元より有利なことで望ましいものではあるが、若し未だ思索力や思考力の充分なる發達を遂げてゐないようであるなら、それだけ女性にとりて缺陷となる譯なれば、多少知覺力は犧牲にしても、思索力なり思考力の養成に努力せねばならぬことである。

五　錯覺と幻覺の性的差異　知覺と連關して、その變態なる錯覺と幻覺とに就ても一言せねばならぬ。錯覺とは實際外界に刺戟があつて、之を見たり聞いたりする場合に、之を實物の通りに知覺しないで、見誤つたり聞き誤つたりする場合、その誤りたる知覺を指して云ふのである。それで錯覺の起るには、二ケの原因がある。一は生理的で感官の構造から必然的に起るもので、假令ば直線が曲線に見えたり、正方形が長方形に見えたりするような場合である。又一は心理的で、心に何か考へて居ると、それが自然に外物知覺の上に影響して、必然的ではないが、時として間違つた知覺を生ぜしめるもので、假令ば暗がりに恐はいと思つてゐると、繩の横はつて居るのも、蛇に見え

るようなこともあるのを云ふのである。又幻覺と云ふは、實際外界には何等の刺戟も存在しないけれども、單に吾々の心中に主觀的に起た物像をば、眞實外界に存在するかのように思ふ場合、假令ば誰も居ないのに、人の聲が聞えたり、又は幽靈の現はれたりなどするような、つまり誤りと云ふのでなくして、僞りの知覺を指して云ふのである。所で今錯覺は男女何れに多いかと云ふに、元より感官の構造から必然的に起る、所謂生理的の錯覺は男女間に何等の差異もあるまいが、偶然的に起る所謂心理的の錯覺は、どうも女の方に多いように、私は信じてゐます。尤も之につき實驗的研究を試みた人もないようですから、確實なことは云へないけれども、女性の思想は兎角先入主となることが多く、一旦思ひ込んだことは容易に捨てないで、之を以て萬事を解釋しようとする傾向の強いものであり、又恐怖心なども強く、苦勞性のものであるから、自然正しい觀察や了解が出來ないで、男性よりも比較的に錯覺が多いかと思はれます。又幻覺はどうであるかと云ふに、ジャング教授は婦人や子供及び無教育の人に多いと公言して居るが、尙ほ千八百九十四年に、シヂュウイック教授がロンドンで開かれた萬國心理學會で、公にされた報告書に據ると、明かに統計を以て之を證明することが出來る。シ教授は男女殆ど同數で、合せて一萬七千人程の人に對し、幻覺の經驗有無に就て問合はせたが、其中男では六百五十六名、女では千三十三名と云ふものが、特に幻覺を有することを答へた。然るに之を百分比例にして見ると、男性では七・八であり、女性では一二・〇となるので、女の方に幻覺の多いことは明かである。尤も此の場合に、男は多少事實を陰蔽したかも知れず、之に反し女は男よりも一層容易に事實を告白するものであるから、女子の百分比例を少しく割引せねばならぬかも知れないのである。併しそれにしても、一體女性は「ヒステリー」などに罹り易く、隨て種々なる變態現象をも起し易いものであるから、幻覺の女に多いことは爭ふべからざる事實であると云つて間違ひあるまい。特に前述の幻覺所有者男女千六百八十九名の中で、最も信用し得べき人々、千六百四十九名について比較して見た所が、百分比例は一層女性に多くなり、男の九・〇に對し、女は一七・一になつた程であるから、這般の事實は到底疑念を挾むべき餘地なしと云つてよからう。更に之等の人々を國籍に依て區別して見たが、其の百分比例は次のようになつて居た。

英米人	男	七・三	女　一一・四
露國人	男	一〇・二	女　二一・四
ブラジル人	男	二三・〇	女　二七・七

これに據りて見ると、何れの國人に於ても、女性は幻覺に富んで居ることを容易に承認せられることである。斯くて女性は知覺が迅速で觀察が精細であると云ふ事實と矛盾するようであるが、つまり神經過敏から起る一反面と見るべきで、婦人の長所が短所を生ずるものと考ふべきでありませう。

第六章　記憶及び想像作用

一　記憶及び想像作用の意義　記憶作用とは、曾て吾々の見たり、聞いたり、感じたり、行つたり、種々と經驗したことが、若干時間を經過した後に至り、其の事物なり、事件なり、事情の現在實際には起てゐないにも拘らず、吾々の心中に再現し來り、さうして吾々は其再現であることを意識して居ることを指して云ふのであるから、吾々は記憶をば、「自己の過去に於ける經驗の意識的再現作用である」と、定義してよろしいのである。所が若し既に經驗した所のものに基いて未だ經驗しないこと、又は既知の事柄に依て未知の事柄、又は現在意識して居ることから、過去や未來のことに思ひ及ばし、斯くもありしや、斯くもあるべきぞと、種々に想ひを運らすような場合には、之を記憶から區別して、想像作用と稱へるのである。其故吾々は想像を定義して、「過去に於ける經驗を材料として、更に新しい結合をなす作用である」とするのである。それであるから、記憶も想像も同じやうに、過去の經驗に關係のあるものであるが、記憶は過去の經驗をそのまゝ變化なく再現

せしめる作用であり、之に反して、想像は何時でも過去の經驗をば幾分かなりとも、變化し改造し、特に種々と組合はせて再現せしむる作用である。

所で記憶作用は通例三段階に分けられる。即ち把住、再生、再知の三作用である。再知作用と云ふは、記憶の本領とも云ふべきもので、現在心中に意識して居る事柄は、曾て過去に於て自己の實際經驗したものであると、再知する作用である。然るに斯樣なる再知作用の起るには、どうしても過去に於て經驗したことの再生すること、即ち再び現はれることがなければならぬからして、再知の因て起る條件を再生作用と稱へるのである。所が更に其の再生は如何にして起るやと尋ぬるにそれには一度吾々の經驗した事柄がそのまゝ消え失せないで、何所かに貯藏せられ、保存せられる所の作用がなければならぬ。依て其の働きを把住作用と稱へ、さうして再生作用の基礎とするのである。然らばその把住作用は如何なる作用であるかと云ふに、之は全く生理作用である。一體吾々神經中樞と云ふものは、一たび外來の刺戟を受くるや、どんなにか其の痕跡を留め、所謂印象を殘すものであり、隨つて或る機會に乘じ、再び同一の作用を營まうとする傾向を生ずるものであるからして、之が再生作用の生理的基礎となる次第である。所で一たび把住せられたものが、如何にして再生し來るやと云ふに、之に二種の方法がある。即ち一は自發的の再生で、一は伴生的の再生である。若しも一度受けた所の刺戟が非常に强かつたり、又は多大なる興味の伴つたものであつて、その爲に生じたる印象が大邊に深く殘留した場合に、若し他にその發現を妨げるような優勢なる觀念の現存しない限りは、それが自然に意識に現はれ來るようになるので、之を自發的の再生と稱へる。然るに自發的に再生する程の勢力はないけれども、他の觀念の表現又は再現につれて、之と伴生し聯合して再生する場合には、之を伴生的の再生、又は觀念の聯合と稱へる。所がその伴生法即ち觀念の聯合する方法は、種々あつて一樣ではないが、その著しいものを擧げるならば、接近の聯合、類似の聯合、對比の聯合等であり、其の外には、原因と結果、全體と一部、實物と記號、事物と屬性又は活動との聯合などがある。

以上大略記憶作用の說明をしたつもりであるが、そこで優良なる記憶作用とは如何なるものであるかと云ふに、それは即ち把住作用の充分なること、即ち印象の深きこと、又再生作用の容易迅

速なることと、加ふるに再知の確實なることである。

尙ほ想像作用に就て、一言して置きたい。若し特更工風すると云ふのでなく、隨て何等の努力をも要しないで、自然に無意識的に多少新しい形式のものを心中に畫くような場合には、之を所動的の想像と名付けるが、之に反して、自ら大に意匠を凝らし、工風を運らし努力して作成する場合には、之を能動的の想像と稱へる。それから又想像の作物が、實際の經驗から遠かる度合に依て、再生的と原造的の想像とに區別する。又想像の事柄により、實務的、科學的、美術的、道德的、宗教的想像などに分類することも出來る。斯くて立派な想像と云ふのは、なるべく多くの有益なる經驗を基礎として、何等か人生に價値ある原造的又は創作的のものを作成することである。

二　記憶作用の性的差異　記憶の良否を檢査し男女間の比較をするには、把住の强弱、再生の難易、再知の確知、觀念聯合の性質等を研究せねばならぬが、幸ひ之等の事項は何れも實驗的に調査し得られることであり、隨て多くの心理學者の試みたる研究の結果も、既に發表せられて居ることであるから、私は之等を參考として說明しようと思ふ。

記憶作用は男女何れが優良であるかと云ふに、そは女性にあること、多くの實驗に依て證明せられ、今や殆ど既定の事實なるかのようになつて居る。千九百一年に、コロンビア大學でなされた實驗では、視覺的、聽覺的、及び論理的の三通りに區別して、記憶の良否を檢査した。視覺的と聽覺的では、いくつかの數字を用ゐ、又論理的のものには、或る文章を聲高く讀み上げ、さうして後に之を再現せしめて、その難易を比較したのである。然るに其の結果として、視覺的記憶に於ては、女の方立派に優れ、聽覺的では男の方僅に優り、論理的のものでは男女間に差なきことを示めした。又千八百九十一年に、ウキスコンシン大學で、ジヤスツロー教授の試みたる實驗では、被驗者に單語を一つづゝ引續いて示めし、さうして其時心中に起た最初の聯想を書き取らして置き、更にそれを二日の後全く記憶から浮び出して、書き記るさしたのであるが、その結果もやはり女の方優良なることを示めした。又千九百二年に、獨逸のステルンは、被驗者に繪畫を示めし、さうして記憶力を檢査したが、此の實驗に據るも、女の記憶力は男に優り、一層完全なる記憶力を有するものなることを示めした。但し女は男よりも餘計に自分の想像した事項を加へたと云ふことである。又米人

ボルトンは、千八百九十二年に、中學校や小學校の生徒に、幾許かの數字の順列を聲高く讀み聞かせ、さうして之を再生せしめたが、女生徒は明かに優良なる記憶を有することを發見した。又露國のネッチャエフは、千九百年にペトログラードで、九歲から十八歲迄の學校生徒に就て、事物、音響、數字、單語等で以て檢査したが、僅かな場合を除き、女生徒は男生徒より優良なる回想力を有するものなることを確めた。斯樣にして、何れの實驗に據るも、記憶作用は女の方優良なることを示めして居るが、從來試みられた多くの實驗中只だ一つの場合に於て、之と反對の結果を呈して居るものがある。それは獨逸のエビングハウスが、千八百九十七年に、試みた所の實驗である。エ氏は十一歲と十二歲の男女兒に就て檢査したのであるが、女兒は男兒に劣つてゐたことを報告して居る。なぜ斯樣な結果を得たものか、どうも不思議であるが、或は此の時試驗せられた男女兒は、其學んで居る學校の性質を異にし、一は「ギムナヂューム」の生徒で、一は「メードヘン、シューレ」の生徒であつたから、自然精神的能力に優劣の差があつたからでは、あるまいかと疑つて居る人もある。

尙ほジャスツロー教授は、ウヰスコンシン大學で、千八百九十一年に、男女の學生各二十五人をして、出來るだけ早く、何等文章として連絡の附てゐない百個の語を書かしめ、さうして之に要する時間、卽ち聯想の早さと、語の性質に就ての比較的研究を試みた。然るに時間の長短については、男女間に何等の差異なきことを發見したが、聯想中に現はれた語の種類なり性質に關しては、男女間に著しい相違のあることを認めた。卽ち此の實驗に於て書き記されてたる語數は、總體に於て五千個であるが、其中約三千個は同一の語であつた。所が男生の用ゐた異りたる語は、千三百七十五個で、女生のは千百二十三個であつた。又全然單一で他に用ゐられなかつた語は、全體に於て千二百六十六個であつたが、其の中百分の二九・八は男生で、二〇・八は女生の用ゐたものであつた。して見ると、同一語は女生によりて多く用ゐられ、隨て女生の用ゐた語の範圍は、狹小であることを示めして居る。又凡ての語を分類すると、男生には、動物、固有名詞、動詞、器具、形容詞、植物、抽象名詞、氣象學や天文學に關する語、其外には職業、運送、他の品詞、地理、景色等の語が多數であり、同時に女生には、織物、衣服に關する語、家內器具室內裝飾品、食物、建築及び其材料、鑛物、

文房具、教育品、美術、娯樂、家族等に關する語が多く用ゐられた。さうして男女兩生によりて同樣に用ゐられたのは、身體の各部、雜商業上の語であつた。尙ほ男生によりて、最も多く用ゐられた語は、動物界のもので、その數二百五十四個、(女生では百七十八個)又女生によりて、最も多く用ゐられた語は、織物、家內器具に關するもので、其の數二百二十四個(男生では百二十九個)であつた。是に由つて之を觀れば、男生の觀念界は主として外界の動物、卽ち活動せるもので、女生の觀念界は主として衣服とか家內のものに依つて占められ居ることを認めることが出來、以て女生が如何に衣服に注意するかを知るに足ることである。更に食物に關して、男女學生の用ゐし語數を擧げて見ると、男生では僅に五十三個であるが、女生では百七十九個であつた。是に由りて觀るも、女性の興味は如何に食事や料理の方に向ひて居るかゞ分かる次第である。それでジ教授は、男女の性質を比較して、女は身の周はりにあるもの、出來上がつたもの、裝飾的のもの、個體的、具體的のものに注意を向けるが、之に反して男は身邊より遠くに離れたるもの、構成的のもの、必要品、一般的、抽象的のものに注意を向けるものであるとの結論を下して居る。然るに米國ウエルズレー女子大學の教授なるカルキンス女史は、千八百九十四年にジ教授と同一の方法で以て比較して見たが、男女學生の用ゐし語の種類は同樣で何等の差異なく、又彼等の用ゐし單一語は、却て女生に於て多數なることを發見したので、ジ教授とは全く反對の結果を得て居る。尙ほカ氏等はジ氏の下せる結論に對し、これは男女の根本的なる性的差別に基くものでなく、全く幼時からの境遇なり教育の如何に依ることであると、大に女性の爲に氣焰を吐て居るが、私もその然るべきを信ずるけれども、男女間の差異を全然無視するのなら贊成出來ぬ。今一つの聯想の早さに關し、コロンビア大學で試みた實驗を擧げて見るなら、こゝでは被驗者に九個の語を手札に印刷して與へ、さうして之に就て起る最初の聯想を記さしめ、以てその速度を檢査したのであるが、男生は女生より一層迅速なりとの結果を得た。

聯想に關し以上列擧した實驗では、早さに於ても又語の性質に就ても、各一致しないから、女性の特徵は果して何れにありや、吾々は聊惑なき能はざる次第である。但し之等の問題は、被驗者たる女子の境遇や、教育に依りて、如何樣にも變化するものであるから、或は結論の一致しないのが、

當然であるかも知れぬ。併しいくら女子の境遇なり、教育を改めても、男女は各その體質を異にしてゐるものあり、又毎日の仕事も分業的に違つてゐるとしたなら、精神上にも多少の差異を見、各特徴の存すべき筈であるとも思はれる次第である。そは兎に角之等の問題は、獨斷的に決定すべきものでないから、私は更にタムソン女史の綿密なる實驗を參考し、之に依りて女性の特徴を調査するの至當なるを感ずるものである。

タ氏のなせる記憶の實驗では、(一)暗記力、(二)把住力、(三)記憶型と三樣の比較研究を試みたのである。

第一、暗記力の調査では、聽覺と視覺の兩方面からやつて見たのである。それには先づ字母を適宜三字づゝ組合はせて、無意味の綴りを二通り作り、さうして一は聽覺、他は視覺に訴へることにした。それで被驗者に對し、一秒時に一個づゝ示めし、さうして全然覺え込む迄幾度なりとも、必要に應じ之を反復して教示した。それで何れが早く、換言すれば教示する際反復の度數少くして、暗記するに至るかを檢査したのである。所が其の結果として、聽覺的、視覺的何れに於ても、女性は男性よりも著しく大なる暗記力を有するものなることを證明した。

第二、把住力の檢査では、前述の實驗を終はり、何等の豫告を與ふることなく、全く不意に一週間の後に至り、一度暗記せしことを再び回想せしめたのであるが、其の結果として、男女間に差異なきことを發見した。

第三、記憶型を檢査することは容易でないが、實驗終了後被驗者をして、充分注意して實驗中に、如何なる心的過程を有せしやを考察せしめ、以て比較したのである。所が男性には聽覺型に傾けるもの多く、又女性には視覺型と動型に傾けるものゝ多いことを發見した。

尙ほ聯想の實驗に於て、タ氏は登錄、集會、圖書館、失敗、入學、職員、體操場、蹴鞠、幹事、學位等、凡て學生々活に關係ある單語十個を選びて、之を被驗者に示めし、さうして一語の聯想に與ふる時間は一分三十秒とし、此の間に思ひ浮べる觀念を記るさしめ、其の數に依て聯想の速度を比較したのである。所で其の結果は、一語に於て男性優り、四語に於て男女差なく、他の五語に於ては女性の優る所となつたが、總體に於て女性は大に優れて居ることを示めした。之と同時に聯想中に現

はれた所の題目の多少を檢査したが、女性の方多數の題目にふれて居ることを發見した。斯樣にしてタ氏は、聯想に關して單に數量的の研究をなしたに止り、觀念間の關係即ち聯想の性質的研究は、仲々困難であると云つて調査しなかつた。依て玆には、ジヤスツロー教授が、特にエリス氏に與へた實驗の報告を以て之を補ふことにする。ジ教授は被驗者に十個の語を與へ、さうして之に聯想せる五個の語を書き記るさしめ、其の答案に基いて分類を作つたのであるが、男では、音の類似聯合、(例令ば、「マン」と「キヤン」)全體より部分、(例令ば、木と葉)物體より活動(例令ば、筆と書くこと)同種類の事物、(例令ば、猫と犬)等の聯合であり、又女では、部分より全體、(例令ば、手と腕)物體より性質、(例令ば、木と綠)性質より物體、(例令ば青と空)等の聯合であることを發見した。吾々は元より單に這般一個の實驗で以て、直に男女間に於ける聯合法の差異を說き、觀念伴生の特徵を定める譯にはゆかないけれども、多少の參考にはなる次第で、之に依りて、概して男の觀念活動は、分解的、活動的であり、女のは、總合的、靜止的であると推定する根據になり得るかと思ふものである。

之を要するに、女性に於て記憶作用の一層優秀なることは、全く疑ふべからざる事實である。さればにや、女性知能の劣等說を固持して居る、那威のウイート、クヌードゼン教授でも、此の事實は認めて居ると見へ、其の著「女權主義(フエミニズム)」中に、「再現作用、模倣的能力は、多くの知能中で僅に女子の男子と競爭し得るものであり、そのために役者や聲樂家としては、女子も男子と同じように成功し得るものである」と云ふて居る。さう云ふ譯であるから、我國でも昔古事記編纂の際、古來の傳說口碑を諳誦してゐたと云はれる、稗田の阿禮が婦人であつたと云ふのも、なる程と首肯せられることである。然るにハートレーも勿論這般の事實を承認してゐるが、之を以て女子の特色と見做すに就ては、注意を要すとて、大略次のようなことを述べて居る。即ち餘り必要のない詳細な記憶は、子供や教育の程度の低い、隨て知識の範圍は狹く、何等思想の練習もない人々に於て見られることであるから、このような記憶を有つて居ることは、つまり知能發達の低劣なることを示めすもので、本當に記憶力が鋭敏であると云ふことゝは全然異るもので、餘りあり難い話でない。依て女性の記憶力に於て優れて居ると云ふのは、果して何れにありやと尋ぬるに、一體女性の精神力は天

才のそれのように旺盛であり、隨て刺戟を感受し印象を生ずることも銳敏であり、爲に之を保留することも强固であり、之を再現せしめることも容易な譯であると說き、更に進んで女性の心的特質と天才のそれとは多くの點に於て一致するものであると迄に述べて居る。女子と天才との關係に就ては後に說明することにするが、兎に角ハ氏の記憶說は女性の精神力を餘りに讚め過ぎてゐる。之はクヌードゼン敎授などの主張する、女性の知的劣等說に對する、聊か反抗の氣分も手傳つて居ることゝ思はれるのである。それで公平に考へて、何故女性の記憶は優秀であるかと云ふに、つまり女性はその感受性强く且つ知覺力觀察力が銳いから、一度見聞したことは、容易に忘却されない程深い印象を殘すからであることは勿論であるが、之と同時に多くの場合、その經驗する事柄の範圍が狹く、換言すれば知識の內容が少いからであり、特に又男性に比較して、推理力や思考力の充分に發達してゐないためであると、私は確信してゐます。其故女子は記憶力に富んで居るとは云はれるけれども、多くは器械的に記憶するに止り、能く事物の關係を理解し、さうして論理的に記憶することは、餘り巧みでないようである。マリオン敎授も女生徒達につき、明かにその事實たるを認め、彼等は歷史上の事件や逸話などなら、其のまゝ間違ひなく記憶して居るが、事件の因果關係などになると甚だ不得手であると述べて居る。ロンブローゾ女史も、次のように云ふて居る。「女子の觀察銳敏なると共に、その見たり感じたりした事實を銘記する驚くべき能力を有することを認めるけれども、その記憶は、月日や、規則や、抽象的理論などに關することになると、甚だ拙劣である。それであるから、婦人は實際に見聞して得た印象や、喜びや苦しみの感情は決して忘れないものであり、隨てその受けた恩義に對する感謝の心や、毀害に對する嫌厭の情は、仲々强いものである」と。

三　想像作用に於ける女子の特色　從來想像作用に就ては、實驗的なり統計的の研究が出來てゐないから、玆に確乎たる學說を擧げる譯にゆかないのは、吾々の甚だ遺憾とする所である。併し多くの心理學者の觀察に基いて立言すると、大體女子は想像力に富み隨て自己の見聞した所に、勝手な扮飾を加へ、兎角事實を誇大視する傾きのあるものである。マリオン敎授は、女性の想像に就て次のように云ふて居る。曰く「女子は概して想像の多いものである。それは屢々もつと少なけ

ればよいと思はるゝ程である。なぜと云ふに、彼等は彼等の苦痛でも、恐怖でも、希望でも、隨て又其詐僞(デセプション)をも、餘りに仰山にする、所謂針小棒大にする癖のあるものであるからである」と。此點に於ても女子は子供や野蠻人に似て居るようであるが、然らば何故女子は斯くも想像に富めるやと云ふに、前にも述べた通り、女子は知覺鋭敏にして、記憶も容易であり、且つ聯想も迅速であるから、一つの觀念を心中に浮ぶるも、直に他の種々なる觀念を憶ひ起し、さうして之を混淆せんとするものである。恰も子供や野蠻人は其見聞する所に基き、之を材料として盛んに心的活動を起すものであるが、悲い哉、未だ推理力や思考力の發達してゐない所からして、單に想像を逞ふするのと能く似て居る。チヤムバーレインの著「兒童」中に引用して居る、ロンブローゾ孃の言に、「子供の想像は大なる知力の結果ではなく、寧ろ知力の缺陷に基き、禁止作用の缺乏に依て生ずるものである。其故子供の思想は、言葉や觀念の偶然的聯合によりて跳び去り、少しも落ち付かぬものである。換言すれば、子供は何も新奇な原造的のものを工風したり、創造することは出來ないが、非常に暗示され易いので、容易く一つの印象から他の印象に過ぎ去るものである」とあるは、勿論子供の精神狀態を描寫したものであるが、それが又女子の精神狀態に適合するのである。女子は前述の通り何事でも其見聞する事柄に就き、妄りに聯想する所を附加し、以て事實以上のものとするので、往々事物の眞相を誤り、爲に空想に走せ、謬見に陷り、隨て子供と同じように、無意識的に虛言を吐くことも、屢々見受けられる次第である。ステルンの記憶に關する實驗中、女子は自分の想像を附加した所が多かつたと云ふのも、亦自ら女子の想像力に富めることを暗示するものである。

斯くの如く女性は、子供と同じように想像力に富んだものであるが、併しそれは單に所動的又は再生的想像たるに止り、能動的とか、原造的とか、創造的と稱へらるゝものに至ては、甚だ幼稚なもので、マリオンの引用して居る、セレクタンの言に、「女子の創作力は微弱である。例令ば音樂に就て云ふも、女子は自分達の中に、第三流の作曲家すら出し得ないのは、つまり創作力の微弱なると云ふより外、如何にして解釋し得べきぞ」とあるは、つまり女性の創造的想像力に缺けたることを說いたものである。ワイニンゲルは、女性が音樂史上何等貢獻する所なきは、明かにその想像力に乏しきためなりと述べたのは、事實に基いて立論したもので、何も女性を罵詈したのではない。女

性の最も好む音樂に於て然り、況んや他の方面に於てをやで、ワ氏は婦人の建築師と云ふ觀念程悶笑すべきものはないと云ふて居るが、此方面に於ける女性の如何に無能なるかを表示するものである。更に種々なる工藝技術の發明に於ても亦然りで、マリオンの擧げて居る、大分古いものであるが、佛國の統計では、發明特許證を得た五萬四千人の中で、婦人は僅に六人のみとなつて居るのも、之を證明して餘りあること丶思ふ。左樣な次第で、强て云ふなら文學に於ては、多少名をなした婦人もないではないが、其外では、科學にもせよ、哲學にもせよ、宗教にもせよ、苟も獨創的、原造的と稱せらるゝような想像の發現は、女子に於て餘り見受けられないのは、全く否定し難い所である。クヌードゼン教授も、之を婦人の特徴と認めて居るが、然らば婦人は元來斯樣な創作力、工風力を缺いて居るのかと云ふに、私は必ずしもさうとは考へない。つまり之は教育の不足であり、高尚なる知力の發達しないためであり、又生活狀態の然らしめたものと思ふ。そは兎も角要するに女子の想像は、日常生活に於て、その觀察したる、主として感覺的、具體的、人事的の事柄を材料とし、又特に意匠を凝らすとか、工風を練ると云ふような努力を待たずして、殆ど本能的に起る所の、所謂所動的にして、且つ再生的のものたるに止り、進んで抽象的、科學的、哲學的の事柄に就て、獨創的、創造的想像を運らすことは、一般に女子の不得手とする所で、少くとも現在に於ては、之を男子に讓らなければならぬようになつて居る。

第七章　思考作用

一　思考作用の意義　吾々は知覺作用に依りて外物を認識し、後又之を記憶作用に依りて再知し、更に想像作用に依りて、之等のものを種々と新しい形式に結合し得るものであるが、斯樣なる知的能力の外に、吾々は尙ほ幾多の事物を比較して、其の異同を識別し、さうして相互の間に何等かの關係を付ける所の一層高尙なる知能を有するものであるから、之を知覺や、記憶想像などのような作用から區別して、思考作用と稱へるのである。其故思考作用は、「吾々の經驗せる事柄に關係を付ける心的活動である」、と定義してよいのである。斯く關係を付ける作用であるから、吾々の知能が發達して、幾多の經驗した事物の間に存在せる種々なる關係、例令ば、異同の關係、時間と空間との關係、事物と屬性との關係、因果の關係等に就て、理解し得るようになつて、初めて出來ることであり、又自ら努めて思慮を遲らし、有意的に思索するにあらざれば出來ないものである。それであるから、幼時知能の發達が尙ほ不充分であつたり、又は大人となつても、無教育のため知力の練磨が出來てゐなかつたり、又多少の練磨は出來てゐても、怠惰にして思索することを厭ふたり、又は感情などの爲に妨げられて、靜思することの出來ないような場合には、思考作用の活動は到底滿足に出來るものでない。

さて思考作用は之を三段階に分ち、(1)觀念間に關係を付ける概念作用、(2)概念間に關係を付ける判斷作用、(3)判斷と判斷との間に關係を付ける推理作用の三作用に區別することが出來る。斯くて推理作用は、演繹推理と歸納推理の二つに分けるが、要するに、斯く種々と關係を付けるので、吾々の知識は概括せられ、整理せられ、合理的の確實なものとなされるのである。所で斯樣な働きをするには、事物の屬性を事物から引き離して考へる所の抽象作用や、又多くの事物に就き、其異同を區別する比較作用なり、又之等抽象、比較の結果として、何とか決定する綜合作用を必要とするものである。其故に之等の作用に熟練しないものは、到底完全なる思考作用を營むことの出來ないのは、云ふ迄もないことである。尙ほ這般の比較や綜合をなす場合には、同じものを同じものと判斷する同化作用、違つたものを違つたものと認定する異別作用の働くものであるが、論理學では、

「甲は甲なり」と認定するのを同一律と云ひ、又「甲は非甲にあらず」とするを矛盾律と稱し、思考の二大原則として居る。それ故若し「甲は甲にあらず」とか、又は「甲は非甲なり」など、、考へて怪まないものがあつたなら、それは思考の原則を無視したもので、狂者にあらずんば、無智の徒で、共に事理を談ずる資格のない者である。

二　女性の思考作用　女性の有する思考作用の特色は、どんなものであるかと云ふに、之を闡明するに就て、確實なる實驗的研究のないことは、吾々の甚だ遺憾に思ふ所である。どうも實驗的研究の結果に基かない立論は、何に限らず兎角獨斷的に流れ易く、隨つて公平なる又確實なるものと云はれない。と云つても思考力の如何は、感覺や記憶とは違つて、容易く實驗の出來ないものであるから、前述のやうな事情の下にあるのも、又止むを得ない次第である。それであるから私はなるべく多くの心理學者なり、哲學者が各自の觀察に基いて立論せる所を參考し、之を豫て私自身の觀察推測せる所に照合し、さうしてなるべく公平にして確實なる說明を試みたいと思ふものである。

マリオン教授は、斯う云ふことを述べて居る。「一體女と云ふものは、極めて悧巧なものである。何れの國に於ても、又何れの階級に就て見るも、皆然らざるはない。佛蘭西では、世に最も稀れなるものは、馬鹿な婦人と云ふ諺のある程である、」と。之は蓋し事實であつて、何人も首肯しないものはあるまい。今之を無敎育な下等社會の婦人に就て見るも、彼等は一般に萬事に能く氣が付、隣り近所との交際なり、客人の應對に人をそらさぬ上手な所があり、おまけに貧乏世帶を甘く切り廻はし、時には屋賃の督促を辯才で胡麻かすなど、仲々才智の優れたものがあり、到底男子の及ばぬ所である。まして多少たりとも敎育ある中流なり、上流の婦人に至ては、一層顯著なるものがある。斯く悧巧で世才に長けて居ることは事實であるけれども、併し之を以て女性は一般に推理力に富んで居ると云へようか、論理透徹、判斷適確、思想深遠なりと云ふことが出來るであらうか。其悧巧と云はれるのは、單に日常生活に關し、所謂世事に就てのことのみであつて、自然界精神界凡ての方面に就て、論理的に推理し、思索し得る能力をもつて居ることではないと云ふのが、大體から觀測した時に、事實に近いものではあるまいか。

そこで第一に攻究して見たいと思ふことは、一體女性には論理的頭腦が備はつて居るか、どうかと云ふことである。之に就て、ワイニンゲルは其の著「性と品性」の中に、女子は思想の原則たる、同一律なり、矛盾律なり、因果律を無視して顧みないものであるから、所謂知的良心を缺ぐものであり、隨つて無論理的性質を有するものであると云ふような意味のことを述べて居る。之は云ふ迄もなく、ワ氏自身の假定せる理想的女性、即ち絶對的女子に就て論定したもので、元より極端な議論であつて、一般の女性に對しては、之を侮辱するの甚だしいものであるから、吾々は何所迄も其の非を鳴らさねばならぬと思ふ。女子とて同じ人間であり、苟も思考力を具ふる以上は、思想の原理に從はねばならず、隨て程度こそ低けれ、論理的頭腦の持主たることは、元より云ふを俟たぬが、併し又翻て考ふるに、ワ氏をして斯く迄に、痛論せしめた原因もないではないと思はれるのである。若し私の觀察をして誤りなからしめば、女性の判斷は兎角徹底しない所があり、加ふるに感情も手傳つて、往々玉石混淆と云ふか、善惡同一視と云ふか、つまり事物の異同を識別せず、全然思想の原則に準據しないような場合もあり、又心が變り易くて、昨是今非と云ふべきか、一たび正當と思つたことも、直に之を放棄して其反對に出づるようなこともあり、特に又女性には虚僞多く、口と腹とは正反對のことも屢見受けられるので、同一律や矛盾律には無頓著で、何等意に介しないように見えたり、又女性には宗教的迷信の多いものであるから、何でもないことでも、一寸普通に見受けられない變はつた出來事でもあると、直に不思議である、奇態であると之を奇蹟視する癖もあり、又少しでも困難なことが起ると、直様神佛に祈願して其の守護を求めると言ふ風で、どうしても自然法だの、因果律なと、云ふものは容易に諒解されないように見えるものである。此の如きは元より教育の程度如何に依ることで、何も婦人女子に限つたことではない、男子の間にも屢見受けられることであるけれども、婦人間では相當の教育あり學識を具ふる人として、尚ほ且つ從來の慣習や持前の感情に制せられて、其の非を悟らないもの〻少くないのは、明なる事實のように思はれる。それでワ氏の議論は元より極端ではあらうが、兎に角女子は概して論理的頭腦を缺ぐと云ふことに異論はない。ショッペンハウエルも、其の「婦人論」中に「女子は單に現在の境遇に心を奪はれ、目前の具體的事物に思を注ぐので、過去や未來の事柄、又は遠く離れて現存しない事物の

上に迄、抽象的原理に依りて考へ及ぼすような、推理力は薄弱なものである」と云ふような意味のことを述べて居るが、強ち氏一流の筆法で妄りに婦人を罵倒したものであると即斷する譯にはゆかない。然るに、クヌードゼン教授は次のようなことを云ふて居る。「婦人は一般に論理的才能を缺ぐと云はれて居るが、それは誤りである。否其反對に、婦人は鋭い辯證法に長けてゐるものである。併しそれが眞の觀察力を伴はないのが缺點で、要するに、婦人の論理は不生産的で、往々役にも立たない詭辯に陷つてゐる」と。之は多分婦人參政權運動者などの議論を批評したものであらうが、無效な論理なら、あつてもないと同じことで、つまり女子は悧巧だが確實でないと云ふのと變はりはない。そこで婦人自身の意見を扣いて見るに、マリオン教授の質問に答へて、「論理學は女子の作つたものでもなければ、又女子のために作られたものでもない」と云つた、名ある一婦人の自白もあるが、彼のロンブローゾ女史は、這般の事實を承認して居るばかりでなく、之は寧ろ當然のことであるように云ふて居る。曰く「婦人は母たるべく生れて來るので、論理、抽象的觀念、演繹的辯論などには、何の關係もなく、それは彼女の子供を養育するに、何の援助をも與へないものである。一體男子は女子に、その進路を滑かにし、その生活を愉快にし、その家政を整へ、その子供等を養育し、內顧の憂なからしめんことを要求するので、女性の知能はその要求に合致すればよいのである。其故直覺、觀察力、器用（インヴニアスネス）なこと、工夫力（インヴエンチブネス）などがあれば充分で、之等の能力は婦人の働きに大なる援助を與へるものであるが、若し婦人に男子と同じような知能を賦與せられたなら、それは却て婦人の任務を盡すに不適當となり、さうして個人的にも社會的にも、非常な災害を來すであらう」と。隨分思ひ切り極端な保守論を吐いたものである。それなら論理的知能は全く婦人に不必要なのかと云ふと、さうでもない。ロ女史の言に「論理や道理は吾々の行動を支持し、道德的感情を建設するに、必要なる柱石となるものであるから、此點から考へて見ると、婦人の論理心を缺げるは悲しむべきことであり、隨て婦人はその態度を改めねばならぬ」と、附け加へて居るが、之は無論のことで、當然過ぎる程當然なことであると、私は考へます。さう云ふ次第であるから、兎に角女子の思考力は到底男子に及ばない、女子は著しく論理心を缺ぐと云ふことは、單に男子の勝手な推測に止るものではなく、之は確かな事實であると承認してよろしい。

三　概念作用　所で思考作用の第一段階たる概念作用に就て、女子の特色を考査して見よう。一體概念作用と云ふは、個々の事物を比較して、其の異同を識別し、さうして其間に存する共通の點を抽象し、更に之を概括して、所謂共通觀念即ち概念を作ることであるが、之は女子に取て甚だ不得手なものである。瑞西のチューリッヒ大學は、歐羅巴で女子にその門戸を開いた最も早いものゝ一つであるが、そこのフォグト教授の報告によれば、優秀なる記憶力と、貧弱なる概括力とは、女學生の特徴であると、獨り女學生に限らず之は一般に婦人の特色であるようである。然らば何故さう云ふことになつて居るかと云ふに、前にも述べて置た通り、元來女子は一般に受感性強く、知覺は迅速である所からして、自然と現在目前の事物に注意すること深く、換言すれば、五官を通ふして經驗することに心を奪はれ易いので、爲に意識活動の內容となるものが、多くは感覺的、具體的、個體的の觀念に止るようになり、又其上に女子は識別力なり比較力に乏しく、反省力や思索力に缺げて居るので、どうしても進んで抽象的であり、一般的、概括的である所の概念を構成することが六ケしくなるからである。又女子は一體に保守的であるから、爲に現在の知識に滿足し、進んで相互の間に存する關係を發見しようなどと云ふ、進取的の氣象に缺げて居るので、自然に概念作用は貧弱なものとなつて居るものと思はれる。ヌードゼン教授は、男女の知能に就き、次のように比較して居る。（第一）男子の觀察は、その周圍の有らゆる事物に及ぶが、女子の觀察は、その周圍に於て最も接近し居るもの特に夫とか子供とかに限られて居る。（第二）男子は、その觀察した多くの事物に就て、顯著なる比較作用を營み、その結果として、事物相互の間に聯絡のあることを發見するが、女子は、さような心的活動をなさないので、單に事物の雜然たる混合を有するのみである。（第三）男子は更に進んで、人生に必要なる何か或る新しいものを創作する力を有つて居るが、女子は之を缺ぐと。之は必ずしも特に概念作用の長短を論じたものではないけれども、又此方面に於ける女子の特色を示めすものと思はれるのである。ワイニンゲルも此點に就て斯樣に云ふて居る。曰く「論理的公理は概念作用の基礎となるものであるが、同一律は彼等の爲に必然的の標準ではなく、又矛盾律を使用することも妨げられて居るので、女子は概念作用の活動を缺いで居る。斯くて女子の觀念は確實性を失ひ、徒に感情に富んだものとなつて居るので、漠然たる聯想に

より、根本的に異りたるものを結合するような過誤に陷て居る。而かも女子は之を以て滿足し、敢て反省する所なきは、即ち概念作用を缺いて居る證據である」と。要するに女子とて全然概念作用を缺いで居る譯ではないが、甚だ不得手であり、又その礎實性に乏しいことは爭ふべからざる事實であると斷言して差支えなからう。

四　判斷作用　之は前述の通り、概念と概念との間に關係を付ける働きであるが、その關係にも色々あつて、「人は動物なり」、又は「人は犬にあらず」と云ふは、二つのもの〻間に存する、類似又は差異の關係に基いて判斷したものである。又「書籍は机上にあり」「某は明治生れなり」など〻云ふのは、即ち事物の存在する、空間又は時間の關係から判斷したものである。又「花は美し」と云はば、事物と屬性の關係から、「太陽は光の源なり」と云はゞ、因果の關係から、判斷したものである。詳はしいことは普通の心理學に讓るとして、さて判斷作用に於ける女性の特徴はどうであるかと云ふに、元より概念作用に不得手である女性のことであるから、判斷作用に於ても亦不正確なるを免れないのは止むを得ないことであるが、その特徴と認められるものを擧げよう。

（第一）その直觀的、具體的なることを擧げたい。それはどう云ふ意味かと云ふに、一體女性は前に屢々說明したように、受感性に富み刺戟され易い所からして、注意が多くその方に向ひ、爲に見たり聞いたり、直接に五官を通ふして經驗される事柄に就て、彼是判斷することの多いものである。即ち女性の判斷は直觀的、具體的と云はれるのである、それ故女子の觀察判斷する所は、如何にも精細であり、緻密であるけれども、兎角一方に偏した、部分的個體的のものとなり、隨て直接に見聞しないことや、事物の總體に亙つた、概括的や批判的のことに及ばないものであると云ふことは、一般に承認せられて居る所である。此點に關し、エリスはラフイツトが其の著「同等の逆說」と題する書中に說いてゐる所を引用して居るが、私も其の所說至て公平で、正鵠を得たものと信じますので、玆にもそれを少し引用することにした。ラ氏曰く「女子には受感性が最も著しく發達して居るが、之は早く幼時から見受けられることである。斯く女子は印象を受けることが活潑で、且つ之を保留することも得意であるから、事實を了解することも容易であり、又之を記憶することにも長けて居る。之を醫學校の生徒に就て見るに、女生徒は生理學や病理學では細かに事實を諳誦して

ゐるので、試驗官を驚かすこともあるが、臨床上の試驗になると劣等たるを免れないものである。之れ要するに、女子は規則よりも事實、一般觀念よりも特殊觀念を了解するに適して居ることを示めすものである。今甲なる個人に就て觀察する場合に、男子はその大體に於ては細かい注意もしようが、女子は之に反して、その人に就て特殊の點、例令ば身振りであるとか、顏付であるとか、又はその慣用語など一々綿密に觀察するものである。之を女流文學者に就て見るも、マダム、ヅ、ステールや、ジョージ、エリオットなどの著作は、全體としてよりも、部分的に詳細なる點に於て、その價値を認められ、且つ別してその書翰體の文章が、男子よりも優れてゐるのである。男子は報告書でも起草するように、冷淡に書き上げるが、女子は之に反して、事實から得た深き印象を追ふて、細々と自己の感想を書き記るすので、何等修辭を用ゐずして、生氣潑溂たるものがあるのである。畢竟するに、女子は事實其物に興味を有ち、男子は事物相互の關係に就て、一層多くの興味を持つて居るものである。若しラ、ブルイエールを以て女性の天才とすれば、デカルトは男性的天才の典型である。つまる所、女子の心は一層具體的であり、男子の心は一層抽象的である」と。ロンブローゾ女史も、婦人は極度の寫實派（リアリスト）であり、實證論者（ポヂティビスト）であると云ひ、尙ほ次のようなことを述べて居る。曰く「女子は大なる總合、一般的理論を甘受することの出來ない、又抽象的規則を理解するに苦しむものである。その代はり男子の屢々陷る無益な空想から救はれて居る。婦人は往々その言語文章に於て、屢々若干誇張する所もあるけれども、決して現實より離れることはない」と。さう云ふ次第であるからして、女子は吾々が單に一般的に云ふたことを、直に特殊の事物、場合に當てはめ、之を具體的に考へるので、屢々誤解を生じ、感情を害するようなことの起り易いものである。心理學者のリボーも「女子は抽象的觀念をば常に特別の事物や一定の經驗に關聯して、之を具體的に考へるものである」と云ふて居る。女子の思想が具體的である寫實的であるのは差支えないが、そのために往々表面的であり皮相的で、どうも徹底しない所があり、如何にも淺薄だと云ふ謗りを免れないこともある。さればワイニンゲルが「女子の思想を以て、事物から事物へ滑べり行くようなものであり、單に表面的に味ふばかりで、其の奥底に達しないものだ」と云ふて居るのも、蓋し過言ではあるまい。

（第二）女子の判斷は感情的である。よしや具體的にもせよ、又は直觀的にもせよ、若しも事物を觀察して、事物其物の性質上から冷靜なる判斷を下すのであれば、それが淺薄な知識、皮相の觀察だと非難されたとて、尙ほ正當な判斷、確實な判斷、誤りなき判斷とは云はれるであらうが、彼等は往々事物に對する自己の主觀的態度に依りて、之を批判せんとするものであるから、其の下す所の判斷は實に危險極りなきものとなるのである。詳はしく云へば、彼等は事物の眞相よりも、之に對する自己の好惡、愛憎、快苦等の情を以て判斷せんとするものであるから、其斷定は飛んでもない誤謬に陷るものである。」然るに感情は心身の狀態如何に依つて常に變化し、或る事物に對し必ず一定不變の感情を惹起すとは限らないものであるが、特に女子の感情は生理的にも自然に變動し易いものとなつて居るから、彼等の思想も常に動搖し、爲に一定不變の考へとか、確乎不拔なる意見など云ふものは、容易に見受けられないことになつて居る。されば、マリオン教授が「女子の思想は、感情の動搖せる陰影に過ぎず」と明言してゐるのも、亦無理からぬことであり、ハートレーが「女は情緒を通ふして考へ、男は腦髓を通ふして感ず」と云ふて居るのも事實に近い。

斯樣な次第であるから、吾々は女子をして平素今少し冷靜な理知的態度を取り、事物に對する正確なる判斷を下し得るように教育せねばならぬと思ふ。尤もロンブローゾ女史は、此の點に就き次のようなことを云ふて居る。即ち「婦人の天職は母たることにあり、而して母性の本質は他愛心にあり、それ故に婦人は宇宙間の萬物をば母心を以て眺め、植物も動物も人類も、抽象的のものとして、何等興味を起さない。彼等は喜び悲しみ得る有情的のものとして、又わが愛を受納し且つ應答するものとして、婦人は興味を感ずるのである」と云ひ、之を以て當然のこと、否婦人の本領であると認めて居る。私は母性愛を以て婦人の特色とすることに何等異存はないが、ロ女史が母性愛を尊重する餘り、正當なる判斷作用の必要を無視するやの嫌ひあるを遺憾とするものである。一體女子は感情的であるから、より多く感情の支配を受け、その影響の大なるも亦已むを得ないことではあるが母性愛に限らず、凡て自分の感情と云ふ色目鏡で以て、常に萬物を觀察するようでは、到底その眞相を究め、確實なる知識は獲難いものであるから、吾々は女子の知能發達のため、教育上相當の注意を要することゝ思ふ。

（第三）又女子の判斷は一般に直覺的と稱へられて居る。然らば直覺的とは、どんなものであるか。ミルは其の著「婦人の服從」中に、次のような說明を下して居る。曰く「女子の直覺方とは、どんなものであるかと云ふに、それは現在の事實に對し、迅速にして而かも正確なる見識をもち得ることである」と。併し迅速と云ふばかりでは充分な說明にならないので、詳はしく云ふなら、女子は元來感官の銳敏、觀察の精細、記憶の優秀、聯想の迅速なものであるから、事物に接した時に、徐にその理由を穿鑿するとか、道理に訴へて推究すると云ふような面倒な手段を採らないで、卽座に適切なる判斷を下し得ることである。其故マリオンは「女子の知能は直覺的である、卽ち直接事物に當り努力を要せず、方法を用ゐざるものである」と云ひ、エリスも「女子は恐らく何等意識的の知的活動を須ゐずして、事實其物から直接に容易く出立し得るものである」と云ふて居る。ロンブローゾ女史は、直覺を以て「女子頭腦の目なり」と稱え、「男子の心は推理に依りて事物の判斷を下すのに、女子は實際的にも理論的にも、絕對に直覺に依囑するものである」と云ふて居る。又ハートレーも次のように云ふて居る。「婦人は論理的と云ふより、より多く本能的であり、大腦的と云ふより、より多く直覺的である。男子は事實を穿鑿し檢査した後、その結論を見出すが、婦人は本能に依て同一の目的を達するものであつて、彼等は如何にしてとか、何故かと云ふよりも、彼等は知ることを知るとするだけである」と。若し實際斯樣に容易く判斷の出來るものなら、寔に便利なことであつて、バックルが、之を以て「女子に取りて尊い所爲である」と云つたのは正當である。併し如何に便利なものなりとて、種々不都合なこともある。（一）直覺で判斷する場合には、何等論理的說明と云ふものがないのであるから、當人自身は滿足して居るだらうが、他人にはさつぱり了解し難いことであり、意義の不明瞭なこともある。（二）直覺的判斷は殆ど本能的で、自發的衝動的に出來るものであるから、氣まぐれ、氣向きに依て變化し、爲に往々矛盾した判斷も起り得るので、その場合にはそれですむか知らぬが、全體として統一のない亂雜なる知識たるを免れないものである。（三）よし正確な判斷が下され得るとしても、その範圍に制限あり、何でもかでも直覺に依りて悉知される譯ではない。それでミルが「直覺力如何に便利なりとて、吾々は之に依りて自然法則を發見し得るものでない、義務の一般的規律に到達することも出來ない。抑も科學や哲學の對象たる之

等の法則は、徐々に事實の蒐集に努め、多くの經驗を比較し、長い間の努力研究の結果として、漸く發見確立せられるものであるから、如何に直覺力に秀でたからとて、學問上大なる效能はない」と云ふ風に論じて居るのは元より當然なことである。さう云ふ譯で、女子は直覺力に富むからとて、科學的哲學的の研究に長けて居ると云ふのではなく、多くは日常の世事卽ち人事界の出來事に就てのみ、所謂直覺的な迅速なる判斷を下し得るものである。其故女子の有する直覺力と云ふは、要するに思索的判斷力と云ふより、實際的判斷力と云ふべきもので、換言すれば世俗的に悧巧であり、才發であり、機智に富むと云ふに過ぎないものである。エリスが、バックルの著「知識の進歩に於ける婦人の勢力」と題する書物から引用して居る所を見ると、斯の如き婦人の才智は、特に下等社會に於て著しく現はれて居るので、旅行者が外國に於て言語の充分に通じない所から、大に困却して居る場合に、能く之を推察し容易に理解してくれるのは、此社會の婦人であるとのことである。又オースタラリアの殖民地に於ける孤獨生活で、男子は土人の語に通じないで、困却して碌に口もきけない時に當ても、彼の妻は比較的に能く土語を解し、當座の用事を辨じ得るとのことである。然らは如何にして斯くも實際的才智に長けるようになつたものであるかと云ふに、それはつまり女子の家庭生活、家事的經驗の結果である。何も特に教育せられたと云ふのではなく、又何等かの學習に依て得たと云ふのでもなく、全く日常生活の經驗が自然に女子をして、斯樣に練磨習熟せしめたもので、今日に至ては殆ど女子の本能とでも云はれるようになつてゐるものである。それは兎も角として、此の如き直覺的判斷は、不思議に能く適中し、男子が小首を傾けて居る間に、女子は敏捷に事相を感知して誤まらないものである。之は到底男子の模倣し得ざる女子獨得の智巧と、元より稱讃に價するものである。併しそこに又一つの缺點の存することを見逃がし難いものがある。(四)それは何であるかと云ふに、女子は前述の通り何等の努力を要せず、特に推究する所もなくして、恰も天來の福音であるかのように、單に手取り早く事相を直覺するのであるから、彼等は自然に獨斷的態度に走り、他人が道理を推して其の非を說くも、容易に自說を飜さないと云ふ弊に陷るものである。思索して得た思想なら、推理に依てその可否を理解せしめ得るけれども、直覺によつて所謂感知したものであるから、如何にも仕樣がない。若しさような場合に、物の分らぬ

奴と腹でも立てようものなら、徒に反抗心をそゝるばかりで、到底其非を悟らしめ難いもので、教育上大に注意を要することである。斯樣な缺點もあるけれども、女子は得意の直覺によりて、事に處し物に應じ、迅速に輕妙に適當なる判斷を下し得る所からして、彼等は仲々頓智に長け、臨機應變の處置を取るに巧みなものである。加ふるに辯才も亦之に伴ふので、三寸の舌頭を以て、有髯の男子を翻弄すると云ふように、詭辯を弄し、詭智を恣にするようなこともないではない。さうなると女子の才智は輕妙と云ふより寧ろ輕薄、迅速と云ふよりも寧ろ浮華と云ふか、將又卑劣と云ふか、浅だ厭ふべきものとなつて居る。所が世間の男子は、往々妻の才智なり辯才を利用して、自分の代はりに、妻をして外交談判の難局にも當らして居るので、益ゝ女子の特色を發揮せしめ、爲にその長所も短所も、共に顯著ならしむるようになつて居る。

（第四）今一つ女子判斷作用の特色を擧げることが出來る。それはその依他的なること、即ち他人の判斷に依屬し他人の所信に服從し、自分自身の獨立した見識を立てることの出來ないことである。」一體女子は日常普通の出來事に對しては、相當の判斷も下され、自分一箇の見識も立つべけんも、科學なり、哲學なり、宗教の如き困難なる問題は固より、さなくとも少しく複雜なる人事上社會上の出來事に遭遇する場合には、その浅薄なる知識を以て、その僅少なる經驗を以てしては、到底適當なる解釋なり判斷を下すことが出來ないので、自然他人の判斷に一任し、その意見に服從して毫も顧慮する所なきものである。「加ふるに、女子は元來生理的にも暗示され易い性質をもつて居るし、自然他人を信用し易い傾きもある上に、從來男子に依屬し、經濟的獨立とて全く出來なかつたような境遇にあつたので、爲に思想上でも他人に依屬し、特に自分の信賴する人の云ふことなら、一もなく二もなく何でも直に信用して、毫も疑惑の念を挾まない有樣にあるものである。」之を學生に就て見るも、女生は教へられた通りに信じ、男生のようにあたり構はず質問したり、理窟をこねまわし、殊更教師を苦しめるような態度に出ることの殆ど稀れなものである。それであるから、女子の知識は所謂鸚鵡的であり、確實性の少いものである。」エリスの引用してゐる「女子は彼等が見出したまゝに眞理を受け納れるが、男子は眞理を創造せんとするものである」と云ふ、ブルダッハの言は實際の事實である。尙ほエリスも之に就て次のように述べて居る。曰く「女子は普

に既に承認せられて居ることを容易く承認し、又自分自身コルベニカス地動說を考へ出すなどゝ云ふことの到底不可能なるものであるのみならず、大體男子のように、如何なる反對の間にも毅然として立ち、獨立自存の出來ないものである。されば女子の中から、バルザックの如く、徐に忍耐して事業の完成を企圖し、毫も世人の褒貶を意としないようなものを見出すことは、實に困難なことであり、更に女子の中から、ロージャー、ベーコンや、ガリレオや、ワグネルや、イブセンの如く抽象的な知識上の目的の爲に罵譽と嘲笑を顧みないで、敢てその成功に驀進せんとし、若しくは一敗地に塗みれて、毫も意に介せず、少しも意氣沮喪しないようなものを見出すことは、一層困難なことである。之れ要するに女子は他人の同情を求むること切にして、不屈不撓の獨立心をもたないからである。イブセンの戲曲「人民の敵」に於て見る如き英傑、即ち世界に於て最も强いものは、全然獨立し得る人なることを示せる英傑は、決して女子たることを得ない。若しも男子が全身麻痺症に罹ると、一般に烈げしい利己心と、自任の心を現はすものであるが、若しそれが女子であると、極端なる虛榮心を起すものである。一體斯樣な疾病は、潛在的に匿れて居る人心の傾向を放出して顯著ならしむるものであるが、男子では其の獨立心、女子では其依賴心を出現せしめる次第である」と、又以て女性の特性を察知するに足ることである。ロンブローゾ女史は女性の特色は愛他的であつて、利己心の少いものであるから、自然他人の支持指導を要するものであるとし、爲に幼時には兩親、續いて朋友、後には適當な男子の援助を必要とすと說き、若し生涯に於て適當なる男子の援助指導を受け難いような場合の起つた時に、婦人の採るべき途は二つあつて、其一は從來の實例なり傳說に盲從することで、他の一は自分自身に合理的に處置することである。併し第二の方法は普通以上の才能を以て惠まれた人に就て云ふべきことで、一般には第一の方法を採るべきだ、と論じて居る。」女子が天性依屬的服從的傾向を有することは承認するけれども、父權的家族制度なり、敎育習慣の影響も少くないので、此點では大に改善矯正すべきだと思ふから、吾々はロ女史のように、女子の獨立的見識を阻止し、殊更依他的思想を鼓舞するが如き意見には、反對せざるを得ない。

五　推理作用　之は若干の判斷に基いて、他の新しい判斷即ち結論を作る働きで、詳はしく云ふ

なら、或る判斷の間に存在する關係を認めて、更に高尙なる綜合を營む作用であり、而して之に演繹と歸納の二種ある次第である。そこで今女性の推理作用に就て、如何なる特徵を見出すことが出來るかと云ふに、一體概念作用や、判斷作用なり、推理作用などは、互に相聯關して居るものであるから、前述の通り、若し女子は概念作用に於て不得手であり、判斷作用に於て不正確なものがあるとすれば、その推理作用も亦不得手であり、不確實であるのは當然なことであり、又概念作用や判斷作用の特色からして、自然推理作用の特色も推測され得ることであるから、それ等の點は略して、他の方面に就き少しく論じて見よう。

（第一）女子の思想は主として演繹的なり　女子の考へ方は主として演繹推理に依るか、將又歸納推理に基いて居るかと云ふに、この爲に特に試みられた實驗的研究もなく、又學者に依て所說を異にしてゐるので、這般の決定には聊か苦しまないではないが、私は多年女生徒を敎育した經驗や、婦人に接した觀察に基き、女子の思想は主として演繹推理に依て居ることを公言し得ると思ふ。然らば如何なる論據があるかと云ふに、大體女子は保守的傾向をもつて居るものであるから、何に限らず在來の風習を墨守し、それに就て新しい意見とか、學說を立てるようなことを敢てしないものである。又他人の言論を容易に信用し、毫も疑惑を挾まないと云ふ樣な性質をもつて居るものであるから、宗敎心には厚く、迷信にも富んで居る。そこで何かの判斷を下す時に、豫て自分の守つて居る所、信じて居る所に基き、之に據て以て、その是非曲直を決定しようとするものである。換言すれば推理の根據となる大前提は豫てから出來上つて居るので、而かも其の眞僞を闡明しようとはせず、其の確否を吟味しようとはしない、全く確實なもの、毫も疑念を挾むべきでないと想定し、さうして之に基いて、個々の場合に就き判斷を下さうとするものであるから、明かに演繹の推理法を用ゐて居るのである。二二の例を擧げるなら、假令ば惡事を營めば、神罰を被むると云ふ豫ての確信があるので、偶々過て怪我でもすれば、直に神罰であると斷定したり、又は轉宅に方角の如何を氣遣ひ、出發に日取の如何を心配して、彼是其是非を論ずるなど、女子は特に迷信に富んで居るので、それが前提となつて演繹推理を營むことの如何に多いかを證明するものである。

驗、從來の慣例などを根據として、直に演繹推理を適用するものである。さう云ふ場合に、その大前提となるべき過去の經驗などの效力、確否又はその適用さるべき範圍などに就て、少しも顧慮する所なく、直に採て以て大前提となし、之によりて結論を出さうとするので、形式は自然と三段論法になつて居るかなれども、大名辭不擴充なる、論理上の大なる誤謬に陷つてゐることは、容易に看取せられることである。然らば何故女子は歸納法に於て不得手であり、餘り之を用ゐないかと云ふに、歸納法では一々の場合を見、それ等を比較し、さうして共通の點を見出さうとするものであるから、仲々面倒であつて、女子の頭腦では、かゝる煩勞に堪へない、何でも手取り早く處置したいので、徐に一々の場合を檢査したり、比較したり、概括などする餘裕がないからである。バックルも「女子は忍耐して事實を蒐集し、さうして推論するよりも、既得の觀念から推測して、容易く頓智も出し得る所からして、男子の心は歸納的に働くけれども、女子の心は演繹的に活動するものである」と云ふてゐるは、事實を穿つたものだと、私は思ふのである。然るに、ウエントは共の著「婦人の心」に於て「女子は概して複雜なる結論を編み出すには適しないが、比論や、歸納的結論をば、實際好んで且つ速になす所のものである。尤も結論と云ふても、具體的の事物に就て、女子は特に鋭敏なる觀察と、巧妙なる才智とを以て下すに止るが、又誤謬にも陷り易いものである。それで鋭利なる演繹法は、女子の不得手とする所である」と云ふて居る。女子の推理は、演繹、歸納何れに據る所多きやは元より比較上のことであり、又そのいづれにもせよ、嚴正なる意味に於ては不得手なのであるから、考へようによつては、ウエントの云つたように考へられないともないが、私は前述の理由でウ氏とは反對に、女子の推理は寧ろ演繹的であると信ずるものである。ウ氏の所說に據ると、歸納法と比論とを列擧して居る所から見ると、女子の營む歸納推理は、元より嚴正なる意味のものではなく、所謂通俗の歸納法と稱へられ、似而非なるものゝことであるように推察されるのである。果して然らば、吾々も亦屢々女子の推論中に之を見受けるのである。假令ば一度經驗した事柄と同じようなことに遭遇すると、女子は直に比論で以て輕々しく推測したり、又は一二の實例を以て、直に全般に通ずるかのように、早呑込、早合點をする場合も少くない。之等は元より似而非なる歸納法であつて、往々過誤に導くものであることは、云ふを須たないが、演繹、歸納何れか

比較的確實に、又より多く用ゐらるゝぞと云はゞ、私は寧ろ演繹法であると思ふのである。ウ氏の所說と同じように、私の畏敬する下田博士は、其の著「女子教育」中に、ロッチェの說を引き、結論として「要するに、女子の推理は演繹でない」と斷言して居られるが、之は如何であらうかと、豫て私の疑問とする所であります。所でロッチェは、どう云ふことを說いて居るかと云ふに「女子には一般を理解する力はあるが、分解する力は少い。女子の智能及び意志は事物の完了を望むものであり、隨て女子は全體を愛するが、分解するのは嫌ひであり、凡て物事を丸めることを好む」と。之には何も異論はない、所說の通りであると思ふが、併し私は女子は分解力に乏しいから、歸納法には不得手であると認めるのであり、又女子が全體を愛すると云ふのも事實であらうが、さればとて、個々の事實に就て比較的研究を遂げ、さうして之を概括すると云ふ力に乏しいのも事實であるから、私は要するに女子の推理は比較上寧ろ演繹的であると確信するものである。ハートレーも說明はしてないが、「男子の思考は歸納的で、女子のは演繹的だ」と云ふてゐるが、蓋し同一の理由に基くことであらう。

（第二）女子と學問の研究　前述のような次第で、元來女子は受感性强く、知覺は迅速で、記憶力に富み、想像作用亦旺盛なるに拘らず、獨り思考作用に至ては、甚だしく男子に劣る所あり、殆ど比較にならないような場合も見受けられないでもない。其故私はマリオン教授と共に、女子の教育上論理學を敎へる程必要なことはないと叫びたいのである。ロンブローゾ女史すら其必要を說いて居るのは、よく〳〵のことであると思はれるのである。そは兎に角女子は何故斯くも推理力に乏しく、論理的頭腦を缺いで居るのであらうか。それが若し女子の本性であり、生れながらの素質であるなら、如何に論理學を敎へたとて何の效能もない、無益の業となるだけであるが、私は必ずしも左樣には考へない。元より男女は性の分業上自然異りたる體格や體質、生理的機能を有するものであるから、その影響が知能にも及び多少の差異を生ずべきは、寧ろ當然のことゝ思はれるのであるけれども、今日の如く男女の間に大なる差異を見るようになつて居るのは、決して本質上のことではなく、つまり敎育や境遇、さては遺傳の然らしめたものであるに相違ないと、私は眞に確信するものである。其故彼等に男子と同樣の敎育なり境遇を與へたなら、彼等も亦必ずや哲學に

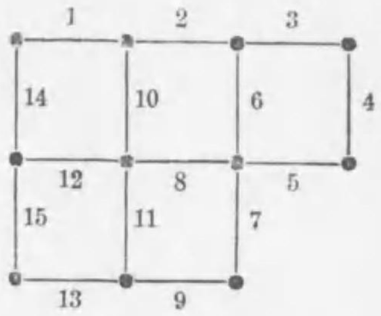
長ずべく、數學に秀づるべく、文學美術何れの方面にも、男子と相拮抗し得るに至るであらう。現に佛國巴里の、ソルボンヌ大學に於て教鞭を執りつゝある、キューリー夫人の如きは、その亡夫と共にラヂュームの發見者たる榮譽を荷ひ、又米國バザール女子大學で、曾て天文學の教授たりし、マリア、ミッチエル女史の如きは、夙に數學及び天文學の造詣深く、爲に米國にて美術及び科學會の一員に推薦せられたこともあり、又曾て瑞典のストックホルム大學で、數字の教授を勤め當時第一流の幾何學者であつた、コワレウスキー夫人もあり、更に經濟學者としては、英國の有名なるフオーセット夫人あり、米國ではギルマン夫人あり、又英國にては、コントの實證哲學を英譯して名聲を博したる、ハリエット、マルチノー女史もあり、女子にして學問に秀でたるものも少くない。モザンスの著「科學に於ける婦人」を一讀せんか、あらゆる方面に於て、女流科學者の輩出せし事實を親知するに足る次第である。然るに、ロンブローゾ女史は、夙に醫學博士の學位を有し、亡父の遺業を繼ぐ程の學才あるに拘らず、自分は女性として醫學の研究に不適當であり、又彼女の父の死に逢ひ、殆ど獨立的研究の不可能なるやの感想を告白して居られるが、一方から云へば、之は實に女性の純なる眞情を吐露したもので、女性らしい優雅な性情を表はされたものとも考へられるけれども、そのために、女子は徹頭徹尾科學的研究に不適當であり、又その能力を否認する證據には全然ならないものであると、私は信じます。尙ほロ女史は、コワレウスキー夫人の自白したる言をも引用して居る。コ夫人曰く「科學的研究は無用である、なぜなら、それは吾々に幸福を與へないし、又人道に利益する所もないからである。青年期を學問の研究に過ごすは氣狂ひであり、特に婦人にして斯樣な才能を有するは、不幸なことで、決して眞の幸福を見出し得るものでない」と。コ夫人は、大學教授として幾多の人才を養成し、非常な功績を擧げたので、マリオン教授も、大に稱讃して居る程であるのに、斯樣な告白を公にして居るは、如何なる心理狀態に依るものか、私には全く不可解である。或はコ夫人もロ女史と同じように、女性はやはり妻となり母となつて、主婦の働きを全うするのを最大の幸福であるとする信念から、少しく脫線した言辭を弄するに至つたものかとも想像されないでもない。併しそれにしても、學問の研究が女子に適するや否やと、その能力の有無論とは全く別箇の問題である。よしそれが女子に不適當であるとしても、さような才能を

缺いで居ると云ふ證據にはならぬ。否不適當な仕事でも、一旦決心してやれば、男子を辟易せしむる程の、非常なる才能を發揮し得る本質を備ふることの、立派な證明となるものである。尙ほロンブローゾは、その著「天才論」に於て、女子にして天才と稱せらるべきもの甚だ少く、よしありとするも、到底男子に及ばぬものがあるとし、又メービウスは其の著「性及び退化」等に於て、女性の本領は生殖作用にありとし、生理上から婦人の心的劣等を說いて居るが、天才論や男女優劣論は後に詳論することゝし、私は玆に之等の意見に對し、モザンスやデンスモアーの所說を擧げ、以てその答辯と致したい。モ氏曰く「斯樣にして、あらゆる無能と偏見と反對の制度の下にあつてすら、多くの婦人が知的活動の凡ての方面に於て、顯著なる功績を遂げ、彼等女性の爲に不朽なる名譽を得たことは確實なことである。又婦人達はあらゆる敎育上の便宜から阻害されたるにも拘らず、サッポーやヒパチアーの時以來、男子と同等に、否屢々より以上に、最も高尙なる精神的偉業を奏し、以て男性を補佐したことは、爭ふべからざる事實である」と。又曰く「過去に於て女性が成遂げなかつたことのある爲に、又は知識の發展に貢獻せし所が、比較的に少いと云ふので、女性は科學的研究なり、高尙なる知識の獲得に對して、無能なるものであると斷言するは、實に詭言僻說と云はねばならぬ。何となれば、女性は今日に到る迄多くは婦人室の中に籠居せし侏儒に過ぎなかつたからである。男子とても、若し女子と同じような境遇の下にあるべく餘儀なくされてゐたならば、現在女子が、成遂げた功績以上のものを成就せしや否やは疑問である」と。又デ氏は其著「男女同等論」中に、次のようなことを述べて居る。曰く「男子は數ふべからざる程の長い年代の間に錬へられた爲に、概括や、抽象や、發明などの能力を發達せしむることが出來たのであるが、女子は長い間、家內にのみ閉ぢ籠りて、些々たる家事にのみ沒々としてゐた譯であるからして、遂に之等の能力を發達せしむるに至らなかつたのである。斯樣な境遇の下にありては、元より推理力や、考察力の發達しないのが當然であるが、それにも拘らず、尙ほ女流の學者や、思想家の出たと云ふことは、實に驚くべきことである。されば吾々は、女子にして知能の發達した人の少いことを怪しむよりも、寧ろ其の多きに驚く次第である」と。共に女性の爲に、萬丈の氣焰を吐いたものと云ふべきである。そこで今日女性の知能は、一般に男子に比して劣る所あるは、爭ふべからざる事實であるけ

れども、併し充分に知能を發達せしむべき境遇と教育とを與へられたる男子と、之を與へられなかつた女子とを、何等の斟酌なしに、比較すると云ふは、甚だ不公平な話である。女子は男子と比較さるゝ場合、此の點に就ては特に斟酌せられて然るべきものと私は思ふのである。若し女子に男子と同樣の教育なり境遇が與へられたに拘らず、尙ほ女子の知力が男子より劣つて居ると云ふことであるなら、それこそ確實に男女の知力は、本來非常なる差異を有するものと承認してよろしいのである。之に關して私は、タムソン女史のなせる實驗的研究の結果を示めし得ることを喜びとするものである。之に依りて吾々は、如何に教育が女子の知能を開發せしめ、さうして段々と男女知力上の差異を減少せしむるものなるかを知ることが出來ると思ふ。

（第三）タムソン女史の實驗的研究　女史は工風力（インゼニユイチー）の比較を試みたのであるが、其の爲に同一の問題を男女の學生に課して其の答案を求め、さうして之が解決に要する時間を調査し、その長短に依りて、男女の知能を比較したのである。所で問題が一方に偏すると、人により不公平になる恐れがあるので、五種類の問題を提出し、單に知覺の迅速なることを要するようなものから、抽象的推理力を要するようなものにも及び、多方面に亙つて比較を試みたのである。

（第一問題）之は主として、視覺に依る知覺の迅速を計るものであるが、最初十五本の「マッチ」は上圖の如く五個の方形をなすように、机上に排置せられた。さうして先づ被驗者に向ひ、以前に曾て上圖の如き形のものを示されたることありやと尋ねたるに、五十人の學生中只だ一人の女學生は、曾て之を見た、併し何の爲であつたか忘れたと言ふことであつたから、其儘被驗者の中に加へて置たが、實驗の後此女學生は、僅々十秒時にして、問題を解決し得たことが分つた。それでどうも以前の經驗が、大に影響して居るように思はれたから、此女學生は例外として省いた。それは兎に角として、玆に提出の問題はどう言ふものであつたかと言ふに、「單に三個の方形が殘るように、三本の「マッチ」を取除けること」であつた。



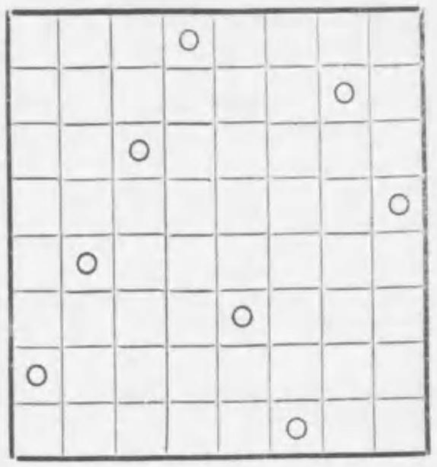
假りに一本の「マッチ」を區別する爲に、數字を以て番號を付けて見ると、2 13 15 の三本を取除け

ることに想到せば、此の問題は解決せられるのである。そこで實驗の結果を見ると、解決の爲に要した時間は、十秒時のものを除けば、他は五分より十五分程であつた。さうして男女を比較して見ると、元より個人的差別はあるけれども、大體に於て女子は男子よりも、迅速に解決することを得た。

（第二問題）之は簡單なる數字の問題であつて、第一問題よりも少しく推理力を要するものである。即ち「或る人が川の中で泳いでゐたが、流れに從て川下へ泳ぐは、流れに逆つて泳ぐより、三倍早く泳ぎ得ることを發見した。所で水流は一時間に一里の割合であつたとすれば、其人が流れない靜かな水中で泳ぐ場合には、一時間幾里の割合で泳ぎ得るや」と言ふのである。之に對し二里と言ふ答を得たなら、正しく解決したものである。

此問題は四十五分乃至一時間以內に解決せしめ、それ以上になつたら、容赦なく失敗者と見做したのであるが、實驗の結果如何にと尋ぬるに、男女間に大差なく、强て言へば、少しく男生の方が優つてゐた。最も早く解答した二人の男生は、約一年前に數學の教師を勤めた經驗のあるものであつたが、女生には斯樣な經驗を有するものが一人もなかつたので、若し此の男生二人を例外として取除けたならば、男女間の差異は全く消失することになつてゐる。

（第三問題）之は知覺の迅速と共に、推理力を要するものであるが、先づ西洋將棋盤の如く、(8×8＝64)六十四個の方形を有する圖面を與へ、さうして「八個の小石をば、右方形の左右、上下並に對角線的に一線となれる一列の上に、一個（二個にならぬよう）づゝ置く方法」を考案せしむるものである。



此方法は色々あつて、上圖に示めすものは、其一法であるが、實驗の結果を見るに、男生は著しく迅速であり、隨て工夫力は大に優良であると認められた。尤も女生の中二人は、何れの男生よりも迅速に解決したが、七十五分以上も考へて、遂に失敗したものも二人あつた。之に反して男生は、十五分乃至三十分間に解決したものが澤山あつたので、つまる所男生の勝利に歸し

た。尤もタムソン女史は、這般の結果に就て、餘り重きを措てゐない。なぜかなれば、大概の女生は斯樣な問題に就て興味を有たなかつたので、甚だ不熱心に作業したが、之に反して男生は一層多くの興味を有つてゐたようであり、隨て熱心に工夫した態が見えたからであると言ふて居るが、併し男生は實際興味の如何に關せず、與へられた問題に對し、實用の如何を問はず、努めて工夫したのかも知れない。さうなると單に工夫力の如何と言ふことでなく、一體此の如き非實用的問題に對する、男女の精神的態度に於て、差異を認めることが出來るかとも思ふのである。

（第四問題）之は器械學上の問題であるが、視覺に關する實驗の際、光覺の識域を檢査する爲に用ゐた所の器械を示めし、「如何に之を取扱ふべきか」と、其方法を工夫せしめたのである。此器械は男女何れにも全く新奇なものであつたから、比較試驗をするには甚だ都合のよいものであつた。器械は至て單純な原理に基いて出來てゐるものであるけれども、各部分間の關係を見出すには、多少の困難を覺ゆるようなものであつた。又此器械は他に類のないものであるからして、他の器械に就て熟知する所があつても、直接には何等影響しないものであつたが、何分精密な機械のことであるから玆に詳はしく說明することの出來ないことを遺憾とする次第である。

所で實驗の結果は如何にと言ふに、男女間の差異は著しいものではなかつたが、男生は稍々優良なる成績を示めした。

（第五問題）之も亦器械學上のものであるが、先づ被驗者に至て簡單なる木製の錠を示めし、且つ之は何人も共用途を熟知せる器具の模型であると告げ知らせ、さうして「其何物なるや、又如何に使用すべきや」を尋ねたのである。

此問題に就て、男生は明かに共解答の優良なることを示めした。蓋し男生は一般に器械學上の教育を受けて居るので、斯樣な種類の問題に就ては、特に其卓越せる知識を有つて居るものであると、タムソン女史は辯解して居る。

以上五個の問題に就て、實驗の結果を總括して見るに、男生は第三及び第五の問題に於て大に優り、第四に於て稍々優り、第二に於て殆ど同等で、第一に於て劣ることになつて居る。それで若し器械學上の問題は、特別として取除けて見ると、男女各一問題に於て優り、又他の一問題に於ては、

殆ど同等と言ふことになるから、要するに男女間に差異なきことゝなると、女生に取て都合よき解釋をタ女史は試みて居る。

尙ほタムソン女史は、種々なる學科中より、「カレッジ」の學生に相當する、二十五個の問題卽ち、(一)英文學五個、(二)歷史六個、(三)物理學四個、(四)數學三個、(五)生物學三個、(六)化學二個、(七)心理學一個、(八)雜一個を與へ、さうして男女學生の知識を比較した。所が其結果として、(一)英文學では、女生は明に優り、(二)歷史では、男生少しく優り、(三)物理學では、男生明に優り、(四)數學では、男女間に差異なく、强て言へば、女生の方少しく優る程であり、(五)生物學では、男生の方に非常に勝れたものと、劣たものと兩方あるので、概して言ふと、女生の方少しく優り、(六)化學では差なく、(七)心理學では、男生少しく優り、(八)雜問では、男生の方に優劣兩極端を現はしたので、男女間の優劣を定め難いことを發見した。由是觀之つまる所、全體に於ては、男女間に差異を認めないことゝなる。尤も女生は一般に文學的、男生は一般に科學的の知識に於て、優るようであるが、タムソン女史は、之を以て性的差異とせず、恐らく其學科選擇の差に基くことであらうと斷定して居る。併し私は男女學生が、自ら學科選擇の上に、いくらなりとも差異を生ぜしむるは、抑も男女互に其素質を異にするものあるに由ることを信ずるのである。兎に角此實驗に據るも、教育と境遇は、男女知能上の差異を生ずるものであることを證明して居るから、女子にも男子と同樣の教育なり境遇を與へたならば、よし男女は全然同一のものとなすことは出來ないとするも、少くとも現在兩性間に存在する知能上の非常なる差異をば、漸次減少せしめ以て互に相提携するに足るものとなし得べきは、私の確く信じて疑ひなき所である。併し如何程女子の知能が發達しても、女子は體質上感情的ならざるを得ないものであるから、其點に於て何時迄も女子の特性は現はれることゝ思ふ。

第二篇　感　情　篇

第八章　女性と感情

一　女性はより多く感情的なり　女性は一般に男性よりも、一層感情的であると云はれて居る。マリオンは「女子の敵たると、味方たるとを問はず、凡ての觀察者は、感情が女子の主性たることに一致して居る。オーギュスト、コントは女子を情性（ルセワクスアフェクチフ）と呼んだ程である」と云ふて居る。以多利の詩人ロザリア、デ、カスツロは「女性は造物主から、想像と感情の只だ二つの絃を以て造られた竪琴（ハープ）である」と云ひ、又或る佛蘭西人は有名なる一婦人を評して「婦人は決して考へることをしないで、只だ感ずるばかりだ」と云ふたこともある程で、婦人の感情的なることは、全く疑ふ餘地なしと云ふてよからう。若し之を以て事實とすれば、其の原因は果して那邊に存することであらうか、元來先天的に然るものであらうか、又は教育や境遇によつて後天的に起つたことであらうか。

私はその然る所以のもの、元より教育や境遇などの影響に依ることも少くないと思ふけれども、又女子に特有の體質なり傾向の存するあつて、自然にその特性を發揮するに至らしめたものと信じてゐます。依て今雜とその種々なる原因、又は理由に就て說明して見よう。

（第一）女子は體質上保守的傾向をもつて居るものであるから、それが自然に精神上にも影響して、同一の傾向をもつようになつたのではないか。一體吾々のもつて居る精神活動の中で、感情は知識の進取的なるに對して、保守的と云はるゝものである。なぜかなれば、知識の活動は其認識する事物に就て、何處迄も穿鑿を進め、分解に分解を重ね、さうして新しき認識、新しき說明、新しき眞理に到達せんとすることを以て、其本領となすものであるが、之に反して、感情は其一たび意識に現はれ來るや、その儘總括的に之を繼續せんとするもので、若し少しでも分解的、穿鑿的の態度を取らんか、直に消失せんとする性質のものであり、隨て感情の存在には、なるべく舊態を保存せんと、云はゞ保守的態度を取るものである。然るに女子の精神活動は概して保守的傾向を有つて居るものであるから、自然進取的なる理性の活動は鈍くなり、その反對に感情の働きが優勢を占め

るようになつて居るものと思はれるので、女子の感情的なる一つの理由となる次第である。

(第二)女子は少しの刺戟に對して刺戟され易く感動され易い、即ち感動性に富んで居るものである。之を實際に徵するに、(一)女子は一體に男子よりも赤面し易く、又涙もろくて能く泣き、又些細なことにも能く笑ふものである。(二)又その顏面は一層表情的であり、動搖的であり、換言すれば、神經筋肉的感動性(ニューロマスキュラー)の强いものである。エリス曰く「吾々若し倫敦又は其他の大都會で、群集雜踏せる街路に在りて、通行中の男女の容貌に注目せんか、男子は一定の變動しない顏付をして居るが、女子は之に反して、往々口を尖らしたり、額に皺を寄せるなど、種々なる表情を呈するものなることを認め得べし」と。斯樣な表情は元より、自分には氣付かず、全く無意識的に起ることが多いので、要するに、神經筋肉的活動の遊戯とでも云ふべきものであり、又以て感動性に富める一例となすべきものである。(三)又女子は概して不意の出來事に接して驚愕すること、例令ば大聲を出したり、又は飛び上りなどして、心の平靜を保つことの出來ないものである。癲癇や舞踏病は驚愕に基いて起ることもあるさうだが、之等の疾病は女子に多い所を以て見ると、女子は容易く感動するものであることが分かる。(四)平生女子は謹愼して居るので、短氣とか癇癖とか云ふべき、所謂怒りつぽい性質は餘り見受けられないかも知れぬけれども、少しく制裁のない自由な所か、又は刑務所に於ける囚人なり、癲狂院に於ける患者などに就て見ると、女子の方が男子より一層多く這般の癇癖性を發揮し、烈げしい破壞的動作を現はすものであるさうである。クローストンの云ふて居る所に據ると、癲狂院では女室の方男室よりも十倍も噪がしく、又青年期の患者にありて、女子の破壞性は男子の喧嘩に相當するものだとのことである。以上は何人にも外部から認識されるものであるが、尙ほ普通人には氣の付かない、醫師か又は特別の方法に據らなければ、分らないような事柄で以て、女子の感動性に富む事實を擧げるならば、(一)眼球內に於ける瞳孔は、輕微なる刺戟によつて、不隨意的に擴がるものである。之は單に光線の强弱や、又之に應ずる眼球の調節等によるばかりでなく、頸なり腕などを抓つたり、突いたりするような皮膚上の刺戟、又は大聲を耳にしたような場合、その他種々なる發情興奮狀態に於ても起り得るものであるとのことであるが、此の如き現象は、モエリの實驗に據れば、女子や子供に多いとのことである。(二)女子の心臟は軟弱

であると云はれて居るが、モツソーの研究に據れば、男子では少しも影響しない程の輕微なる刺戟が、女子にありては、心臟の鼓動を高めるとのことである。又睡眠より覺醒した時に、女子は子供と同じように、脈搏を多くすると云ふことは明かな事實である。ローゼンタールの說では、女子に「ヒステリー」の多いのは、つまり女子の血管運動系統（バソモーター）が弱くて、その抵抗力が少いことに原因するとのことである。又絲內障と云ふ眼病の女子に多いのも、同一の原因に歸するとのことである。

(三)モツソーやベルカラニの研究に據ると、膀胱に於ける感動性は、身體中にて最も銳敏なるものようである。之等二學者の云ふ所に據ると、何れの感神經にでも微弱なる刺戟が來り、又少しばかり血壓が高まつても、又は聊かでも呼吸に變化を生ずるようなことがあると、膀胱は直に收縮して反應を呈するものである。依て膀胱收縮檢査器を膀胱に接觸せしめ、さうしてそが收縮の狀況を檢査した所が、被驗者の手背に輕く指を觸れた位のことですら膀胱に大なる影響を與へ、著しき收縮を來したことを發見した。尙ほそればかりでなく、被驗者が話したり、話しかけられたり、又は少しばかりの心勞でも、皆同樣の結果を現はしたと云ふことである。斯の如く膀胱は銳敏なる受感性を有つて居るもので、吾々の身體中之に匹敵するものはないとのことで、ボルンは膀胱を精神の鏡だと云ひ、エリスは精神は膀胱の鏡だと云ふて居る。それで之が一層烈げしくなつて、痙攣性のものとなつた時には、遺尿を患ふようになるさうであるが、それは子供や若い娘たちに於て、能く見受けられることであるから、之れ亦女子が感動性の强いことを示める例證となるものである。尙ほ種々なる他の器官に就ても、若し精細に檢査したならば、同じような反動性を有つて居ることを示めすであらうが、要するに、女性は比較的大なる腹部を有し、又そこにある諸器官は比較的大なる生理作用を營むものであるから、自ら女性の神經筋肉的感動性を顯著ならしめて居るのであると、エリスは說いて居る。

然らば、何故女子は斯くの如く感動性に富んで居るのであるかと云ふに、(一)女子の受感性は銳敏であり、隨て刺戟され易いと云ふことも、その一原因となつて居る。尤もロンブローゾは、女性の感動性の强いことを承認しながら、その受感性は鈍いと說いて居るが、どうも私には了解の出來ないことである。感覺の鈍いものが、何故感動性に富めるや、刺戟を感ずることが銳いから、自然

所謂神經筋肉的感動性を強くするのではないか。(二)一體貧血症のものは特に著しい感動性を有し、一寸した刺戟にも反應せざるを得ないようになつて居る。然るに女性の血液は比較的稀薄であり、又月經もあるから、女子は自然に貧血症に罹つて居るとも云へるので、その爲に感動性も強いと云はれるのである。(三)此の貧血症と連關して考へられることは、女子の疲勞性に富んで居ることである。一體子供や、神經質の人は、少しの勞働にも疲勞し易いものであるが、之と同じように女子は生來強き疲勞性を有つて居るので、その感情でも動作でも、現はれる時は烈げしいが、それは暫時で終はり、長く續かないものである。之は學校の女教師、郵便局の女事務員、又は商店の女店員などに就て、能く見受けられることであつて、つまり女子はより多く疲勞性を有つて居るから、自然感動性も強いのである。要するに、女子の體質なり、神經素質は男子と趣を異にして居るので、爲に感動性も著しく、隨て感情も起り易いのであるように思はれる。

(第三)更に女子の感情的である一原因として、私は女性特有の生理作用、即ち月經のあることを指摘したいと思ふ。月經に就ての說明は普通の生理書にゆづり、玆には省略することにするが、要するに、月經中は多量の血液を排出するから、自然に貧血を來す譯であり、隨て感動性も增し、感情も起り易くなるものである。「元來月經の身體に及ぼす影響は少くないが、特に神經の緊張や、筋肉の大なる興奮が起り、爲に反射作用は迅速になり、脚部に微かなる痙攣も生ずるものである」と、エリスは云つて居る。さう云ふ譯のものであるから、その精神作用に及ぼす影響も少くないことと思はれる次第である。「依て健康なる婦人と雖も、月經中には受感性は一層强くなり、又一層容易に暗示されるようになり、多少克己力を失ふものである」と、エリスは述べて居る。尙ほブルダツハは「月經中に、婦人は一層催眠術に罹り易くなり、隨てあらゆる催眠狀態の著しく現はれるものであり、又大層氣が變はり易くなつたり、發作的の暴行、憂鬱なる氣分も起り、さては深刻なる煩悶、懺悔の心を惹起したり、又嫉妬心の發作も生ずるものである」と云ひ、又クローストンは婦人月經中の精神狀態として、次のようなことを云ふて居る。曰く「月經の將に始まらんとするに際して、婦人は稍刺戟され易くなり、禁止作用を失ふ傾きあり、又月經の初日及び第二日に於ては、元氣稍減退し、精神的癱瘓意氣稍沈の傾向あり、又月經後一週乃至十日間に於ては、精神力非常に充溢

し、感情も亦興奮するようになり、爲に姙娠力を增進す」と。之等の言に徵するも、月經は女子の感情生活に大なる影響を及ぼすものなること殆ど疑ふべからざる次第である。斯くてその甚だしきに至るや、殆ど發狂せるかと思はるゝ程感動性や、憂鬱性は亢進し來り、さうして「ヒステリー」的發作や、偏頭痛等は屢々起り、又色情狂、飲酒狂、盜心狂及び諸種の憂鬱狂を惹起するものであるとのことである。月經は斯くの如く種々なる精神病の原因ともなり得る譯であるから、その如何に女性の精神狀態に深き關係を有するやを證明するものである。

（第四）女子內臟の特質も亦女子として、一層感情的ならしむる一原因ではあるまいか。女子の內臟に就て、如何なる特質を認め得るか。先づ胸部の臟器に就て見るに、心臟は幼時に於ては、男女間に差異なく、寧ろ女の方大きな位である。而して十四歲から二十歲頃迄は、女の方明かに大きいが、その後には男の方大きく、且つ丈夫なものとなるものである。又肺臟も最初は女の方が大きいが、二十歲から三十歲頃になると、男の方が大きくなると云ふことである。更に腹部の臟器に就て見るに、胃は女の方割合に大きく、腸も亦女の方長いとのことであり、又肝臟は如何にと云ふに、やはり女の方割合に大きく、脾臟は女の方絕對に大きく、腎臟も女の方割合に大きいと云ふことである。尙ほ膀胱に就ては、學者の說が一定して居らぬが、女の方大きいか、又は小さくても、貯尿力は大きくあると斷言していゝらしい。之を要するに、胸部の臟器は男の方稍大きく、腹部の方は女の方稍大きいようである。然るに這般の差異は、男女の精神上に著しい相違を來たして居るものではなからうかと思はれるのである。希臘の哲人プレトーは、勇氣は胸にあり、慾情は腹より起ると云つて居るが、之には大なる眞理が含つて居るようである。一體に男は勇氣に富み、筋力も旺盛であるが、之は主として心臟と肺臟の强大なるに起因するところであり、之に對して女の感情的なるは、その腹部內臟器の大きく、隨て腹部の張て居ることに、よるものと信じて差支へないようである。加ふるに、女には卵巢あり、子宮あり、特に姙娠することもあるので、益々腹部の働きは男より一層多くなり、爲にそれが精神作用にも影響して、女の感情を興奮せしめるようになつて居るのであると思はれる。キャンベルは、その著「男女間に於ける神經組織の差異」に於て、內臟と情緒との關係を述べ、進んで婦人の感情に就き、次のように云つて居る。曰く「婦人は男子よりも、一層複

雜にして廣大なる生殖系統を有つて居るから、自然比較的に一層大なる內臟神經の展開を有し、爲に之に依つて生ずる感情も亦多量な次第である」と。

（第五）更に女子從來の境遇なり教育や遺傳も、與つて大に關係あるように思はれる。之れ迄女子は男子と遂ひ、高等な教育を受けてゐない爲に其の知能を充分に發達せしむることが出來なかつたので、自ら感情の活動を旺盛ならしめ、隨て感情的と稱へらるゝようになつたものである。誰れでも理性の活動盛んなる時は心も自ら冷靜な態度を取るものであり、自然に感情特に激情の亢進を制止することも出來るものであるが、女子の理性は未だ充分に發達してゐないので、妄りに感情をして活躍せしむるに至つたものであり、それが長い間の遺傳で、遂に女性の特質となつたものである。又社會的境遇から云ふても、女子は何時も家內に蟄居し、着座的生活多く、往々無爲閑散無聊に苦しむようなことが多かつたので、男子のように外部に活躍して氣の晴れる遑なく、爲に種々なる情緒を釀成し易い狀態に置かれたからではあるまいか。マリオンも此點を力說して居るが、どうもさう云ふ風に考へられるのである。

（第六）最後に女子の本領、婦人の天職とも云ふべき、人の妻となり、母となつて、その子を育て養ふ所からして、母性愛の發露となり、愛他心の實現を見るに至るので、婦人は仁愛の權化、慈悲の女神とも稱へられ、あらゆる愛情の源泉とも考へられて居るのである。女子を感情的と云ふに、多くの場合、頗る輕侮の意を示めして居るようであるけれども、一たび思ひを母性愛や愛他心に致す時に、輕侮所か、何物にも比較し得ざる尊いもの、實に神々しいものであるように感ぜらるゝのである。

二　女性の感情的なることに就ての問題　女性の感情的なる理由は、大略前述の通りであるが、それに就て尙ほ考慮すべき問題は、（一）女性の感情的なるは、元より理由のあることで、事實疑ひないものではあるが、それは毫も矯正するの必要なきものにや、今少し理性的のものに變更する必要はないかと云ふことであるが、私は大にその必要を認めるものである。元より女子の愛情に富んだり、同情心の深いのは、實に尊ぶべきこと、望ましいことであるけれども、之と共に、如何に教育や境遇の遺傳の結果とは云へ、女子の恐怖心や、嫉妬心や、迷信に富んで居るのは、啻に女子とし

てのみならず、又人間としても、實に悲しむべく、厭ふべく、又笑ふべきことであるから、私は適宜に之を矯正し改善の途を圖りたいと思ふものである。マリオン教授も教育者の立場から、女子の神經過敏で、感情の激發する如きは、寔に厭ふべきことであるから、その感性を理性の下に從はしむるようにせねばならぬと說き、更に「男女兩性常に理性と感性何れか、一方により多く傾くものであることは疑ふべくもないが、併し教育は女の愛に理性を與へ、正義をその準則となし、又男の冷かなる理性に愛の翼を結び付けることの出來るものであり、又必要とするものである」と云ふて居るが、實に至言と云ふべきだ。尙ほ女流研究者の意見を親つて見るに、ハートレーも女性感情の漸次理性化するの至當なるを認め、ミーキンは、慣習の奴隷、衣裳好み、虛僞、ヒステリー的、嫉妬、理性的より寧ろ感情的等、幾多婦人の缺點を擧げ、そが矯正の必要を力說して居る。又ロンブローゾ女史すら、理性に依て導かれざる愛他心は人生を毀損するものとし、隨て婦人は如何にその愛他的本能を活躍せしむべきかを、理性から學ばねばならぬ、換言すれば感情と知能の調和的發達を圖らねばならぬと云ふような意味のことを熱心に說いて居る。元より當然のことではあるが、婦人として何れも公平な意見を吐いたものである。(二)斯く矯正なり改良を必要とした時に、それは出來得べきことであるか、どうか。若しそれが到底不可能のことであつたなら、勞して效なきことならば、寧ろ止めたがよい。併し私は之を過去の事實に徵するも、將又現在の狀況に照すも、這般の改良は出來得ること〻信ずるものである。なぜと云ふに、現在野蠻人間では、男女共に同じように感情的で、さうして迷信にも富み、又感動性强くして種々なる催眠現象をも呈して居るが、知識の進步して居る文明人間では、さう云ふことが餘程少くなつて居る。又今日の文明國に於ける男子も、數世紀前迄は著しく感情的であつたものであるが、それが教育と境遇の改善によつて、大に理性的のものとなつたのである。さすれば女子の現在感情的なるも、決して變更し難いものではない、否現に今日の若い女子達も同じく感情的と云はれながら、その祖母や曾祖母は勿論、その母親達に比べて見ると、餘程變化して理性化して居るのは、明かな事實である。又同じく若い娘たちの間でも、教育の有無、知識の程度、階級なり職業の如何により、その發情に非常な差異あり、到底同一類の女子とは思はれない程である。して見れば、今後も教育と境遇の如何に依り、女子の性情を

矯正變更し得るものであると信ずる充分なる理由を有する次第である。特に近來女子の體育も盛んになり、戸外運動は大に奬勵されて居るので、漸次女子の體力なり、神經力は一層强健なものとなり、爲に疲勞性なり、感動性なども減少して來る傾向を示めし、又知育も段々と發達し、男子と殆ど同樣、又はそれと大差なき程度に迄進んで來たので、女子も自ら一層理性的のものとなり、爲に妄りに感情の興奮するようなことの、漸次減少しつゝあるは見逃すことの出來ない事實である。

(三)然らば、女子の感動性はどの位減少し、さうしてどれ程理性的のものになることが出來るのであるか、全然男子と同一なる狀態に達せしむることが出來るのであらうか。世間では往々男女に全然同一の教育を施し、全然同一の取扱ひをなし、又同一の職業に從事せしめたならば、男女の差別は全然消滅して了ふように考へて居る人もあるようだが、私はよし偶然的にもせよ、又相對的にもせよ、既に男女の性的差別を見るに至りし以上は、如何に教育と境遇を變更するも、女子をして全然男子と同一の狀態に達せしむることは、不可能のことゝ信ずるものである。女子も男子と同じように、教育と境遇に依て、元より理性的のものに漸々進歩するには相違ないけれども、元來女子には特別なる體質あり、生理的特性もあり、大に男子と趣を異にするものがあるから、いくら進歩したからとて、到底男子と全然同一の狀態に達することは出來ないことであらう。さすれば男女共に教育や境遇の如何によりて、益々理性的のものに進歩すべけんも、男子は何時迄も一歩先きにあり、女子は比較的感情的たるを免れないものである。斯樣な譯であるから、如何に女子の性情を矯正する必要ありとて、這般の制限あることを忘れてはならぬ。併し之はいくら男子の性情を變更し、その冷酷に流れ易いのを、溫情的なやさしいものに改めようとしても、それは到底女子と同一な程度に達せしめ難いのと同じことである。(四)女子の比較的に感情的なるは、生理上已むを得ない、自然の決定であるとした時に、いづれの邊迄その素質特性に基いたものであり、いづれからが、教育や境遇の如何によつて起つたものであらうか。換言すれば、いづれ迄が必然的のことで、いづれからが偶然的のものであらうかと尋ねなければならぬ。併し之は到底明かに答へることの出來ないものである。元來男子は理性的、女子は感情的だと云つた所で、全く比較的相對的のことであり、又何も最初から其の範圍の確定して居るものではなく、特に又理性や感情活動の範圍

を數量的に計算することは出來ないから、吾々は單に女子も男子と同じように、段々と理性的のものになることは出來るが、それにはいくらか制限があつて、到底男子と全然同樣にはなれないものであると云ふに止めねばならぬ。それは如何に男子の感情を精練しても、そこに多少の制限があつて、女子と全然同じように優雅なものにはなり得ないと同じことである。(五)斯く女子は男子と異り、つまり感情的のものたるを免れないとした時に、それは女子にとりて不利益のことであらうか、又人類にとりて不幸なことであらうか。或は女子は感情的であると云ふので、之を輕蔑したり、劣等視したり、又は男女をば全然同一の狀態に達せしめなければ、到底人類の幸福は獲得されないように思ふ人もあるけれども、私は全く反對である、さう云ふ考へには絶對に贊成出來ない。元より女子の感情的なのは矯正を要する點少くないが、それは男子の理知的に對し改良を要するものあると同樣で、男女何れとも不完全な人間で、漸次將來の理想に向つて進歩するには、現在の矯正改善を必要とするものであるから、矯正なり改善すべきものあるからとて何も輕蔑する理由は成立せぬ、輕蔑するなら男女共に人間を輕蔑するがよい、隨て又女子のみを劣等視する譯もない、この點では男女兩樣である。尙ほ緒論に於て述べた通り男女性を異にするは、分業の然らしむる所であり、その爲に生ずる心理的差異のことであるから、決して嫌惡すべき性質のものではない、寧ろ當然の結果として大に歡迎すべきことである。男子がその卓越せる理智を以て、社會に活躍すると同時に、女子はその優雅なる心情を以て、人生を美化德化し、兩々相待て人類の進展幸福に資する譯である。其故私は女子の感情的なるこそ、實に深い意味のあることで、人間として望ましいことであり、尊ぶべきことであり、女子の天職は此處から出て來るもので、若し之を失つたら、女子の女子たる特性はなくなり、存在の價値も消えて了ふことであると思ひます。加之若し女も男と同じような理知的のものとなり、其の間に何等の差別も認められないことになつたなら、爲に男女相互に引付ける力もなくなり、互に相愛し相助くることもなくなるであらう。つまり男は勇敢で女は柔和、男は理性に長じ、女は愛情に深いと云ふので、雙方互に興味をもち、共に團結して、以て之を小にしては家庭をつくり、之を大にしては國家組織の基礎ともなるので、人類の發展、社會の幸福は實に此處に起因するものであるから、女子は永久に感情的であつてほしいと、私は思つ